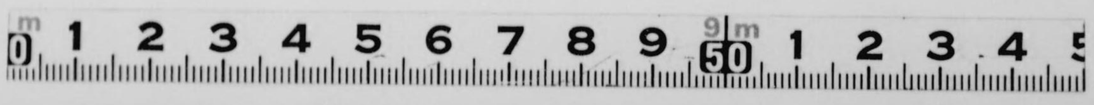
379
12a



379-12

國

譯禪宗叢書

第七卷

11. 4 25
內交

國譯禪宗叢書第七卷凡例

一、本叢書第七卷には碧巖集(十卷)を收む、碧巖集は、雪竇禪師の頌古百則に基きて、圓悟禪師の著述せられしものなり。此の書、唐本には蜀、福、張の三本あり、本文の異同少からず。且つ表題に、或は碧巖集、或は碧巖錄等の差異あり。今次國譯に際しては主として張本に據り、且つ卷末の原文も亦之に從ふ。

一、碧巖集の我邦に舶載せられたる年月詳ならざるも、足利初期以來、慶長以前に、既に數版の刻本ありて、其の多くは元槧本の覆刻本なり。間々我國刻工の書字によりて刻せられたるものあれど、概して足利時代の刻版は、元、明の覆刻本其の多數を占めたり。德川時代に入りて、悉く邦人の書字に基きて鏤刻せしもののみにて、元祿以後に至りては、冠註本尤も廣く

流布せり。

一、碧巖集には、古來より註解の書、十餘種を下らず、就中、最も廣く流布せられたるは岐陽和尚の碧巖不二鈔、大智禪師の種電鈔なり、以て本書の我邦禪宗に如何に流傳せしかを窺ふに足るべし。

大正九年六月

編者記す

國譯禪宗叢書　第七卷

目次

國譯佛果圜悟禪師碧巖集解題……一
國譯佛果圜悟禪師碧巖錄……一——四七一
佛果圜悟禪師碧巖錄原文……一——二六四

國譯碧巖集

解題

碧巖集の原著者は雪竇重顯禪師にして、禪師曾て百則の公案を擇び、叢林學道の詮要を頌出せり。「雪竇頌古」是れなり。たゞ夫れ鎭山鐵壁、衲僧鐵硯に由なく、恰も蚊子の鐵牛を咬むに似たり。雪竇の滅後六十餘年を經て、圜悟禪師、宋の徽宗皇帝の政和年間、澧州夾山の靈泉院に住せし日、この百則の頌古に就き、垂示、著語、評唱を加へて奥旨を發揮せらる、後に高宗の建炎年中、門人等之を輯錄して碧巖集と題せり。靈泉院方丈の扁額に碧巖と題せしに因みてなり。然るに禪師の寂後、門人等徒らに書中の言句を記誦して辯論の資材となす者多かりしかば、圜悟の法嗣大慧宗杲禪師痛く之を慨き、刻板を一炬に付して其の流傳を防ぎたり。其の後二百餘年を經て元の成宗皇帝の大德年間に、蜀中の居士張明遠なる者、諸刹の藏本を集め、彼此參照して重刊せしより、本書再び世に出現するに至れり。爾來、宗門第一書と稱して天下の衲僧之を珍重し、熾んに流布して今日に及べり。

雪竇重顯禪師の傳記は、本叢書第六卷祖英集の解題中に、圜悟克勤禪師の傳記は本叢書第四卷圜悟心要の解題中に再掲げたれば今爰に錄せず。

國譯碧巖集の序

至㊐聖の命脈、㊅列祖の大機、㊁換骨の靈方、㊀顯神の妙術、其れ惟みれば

雪竇禪師、超宗越格の正眼を具して、正令を提撕す、風規を露さず、烹佛煅祖の鉗鎚を秉つて、衲僧向上の巴鼻を頭出す、銀山鐵壁、孰か敢て鑽研せん。蚊、鐵牛を咬む、口を下すことを爲し難し、大匠に逢はずんば、焉んぞ玄微を悉かにせん、粤に佛果老人有り、碧巖に住する日、學者迷ふて請益す、老人愍んで慈を垂れ、淵源を㊆剔抉し、底理を㊇剖析す、㊈當陽の直指、豈に見知を立せんや。百則の㊉公案、頭より一串に穿來し、一隊の老漢、次第に總べ將つて乃至五家七宗の諸師を謂ふ。

㊀靈泉方丈の額を碧巖と曰ふ、開山善會禪師に問ふ、「如何なるか是れ夾山の境」、師曰く「猿子を抱いて青嶂の後に歸り、鳥花を啣んで碧巖の前に落つ。」又或は曰く、「澧洲の中に夾山あり、夾山の中に碧巖あり、碧巖の中に靈泉禪院あり、圜悟禪師曾て此に住す、後代に至り、參徒、師の評唱を編集し卷を成す、之を名けて碧巖集と云ふ。」

㊁古詩に、「潭には千年に蛻骨の龍を變ふ、」言ふこゝろは、蛇、龍と成る時、必ず其の骨を換ふるなり。

㊂明教云く、「聖とは道なり、通なり、佛は大道を極め大道を得、一切種智を具して、一切聖人に冠たり、故に之を聖と云ふ。」

㊃顯は變なり。

㊄剔は說文に解骨なり、抉は廣韻に抉出なり。

㊅史記に趙國に卞和氏が璧あり

㊆剖は開なり、分なり、析は開なり、破なり。

㊇當陽は、當面の義、分明の義なり。

㊈公案は、官司囚罪を勘問して款に據り案に結して曲直正に、公驗分明なるを謂ふ。

㊉接過は鞫勘して罪を問ふなり。

㋓按過す、須らく知るべし㋔趙璧本瑕類無し、相如謾に秦王を誑す、至道實に言無し、宗師慈を垂れ弊を救ふ、憐し是の如く見ば、方に徹底老婆なることを知らん、其れ或は句に泥み言に沈まば、未だ佛種族を滅することを免れず、㋕昔照幸に、師の席に親しみ、未聞を聞くことを得たり時㋖建炎戊申暮春晦日、參學嗣祖比丘普照謹んで序す。

秦十五城を以て之に易へんと欲す、趙、相如を遣し璧を送む、秦の昭王璧を得て城を割かず、相如詐りて璧に瑕有り取りて之を指さん云々、柱に倚つて還へさずして云く、「城を割く、齋戒を請ふ、吾れ方に璧を受く、王若し臣に意あらば、臣則ち頭璧俱に碎けん、」王璧を碎くを懼る、敢て害を加へず、璧竟に趙に歸る。

㋓宗派の圓を按ずるに、蓋し層州中岩の照なり。

㋖建炎は宋の高宗の年號。

㋑四十二章經、中國に入つてより、始めて佛有るを知る、㋺達磨六祖の傳衣に到つてより、言句有り、㋩本來無一物と曰ふを南宗と爲し、㋥時時に勤めて拂拭せよと曰ふを北宗と爲す、是に於て、禪宗の頌古有りて、世に行はる、其の徒飜案の法有り、佛を呵し祖を罵る、爲さずと云ふ所無し、間ま深く吾が詩家の活法を得る者有り、然れども所謂第一義、焉んぞ言句を用ひん、雪竇圓悟、老婆心切なり、大慧已に一炬に之を丙く矣、㋭嶋中の張燁明遠、死灰を然して復た板行す、亦所謂老婆心切なる者か、㋮大德四年庚子四月初八日癸丑、㋯紫陽山の方回萬里序す。

㋑東漢の永平七年、顯宗孝明帝の時、佛教始めて渡來、此の時、騰蘭漢言を習ひ、四十二章經、其の他の四經を譯す。

㋺會元第一に、東土の初祖菩提達磨大師、心要を發明す、祖乃ち尊者に告げて曰く、「我れ既に法を得たり」云々。

㋩五祖弘忍大師の章に、唐の咸亨中に一居士あり、姓は盧、名は慧能云々、盧行者は六祖なり、嶺南に居す、故に南宗と號す、祖偈あり、曰く、「菩提本樹無し、明鏡亦臺に非らず、本來無一物、何の處にか塵埃を惹かん。」

㋥傳燈錄曰く、「北宗の神秀禪師は、開封尉氏人なり、姓は李氏云々、門人普寂、義福等、並に朝野の爲に重んぜらる、世に北宗と稱す、師の偈に曰く、「身は是れ菩提樹、心は明鏡臺の如し、時々に勤めて拂拭せよ、塵埃を惹かしむる莫れ。」

㋭嶋中は地名なり、張は姓、燁は名、字は明遠、蜀の人なり。

㋮大德は元の成宗の年號。

㋯勝覽云く、紫陽山は湖南路に在り、方は姓、回は諱、萬里は字なり。

碧巖集は圜悟大師の所述なり、其の大弟子大慧禪師、乃ち其の書を焚棄す、世間種種の法は皆執著を忌む、釋子の歸敬する所は佛に如くは莫けれども、猶ほ時有つて之を㋑罵る、蓋し我れ有つて彼れ無く、我れに由つて彼れに由らざればなり、己を舍て物に徇へば、必す己を失するに至る、夫れ心、道と一に、道、萬物と一にして、太虛に充滿す、何くに適くとしてか道に非ざらん、第だ常の人之を觀るに、能く其の見る所を見て、其の見ざる所を見す、之を人に求むれば人之を語るに、㋺東坡が日喩の說の如し、往復推測すれば愈〻遠く愈〻失す、㋩吾が夫子道を體してより、猶ほ㋥言無からんと欲す、而も佛氏は出世間の法爲り、文字言語にして之を求む可けんや、然りと雖も、亦廢つ可からざる者有り、智者は少く、愚者は多し、已學の者は少く、未學の者は多し、大藏經五千餘卷、盡く未來世の爲に設く、苟し以て言を忘す可くんば、釋迦老子便ち當に口を閉づべし、何んぞ是の如く㋭叨々たるに至らん。天下の理固に尋常の中を離れずして、而も尋常の表に超出することあり、知り易きが若くなりと雖も、而も實に知り易からざる者なり。之を人に求めざるときは、則ち身を終るまで得可からず。古世に名あるの人は、千人の英に非ざれば、則ち萬人の傑なり、㋩太阿の劍は天下の利劍なり、山に登るときは則ち虎豹を戮り、水に入るときは則ち蛟龍を剸る、人の之を知ること是に盡くるのみ、古の人善く之を用ふる者有り、城に乘じて戰ひ、風に順つて之を揮れば、三軍之が爲に大に敗れて、流血千里に赭す、是れ豈に一己の所能を以て、盡く之を疑ふ可けん哉、吾れ是の書有ることを聞いてより、之を求むる甚だ至れり、嶋中の張氏始めて木に刻して、來つて予に謀る、遂に贊して之を成せしむ、且つ爲に其の首に題す、大德九年歲乙巳三月吉日、玉岑の休休居士聊城の㋬周馳、錢唐觀橋の寓舍に書す。

㋑雲門打殺して狗子に與へて喫せしめん、又「如何なるか是れ佛」「乾屎橛」と答ふ、此の如きの說、見地明白にして佛と屎を齊しうする向上の語、之を罵るにあらず、俗見に罵ると作す。

㋺東坡日喩の說に云く、「生れながらにして眇なる者、日の形を識らずして之を目ある者に問ふ、或る人之れに告げて曰く、日の狀ち銅盤の如しと、盤を扣いて其の聲を得て、他日鐘の聲を聞いて以て日と爲す云云。」

㋩夫子は孔子を謂ふ。

㋥論語陽貨に、子曰く、予れ言無からんと欲す、子貢曰く、子如し言はずんば則ち小子何をか述べん、子曰く、天何をか言ふや、四時行はれ、百物成る云々。

㋭叨々は遽なり。

㋬越絕書に曰く、「楚王風胡子をして吳に之いて、歐冶子將に見えしめ、之れをして鐵劍を爲らしむ、一を龍泉と曰ひ、二を太阿と曰ひ、三を工市と曰ふ、劍成りて晉鄭之れを聞き之れを求むれども得ず、晉の師、楚の城を圍んで三年まで解けず、是に於て太阿の劍を引き城に登りて之れを麾く、三軍破敗し、士卒逃遁して、血を流すこと千里、晉鄭の頭畢く白し云々。」

㋭周は姓、馳は名、字は、景遠。

或人問ふ、「碧巖集の成毀孰れか是なる乎。」曰く、「皆是なり。」㋑鰕鱔東に來つて、心印を單傳して、文字を立せざることは固なり、而れども㋺血脈歸空の諸論、果して誰か之を爲る哉、㋩古文字に在らず、文字を離れずと謂ふ者は、眞に言を知れり、已に人々をして、㋥籐を卷き㋭板を聞き、㋬指を堅て脚に觸るるの際に於て大事を了卻せしむ、文字何ぞ有せん哉、拈花微笑より以來、㋣門竿倒卻の後、才かに言句に涉る、文字に非ずんば、以て傳ふること無けん、是れ又廢つ可らざる者なり。嘗て祖敎の書を謂つて、之を公案と謂ふものは、唐に倡へて宋に盛なり、其の來る尙し矣、二字は乃ち世間法の中吏牘の語、其の用三有り、面壁功成り行脚事了るとも、定盤の星は明め難く、野狐の趣は墮し易し、具眼之が爲に辨ず、一呵一喝して、實を見んと要するは、老吏の獄に據つて罪を讞つて、底裏悉く見て、情欵遺さゞるが如くなる一なり、其の次は則ち㋷嶺南より初めて來り㋻西江未だ吸はず、㋼亡羊の岐泣き易く、指海の針必ず南す、悲心之が爲に接引す、一棒一痕して、證悟せしめんと要するは、廷尉の法を執つて平反して、人を死より出すが如くなる二なり。又其の次は則ち㋽犯稼憂深く繫驢事重し、㋾學奕の志須らく專なるべく、染絲の色悲み易し、大善知識之が爲に付囑す、之をして㋿心蒲團に死して、一動一參せしむるは、官府の條令を頒ち示して、人をして律を讀んで法を知り、惡念才かに生ずれば、旋や卽ち寢滅せしむる三なり、㌀方冊を具へ案底を作し、㌁機境を

㋑鰕鱔は、蟲虫ばむなり、今は達磨を言ふ、乃ち缺の意か。
㋺血脈歸空は、二論の名、初祖の所述なり。
㋩會元に、達磨天竺に返らんと欲す門人に命じて曰く、時將に至らんす、汝等蓋んぞ各々所得を言はざるや。時に道副有り、對へて曰く、我が所見の如きんば、文字を執せず、文字を離れず、而して道用を爲す。祖曰く、汝吾が皮を得たり。
㋥福州長慶の棱禪師、一日籐を卷き、忽然大悟す。
㋭塗毒岩主、板聲を聞いて豁然大悟す。
㋬天龍一指を堅てて俱胝に示す胝、言下に大悟す。
㋣會元第一に、阿難、迦葉に問うて曰く、「師兄世尊金欄の袈裟を傳ふる外、別に還の什麼なか傳ふ。」迦葉、阿難を召す、阿難應諾す、迦葉曰く、「門前の刹竿を倒卻著せよ。」
㋷廬行者初めて嶺南より來りて五祖に見ゆ、初來と言ふは未だ是非を知らざるなり。
㋻居士龐蘊馬祖に參門して云く、「萬法と倡爲らざる者は是れ什麼ぞ。」祖曰く、「汝が一口に西江水を吸盡するを待つて、卽ち汝に向つて道はん。」
㋼列子に云ふ、楊子が隣人羊を亡ふ、其の黨を率ゐて之れを追ふ、楊子曰く、「嘻一羊を亡ふて何んぞ追ふ者の衆きや。」既に返つて曰く、「岐路の中又岐路有り、吾れ之く所を知らず、返る所以なり。」楊子曰く、「大道多岐を以て羊を亡ふ云々。」
㋽遺敎經に曰く、「汝等比丘已に能く戒に住す、當に五根を制し、放逸して五欲に入らしむる勿れ、譬へば牧牛の人、杖を執つて之れを調て、縱に人の苗稼を犯さしめざるが如し。」
㋾孟子曰く、「今夫れ奕の數たる小數なり、心を專にし志を致さずんば、則ち得ざるなり。」
㌀長慶七箇の蒲團を穿破して、此の事を明めず、一日籐を卷いて忽然大悟す。
㌁方は版なり、冊は編簡なり、記錄を謂ふ。
㌂賓主相見問答の時、互に機境あり。
㌃金科玉條は、二書の名なり、一朝廷の政事を記する者なり。
㌄清明對越、亦二書の名なり。
㌅德山云く、「十二分敎は瘡疣を拭ふ紙なり。」
㌆人の門戶に倦うて只だ作客して、口を餬し日を渡る、其の主人の指呼に任す。郎は男子の稱、言ふ意は主人と作ることを得ざるなり。
㌇楚氏春秋に曰く、楚人江を涉りて、劍舟中より水に墜つ、其の舟を刻んで曰く、「此に於て劍を墜す、求むれば必らず之れを得ん。」
㌈列子に曰く、宋に耕す者あり、兎走りて株に觸れて頭を折いて死す、因つて耕を釋いて株を守りて復た得んことを冀ふ。
㌉毛公詩傳に曰く、魯顏叔子獨居す、夜暴かに風雨至る、隣婦趨りて至る、叔子之れを納る云々、魯に男子あり、叔子が如くにして處す、婦前の如くにして至る、男子戶を閉ぢて納れず、婦人曰く、「何んぞ柳下惠が若くせざるや。」男子曰く、「柳下惠は固に可なり、吾れは固に不可なり、吾れ吾

陳べ格令を爲すは、世間の所謂、㋺金科玉條、㋩清明對越の諸書と、初め より何を以てか異ならん、祖佛の立てて公案と爲し、叢林に留示する所以の者、意或は此れを取る、奈何せん末法以來、妙心を㋥瘡紙に求め、正法を口談に付することを、鬼神を點盡して、猶ほ薄を離れず、㋥人の門戸に傍ふ、喚んで郎と作すに任す、㋭劍去つて舟猶ほ刻み、㋬兎逸げて株移らず、滿肚の葛藤能く問ふこと千轉すれども、其れ生死の大事に於ては、初めより干渉無し、鐘鳴り漏盡くれば將た焉んぞ之を用ひん、烏乎羚羊角を掛く未だ形迹を以て求む可らず、善く㋮下慧を學ぶ者は、豈に㋯歩まば亦歩み、趁らば亦趁らんや、此れを知るときは則ち二老の心皆是なり、圜悟は子を顧み孫を念ふの心多し、故に重ねて雪竇の頌を拈す、大慧は焚を救ひ溺を拯ふの心多し、故に立ちどころに碧巖集を毀る、釋氏一大藏經を說いて、末後に乃ち謂く一字を說かずと、豈に我れを欺かん哉、圜悟の心は釋氏經を說くの心なり、大慧の心は釋氏說を誹むの心なり、㋮禹稷顏子、地を易へば皆然らん、之を推し之を輓く、車行を主る而已、爾來二百餘年、轡中の張明遠、復た梓に鏤めて以て其の傳を壽す、故に祖敎春を回す乎、

が不可を將つて、下惠が可を學ばん云々。」

㋯莊子の田子方の篇に曰く、顏淵仲尼に問うて曰く、「夫子歩すれば亦た歩し、夫子趨れば亦趨り、夫子馳すれば亦馳す云々。」

㋮孟子離婁の章に曰く、禹稷平世に當つて、三たび其の門を過ぐれども入らず、孔子之れを賢とす、顏子亂世に當つて、陋巷に居り、一簞の食、一瓢の飲、人は其の憂に堪へず、顏子は其の樂を改めず、孔子之れを賢とす、孟子曰く、「禹稷顏同道を同じうす。」

㋭三十年又は一代を一世と爲す數は運數なり、世運の法興廢數あるか。

㋬首楞嚴經に一漏を認めて、全潮と爲すの義なり。

㋮首楞嚴二に、佛阿難に告げ玉はく「汝等緣心を以て法を聽く、此法亦緣なり、法性を得るに非ず、人の手を以て月を指して人に示すが如し、云々。」

㋰三敎老人は如居士、名は顏丙。

抑㋱世故數有る乎、然れども是の書の行關る所甚だ重し、若し㋲水を見て海に卽き、㋳指を認めて月と作さば、特に大慧之を憂ふるのみにあらず、圜悟も又將た之が爲に粘を去り縛を解かん、昔人寫照の詩に曰く、「分明なり紙上の張公子、力を盡して高聲に喚べども應へず、」此の書を觀んと欲せば、先づ此の語に參せよ、大德甲辰四月望、㋰三敎老人書す。

國譯佛果圜悟禪師碧巖錄卷第一

師、澧州夾山靈泉禪院に住して、雪竇顯和尚の頌古を評唱する語要

第一則

垂示に云く、山を隔てて、烟を見て早く是れ火なることを知り、牆を隔てて角を見て、便ち是れ牛なることを知る。擧一明三、目機銖兩、是れ衲僧家尋常の茶飯、衆流を截斷するに至つては、東浦西沒、逆順縱橫、與奪自在なり、正當恁麼の時、且く道へ、是れ什麼人の行履の處ぞ、雪竇の葛藤を看取せよ。

【本則】擧す、梁の武帝、達磨大師に問ふ。(這の不唧噜の漢を說く。)「如何なるか是れ聖諦第一義。」(是れ甚の繫驢橛ぞ。)磨云く、「廓然無聖。」(將に謂へり多少の奇特と、箭新羅を過ぐ、可煞だ明白。)帝曰く、「朕に對する者は誰ぞ。」(滿面の慚惶强ひて惺惺、果然として摸索不著。)磨云く、「不識。」(咄、再來半文錢に直らず。)帝契はず。(可惜許、卻つて

【本則】東嶺禪師曰く、第一に宗旨の本を明す、佛敎の所說空假中を基と爲し、中道を超越す、是れ卽ち我が宗向上宗乘の事と爲すのみ。

些子に較れり。）達磨遂に江を渡つて魏に至る。（這の野狐精、一場の懞懞を免れず、西より東に過ぎ、東より西に過ぐ。）帝後に擧して志公に問ふ。（貧兒舊債を思ふ、傍人眼有り。）志公云く、「陛下還つて此の人を識るや否や。」（志公に和して、國を趕ひ出して始めて得ん、好し三十棒を與ふるに、達磨來や。）帝云く、「不識。」（卻つて是れ武帝達磨の公案を承當得す。）志公云く、「此は是れ觀音大士、佛心印を傳ふ。」（胡亂に指注す、臂膊外に向つて曲らず。）帝悔ひて、遂に使を遣はし去つて請せんとす。（果然として把不住、向に道不啣嗹。）志公云く、「道ふこと莫れ、陛下使を發し去つて取らしめん」と。（東家の人死すれば、西家の人哀を助く、也た好し一時に國を趕ひ出すに。）闔國の人去るも、佗亦回らず。（志公也た好し、三十棒を與ふるに、知らず腳跟下大光明を放つ。）

【評唱】 ㋑達磨遙かに此士に大乘の根器有るを觀て、遂に海に泛んで得得として來り、㋺心印を單傳して迷塗を開示す。不立文字、直指人心、見性成佛。若し恁麼に見得せば、便ち自由の分有り、一切の語言に隨つて轉ぜられず、脫體現成せん。便ち能く後頭に於て、㋩武帝と對譚、幷に二祖安心の處、自然に見得して、計較情塵無く、一刀に截斷して、洒洒落落たらん。何ぞ必ずしも更に是を分ち非を分ち、得を辨じ失を辨せん。然も恁麼なりと雖も、能く幾人か有る。

㋑會元第一に、初祖菩提達磨大師は、南天竺香至王の第三子なり云々。

㋺古人曰く、諸佛の法門遙に相印下して、一印に印定す、起畢同時にして前後無し、故に名けて印といふ。

㋩南史に曰く、梁の高祖武皇帝姓は蕭、諱は衍、字は叔達、漢の蕭何二十五世の孫なり、初め梁公に封ぜられ、又梁王となり、遂に帝位に卽き、高祖武帝と稱す。

武帝嘗て袈裟を披して、自ら㋥放光般若經を講ず、天花亂墜し、地黃金と變ずることを感得す。道を辨じ佛に奉じ、天下に詔詔して、寺を起て僧を度し、敎に依つて修行す、人之を佛心天子と謂ふ。達磨初め武帝に見ゆ。帝問ふ、「朕寺を起て僧を度す、何の功德か有る。」磨云く、「無功德」と。是れ惡水蓊頭に澆ぐ。若し這箇の無功德の話を透得せば、儞に許す親しく達磨に見ゆることを。且く道へ、寺を起て僧を度す、什麼と爲てか都て功德無き、此の意什麼の處にか在る。㋭帝、婁約法師、㋬傅大士、㋯昭明太子と眞俗の二諦を持論す。㋰敎中の說に據れば、眞諦は以て非有を明し、俗諦は以て非無を明す、眞俗不二、卽ち是れ聖諦第一義、此れは是れ敎家極妙窮玄の處、帝便ち此の極則の處を拈じて達磨に問ふ、「如何なるか是れ聖諦第一義」と。磨云く、「廓然無聖」と。天下の衲僧跳不出、達磨他の與めに一刀に截斷す。如今の人多少か錯つて會し、卻つて去つて精魂を弄し、眼睛を瞠して云く、「廓然無聖」と。且喜すらくは㋱沒交涉、五祖先師嘗て說く、只だ這の廓然無聖、若し人透得せば、歸家穩坐せん。一等に是れ葛藤を打す、妨げず他の與めに㋲漆桶を打破することを。達磨中に就いて奇特なり、所以に道ふ、一句に參得し透れば、千句萬句一時に透る。自然に坐得斷じ、把得定す。㋳古

㋥放光品は、如來等持三昧に入つて、光を放つて十方世界を照す、故に品題に立つ。

㋭六學高僧傳に、梁の惠約、字は德素、姓は婁氏、東陽烏傷の人なり。

㋬婺州義烏縣の人、雙林大士は姓は傅、名は翕、法號は善惠。

㋯昭明は武帝の太子なり。

㋰大品般若經。

㋱沒交涉は、相干ること無きの謂なり。

㋲楞伽云く、「人の曠劫無明、結習膠固うして、恰も漆を貯ふるの桶、黑洞洞地にして不明なるが如し。」忠曰く、「無分

人道く、「粉骨碎身、未だ酬ゆるに足らず、一句了然として百億を超ゆ」と。達磨劈頭に他に一掬を與ふ、多少か漏逗し了れり。帝省せず、卻つて人我の見を以ての故に、再び問ふ、「朕に對する者は誰そ。」達磨慈悲忍煞し、又向つて道ふ、「不識」と。直に得たり武帝眼㋐目定動して、落處を知らざることを。是れ何の言說ぞ、這裏に到つて有事無事、拈じ來るに卽ち堪へず。

㋐端和尙頗有り、云く、「一箭尋常一鵰を落す、更に一箭を加へて已に相饒す。直に少室峰前に歸つて坐す、梁主言ふことを休めよ更に去つて招かん」と。復た云く、「誰か招かんと欲す。」帝契はず、遂に潛かに國を出づ、這の老漢只だ㋑懶懶を得たり、江を渡つて魏に至る。時に魏の孝明帝當位なり、乃ち北人の種族、姓は拓跋氏、後來方に中國と名く、達磨彼に至つて、亦出て見えず、直に少林に過つて、面壁九年、二祖を接し得たり、彼の方に號して壁觀㋒婆羅門と爲す。梁の武帝、後に志公に問ふ、公云く、「陛下還つて此の人を識るや否や」と、帝曰く、「不識」と。且く道へ、達磨の道ふ底と、是れ同か是れ別か、似たることは則ち也た似たり、是なることは則ち是ならず、人多く錯つて會して道ふ、「前來の達磨は、是れ他に禪を答ふ、後來の武帝は是れ他の志公に對ふ、乃ち相識の識なり」と。且得沒交涉、當時志公恁麼に問ふ、且く道へ、作麼生か祇對せん、何

㋐眼目定動は「目がすわつたり、うごいたりしてうろつく」なり。

㋑懶懶は懶家物を添ふるの多きを謂ふ、「まける」と譯す、又蹕を「ゆるす」の意なり。

㋒婆羅門、秦には外意と云ふ。

㋓楊岐の嫡子白雲守端禪師。

㋔饒は商家物を添ふるの多きを謂ふ、「まける」と譯す、又蹕を「ゆるす」の意なり。

㋕婆羅門、秦には外意と云ふ。

㋖永嘉眞覺大師證道歌の語、粉骨は常嗜般若を學ぶ時の如く、碎身は釋迦因中に半偈を求むる時の如し。

㋗眼目定動は「目がすわつたり、うごいたりしてうろつく」なり。

ぞ一棒に打殺して、㋙揉糊せらるゝことを免れざる。武帝卻つて他に欺を供して不識と道ふ、志公機を見て作す。便ち云く、「此れは是れ觀音大士、佛心印を傳ふ」と。帝悔いて遂に使を遣し去つて取らんとす、好㋚不唧嚕。當時他の此れは是れ觀音大士、佛心印を傳ふと道はんを等つて、亦好し他を擯して國を出さば、猶ほ些子に較らんに。人傳ふ、㋛志公は天鑒十三年に化し去り、達磨は普通元年に方に來る、自ら七年を隔つ、何が故ぞ卻つて道ふ、同時に相見すと。此れ必ず是れ謬傳ならんと。傳中に載する所に據る、如今這の事を論せず、只だ他の大綱を知らしめんことを要す。且く道へ、㋜達磨も是れ觀音、志公も是れ觀音、阿那箇か是れ㋝端的底の觀音、旣に是れ觀音、什麼と爲てか卻つて兩箇有る、何ぞ止だ兩箇のみならん、群を成し隊を作す。時に後魏の㋞光統律師、㋟菩提流支三藏、師と論議す、師、相を斥け心を指す、而も偏局の量、自ら堪任せず、競うて害心を起し、數たび毒藥を加ふ。第六度に至り、化緣已に畢り、傳法の人を得たり、遂に復た救はず、端居して逝す、㋠熊耳山の定林寺に葬る。後に魏の宋雲使を奉じて、葱嶺に於て、師の手に隻履を携へて往くに遇ふ、武帝追憶して、自ら碑文を撰して云く、「嗟夫之れを見て見ず、之

㋙揉糊。當に塗糊に作るべし、糊糊の義、猶ほ塗胡のごとし。

㋚俗呼小錄に云く、人の不慧を說いて不唧嚕と云ふ、「たわけもの」と譯す。

㋛志公は寶志和尙なり。

㋜佛祖統要志理賢の部に云く、「志公は觀音の化身云々。達磨は觀音の化身云々。」

㋝端的は支那常用の俗語なり、端は正なり、的は實なり。

㋞齊鄴下の大覺寺惠光、姓は楊氏、佛陀三藏の高弟なり。

㋟續高僧傳第一に傳あり。

㋠顏師古云く、熊耳山は順陽の北、益陽縣の東に在り、其の山に兩峰あり、かたち熊耳の如し、因つて以て名く。

れに逢うて逢はず、今も古も、之れを怨み之れを恨む」と。復た讚して云く、「心有なれば曠劫にも凡夫に滯り、心無なれば刹那にも妙覺に登る」と。且く道へ、達磨卽今什麼の處にか在る、㊐蹉過すれども也た知らず。

【頌】聖諦廓然（箭新羅を過ぐ、咦。）何ぞ當に的を辨ずべき。（過也、何の辨じ難きことか有らん。）朕に對する者は誰そ。（再來半文錢に直らず。又恁麼にし去るや。）還つて云ふ不識と。（三個四個中れり。咄。）玆に因つて暗に江を渡る。（人の鼻孔を穿つことを得ず、卻つて別人に穿たる、蒼天蒼天、好大丈夫。）豈に荊棘を生ずることを免れんや。（腳跟下已に深きこと數丈。）闔國の人追へども再來せじ。（兩重の公案、追ふことを用て作麼にか作さん。什麼の處にか在る、大丈夫の志氣何にか在る。）千古萬古空しく相憶ふ。（手を換へて胷を槌つ、空を望んで啓告す。）相憶ふことを休めよ。（什麼と道ふぞ、鬼窟裏に向つて活計を作す。）清風匝地何の極か有らん。（果然、大小の雪竇草裏に向つて輥ず。）師左右を顧視して曰く、「這裏還つて祖師有りや。」（儞翻欺を待つ那、猶ほ這の去就を作す。）自ら云く、「有り。」（塌薩阿勞。）喚び來らせ、老僧が與に洗腳せしめん。（更に三十棒を與へて趕ひ出すとも、未だ分外とせず。這の去就を作す、猶ほ些子に較れり。）

【評唱】且く雪竇の此の公案を頌するに據らば、一へに善く太阿の劍を舞すに似て相似たり。虛空中に向つて㊑盤礴して、自然に鋒鋩を犯さず、若し

㊐蹉過は錯過に同じ、蹉は足跌なりと註す。「けつまづく」、又「ふみすべる」と譯すべし。

㊑盤礴は莊子に衣を解いて盤礴

是れ這般の手段無くんば、纔かに拈著せば、便ち鋒を傷り手を犯すことを見ん。若し是れ具眼の者は看よ、他の一拈一掇、一褒一貶、只だ四句を用て、一則の公案を㊒措定することを。大凡そ頌古は只だ是れ㊓繞路に禪を說き、㊔拈古は大綱㊕欵に據つて案に結する而已。雪竇他に一拶を與へて㊖劈頭に便ち道く、聖諦廓然、何ぞ當に的を辨ずべき。雪竇佗の初句下に於て、這の一句を著く、妨げず奇特なり。且く道へ、畢竟作麼生か的を辨せん。直饒鐵眼銅睛も、也た摸索不著、這裏に到つて情識を以て卜度し得て機意識情想に落ちず、儞が口を開くを等たば、什麼を作すにか堪へん。計較生ずる時、鶴子新羅を過ぐ。雪竇道く、儞天下の禪僧、何ぞ當に的を辨ずべき、朕に對する者は誰そ、箇の還つて云ふ不識を著く。此れは是れ雪竇忒煞だ老婆、重重爲人の處なり。且く道へ、廓然と不識と、是れ一般か兩般か、若し是れ了底の人の分上ならば、言はずして諭らん。若し是れ未了底の人ならば、決定打して兩橛と作さん。諸方尋常皆道ふ、雪竇重ねて拈すること一徧すと。殊に知らず、四句に公案を頌じ盡し了つて、後に慈悲

㊒措。當に楷に作るべし、廣韻に楷は式なり法なり、又楷抹の義にて「まつぱり、ゐぐうて、とつた」と云ふ意か。

㊓繞路は直截ならずして、巧妙に言を吐くなり。

㊔續燈の註、拈古門に云く、大知見を具して宗教を拈提し、先覺を抑揚し、後昆を開發す。

㊕欵は情款なり、又誠款なり、以て其の情を究めて其の誠を見るなり。」此れ乃ち世間の有司吏廣の語なり、其の事を訟ふること有るを司りて、必らず其の彼此の人情口款を究め、以てこれを雜して案牘と名く、又は公案と云ふ。

㊖劈は破なり、廣韻に劈裂なり、林注に箕踞の狀こゐがままなる」の貌なり、此れ本義なれども今は自由自在の義なり。

の爲の故に、事跡を頌出す。玆に因つて㋐暗に江を渡る、豈に荊棘を生ずることを免れんや。達磨本玆土に來つて、人の與に㋑結を解き縛を去り、釘を抽き楔を拔き、荊棘を剗除す。何に因つてか卻つて道ふ、荊棘を生ずと。止だ當人のみに非ず、諸人即今脚跟下、已に深きこと數丈、㋒闔國の人追へども再來せず、千古萬古空しく相憶ふ、可煞だ㋓大丈夫ならず。且く道へ、達磨什麼の處にか在る、若し達磨を見ば、便ち雪竇末後爲人の處を見ん。雪竇人の情見を逐はんことを恐怕す、所以に㋔關捩子を撥轉して自己の見解を出して云く、「相憶ふことを休めよ、清風匝地何の極りか有らん」と。既に相憶ふことを休む、儞が脚跟下の事、又作麼生。雪竇道く、「即今箇の裏、匝地の清風、天上天下、何の極る所か有らん」と。雪竇千古萬古の事を拈じて、面前に拋向す、止だ雪竇當時何の極りか有らんと云ふのみに非ず、儞諸人の分上も、亦何の極りか有らん。他又人の這裏に執在せんことを怕れ、再び方便を著けて高聲に云く、「這裏還つて祖師有り麼。」自ら云く、「有り」と。雪竇這裏に到つて、妨げず人の爲に赤心片片たることを。又自ら云く、「喚び來らせ老僧が與に洗脚せしめん」と、太煞だ

㋐暗に江を渡る、裂なり、頭は首なり、始なり。

㋑事蒐第八二十七、祖達磨に授く、讖文の註に曰く、祖師、人の其の行を知らんことを欲せず、是の夜暮を航して西に遇く、故に暗に江を渡ると曰ふ。

㋑結著繫縛、卽ち情、識分別の執因を謂ふなり。

㋒闔師古云く、闔は閉なり、一國の中を總ぶ、故に闔國といふ。

㋓大丈夫ならば「男らしくない」と譯す。

㋔關捩子は「からくりのはぜなり、」通雅に曰く、關捩は機捩なり、廣記に唐の軈志稱、木を雖りて鸞鵠を爲り、機捩を腹中に置き、之れを發すれば則ち飛傳。傳燈錄に黃檗謂ふ、「牛頭尚ほ向上の關捩子を知らず」と。

人の威光を減ず。當時也た好し本分の手脚を與ふるに。且く道へ、雪竇の意什麼の處にか在る、這裏に到つて、喚んで驢と作さんか則ち是、喚んで馬と作さんか則ち是、喚んで祖師と作さんか則ち是、如何が㋕名邀せん。往往喚んで雪竇祖師を使ひ去ると作す。且喜すらくは沒交渉。且く道へ、畢竟作麼生、只だ老胡の知を許して、老胡の會を許さず。

第一則

垂示に云く、乾坤窄く、日月星辰一時に黑し。直饒棒、雨點の如く、喝、雷奔に似たるも、也た未だ向上宗乘中の事に當得せず。設使三世の諸佛も、只自知す可し。歷代の祖師も、全提不起。一大藏敎も詮注し及ぼさず。明眼の衲僧も、自救不了、這裡に到つて作麼生か請益せん。箇の佛の字を道ふも、拖泥滯水。箇の禪の字を道ふも、滿面の慚惶。久參の上士は、之を言ふを待たず。後學の初機は、直に須らく究取すべし。

【本則】舉す、趙州衆に示して云く、(這の老漢什麼をか作す、這の葛藤を打することと莫れ。)「至道無難。」(難に非ず易に非ず。)「唯嫌揀擇。」(眼

㋕正約に、人物を描畫して其の形に類するを貌と云ふ、正宗贊洞山章に先師の眞を邀得す。

【本則】東嶺禪師云く、第二に宗旨の分ち、夫れ臨濟は宗本と爲す所、雲門は宗至る可き所、曹洞は宗の地體、潙仰は作用、法眼は宗旨の爲人方便か、是れ皆趙州の揀擇に非ず、明白に非ざるの中に在るのみ。

前是れ什麼ぞ三祖猶ほ在り。)「纔に語言有れば、是れ揀擇、是れ明白。」(兩頭三面、少賣弄、魚行けば水濁り、鳥飛ば毛落つ。)「老僧は明白裏に在らず」(賊身已に露る、這の老漢什麼の處に向つてか去る。)「是れ汝還つて護惜するや也た無や」(敗也、也た一個半箇有り。)時に僧有り、問ふ、「既に明白裏に在らずんば、箇の什麼をか護惜せん。」(也た好く一拶を與ふ、舌上の齒を拄ふ。)州云く、「我れも亦知らず。」(這の老漢を拶殺す、倒退三千。)僧云く、「和尚既に知らずんば、什麼としてか卻つて明白裏に在らずと道ふ。」(看よ走りて什麼の處に向つてか去らん、逐てて樹に上り去らしむ。)州云く、「事を問ふことは卽ち得たり、禮拜し了つて退け。」(賴に這の一著有り、這の老賊。)

【評唱】❶趙州和尚、尋常此の話頭を擧す、只だ是れ唯嫌揀擇。此れは是れ三祖信心の銘に云く、「至道無難、唯嫌揀擇、但だ憎愛莫ければ、洞然として明白」と。纔かに是非有れば、是れ揀擇、是れ明白。纔かに恁麼に會せば、蹉過了也。鉸釘膠粘せば、何の用をか作すにか堪へん。州云く、「是れ揀擇是れ明白」と。如今の參禪問道、揀擇の中に在らざれば、便ち明白裏に坐在す。老僧は明白裏に在らず、汝等還つて護惜するや也た無やと。汝諸人既に明白裏に在らず、且く道へ、趙州什麼の處にか在る、什麼と爲てか卻つて人をして護惜せしむ。五祖先師常に說いて道く、「垂手し來つて儞に似過す、儞作麼生か會す」と。且く道へ、作麼生か是れ垂手の處、㊁鈎頭の意を識取せよ。定盤星をとむること莫れ、這の僧出で來るも、也た妨げず奇特なることを。趙州の空處を捉へて、便ち去つて佗を拶す、既に明白裏に在らず、箇の什麼をか護惜せん。趙州更に棒を行じ喝を行せず、只だ道ふ、我も亦知らずと。若し是れ這の老漢にあらずんば、佗に拶著せられて、㊅往往に忘前失後せん、賴に是れ這の老漢、轉身自在の處有り。所以に此の如く他に答ふ、如今の禪和子、問著すれば也た道ふ、我も亦知らず會せずと。爭奈せん㊆途を同うして轍を同じうせず。這の僧奇特の處有つて、方に始めて問ふことを會す、和尚既に知らずんば、什麼と爲てか卻つて道ふ明白裏に在らずと、更に好一拶。若し是れ別人ならば、往往に㊇分疏不下ならん。趙州は是れ作家、只だ他に向つて道ふ、事を問ふことは卽ち得たり、禮拜し了つて退けと。這の僧舊に依つて這の老漢を奈何ともすること無し、只だ氣を飲み聲を飲むことを得たり。此れは是れ大手の宗師、儞が與に玄を論じ妙を論じ、機を論じ境を論せず、一向に本分の事を以て人を接す。所以に道ふ、相罵ることは儞に饒す粥を接げ、相唾することは儞に饒す水を潑げと。殊に知らず這の老漢、平生棒喝を以て人を接せず、只だ平常の言語を以てするに、只だ是れ天下の人奈何ともせず、蓋し他の平生許多の計較無きが爲に。所以に橫拈倒用、逆行順行、大自在を得たり。如今の人理會し得ず、只管に

❶五燈會九第四に南泉の法嗣趙州觀音院從諗禪師は、曹州郝鄉の人なり、姓は郝氏云々。

㊁鈎は「はかりのかぎ」なり、「かぎにかけた處で合點せよ、定盤(はかり)の星をあてにするな」と云ふ義なり。

㊅往々は每度の義、杜詩に、「醉中往々逸禪を愛す。」又處々の義、蘇頲の詩に、「往々花間蝶石に逢ふ。」

㊆語路相似たりと雖も、其の意懸隔す。

㊇輾轉錄に云く、「人の自ら其の事の是非を辨白する者を俗に分疏と曰ふ。」分疏不下は「いひぼどきえず」と譯す。

道ふ、趙州答話せず、人の爲に說かずと。知らず當面に蹉過することを。

【頌】　至道無難。(三重の公案滿口に霜を含む、什麼と道ふぞ。)言端語端。(魚行けば水濁る、七花八裂、探胡也。)一に多種有り。(分開せば好し、只だ一般ならば什麼の了期か有らん。)二に兩般無し。(何ぞ堪へん四五六七、葛藤を打して什麼にか作さん。)天際日上り月下る。(覿面相呈す、頭上漫漫腳下漫漫、切に忌む頭を昂げ頭を低ることを。)檻前山深く水寒し。(一死更に再活せず、還つて寒毛卓豎することを覺ゆるや。)髑髏識盡きて喜何ぞ立せん。(棺木裏に瞠眼す、盧行者は是れ它の同參。)枯木龍吟銷して未だ乾かず。(咄、枯木再び花を生ず、達磨東土に遊ぶ。)難難。(邪法扶け難し、倒一說、這裏是れ什麼の所在ぞ、難と說き易と說く。)揀擇、明白君自ら看よ。(瞎、將に謂へり、別人に由ると、頼に自ら看るに値ふ、山僧が事に干らず。)

【評唱】　雪竇佗の落處を知る、所以に此の如く頌す。便ち後に隨つて道ふ、「言端語端」と、一隅を擧げて三隅を以て反せず。雪竇道く、「一に多種有り、二に兩般無し」と、三隅一に反るに似たり。儞且く道へ、什麼の處か是れ言端語端の處、什麼と爲てか一に卻つて多種有り、二に卻つて兩般無き、若し眼を具せずんば、什麼の處に向つて摸索せん。若し這の兩句を透得せば、所以に古人道く、❻打成一片舊に依つて見れば、❶山は是れ山、水は是れ水、長は是れ長、短は是れ短、天は是れ天、地は是れ地、有る時は天を喚んで地と作し、有る時は地を喚んで天と爲し、有る時は山を喚んで是れ山にあらずとし、水を喚んで是れ水にあらずとす。畢竟怎生が平穩なることを得去らん。風來れば樹動き、浪起れば船高し。春は生じ夏は長じ、秋は收め冬は藏す、❼一種平懷なれば、泯然として自ら盡く。則ち此の四句の頭に❽頓絕し了れり。雪竇餘才有り、所以に❾結裏を分開し、算へ來れり只だ是れ頭上に頭を安じて道く、「至道無難、言端語端、一に多種有り、二に兩般無し」と。許多の事無しと雖も、天際日上る時月便ち下り、檻前山深き時水便ち寒し。這裏に到つて、言も也た端、語も也た端、頭頭是れ道、物物全眞、豈に是れ心境俱に忘じて、打成一片の處にあらずや。雪竇頭上は太孤峻生、末後は也た漏逗少からず。若し參得透し、見得徹せば、自然に❿醍醐上味の如くに相似ん。若し是れ情解未だ忘ぜずんば、便ち見ん七花八裂して、決定して此の如きの說話を會すること能はざらんことを。髑髏識盡きて喜何ぞ立せん、枯木龍吟銷して未だ乾かず。只だ這れ便ち是れ⓫交加の處、這の僧恁麼に問ひ、趙州恁麼に答ふ。州云く、「至道無難、唯嫌揀擇、纔に語言有れば、是れ揀擇、是れ明白。老僧は明白裏に在

❻香林、衆に謂つて曰く、「老僧四十年方に打成一片」と言ひ訖つて逝す。

❶雲門錄に上堂云く、「諸和尙子妄想すること莫れ、天は是れ天、地は是れ地、云々。」

❼信心銘の文、中峰曰く、「義解の者謂ふ取捨の情盡き、聖凡の知見依る無し、自然一切處平常一切處泯滅。」

❽頓絕は「しやんと、きりあげる」と譯す。

❾結裏は結果にも作る、「軍なしまひかたづける」なり、語の意は、「ぐわらりと分開し、又たしやんと、結果してしまうた。されども算用して見れば、とかく頭上に頭を安ずることぢや」。

❿牛乳酥を出し、酥酪を出し、醍醐を出す、乃ち諸味中の最上なり。

⓫交加は樹木の繁りて、枝と枝とが交叉する貌、則ち雪竇趙州の話を頌するに、香嚴、石

らず、是れ汝還つて護惜するや也た無しや」と。時に僧有り、便ち問ふ。「既に明白裏に在らず、又箇の什麼をか護惜せん。」州云く、「我も亦知らず。」僧云く、「和尚既に知らずんば、什麼と爲てか卻つて道ふ明白裏に在らずと。」州云く、「事を問ふことは卽ち得たり、禮拜し了つて退け」と。此れは是れ古人道を問ふ底の公案、雪竇拽き來つて、一串に穿卻して、用て至道無難、唯嫌揀擇を頌す。如今の人古人の意を會せず、只管に言を咬み句を嚼む、甚の了期か有らん。若し是れ通方の作者ならば、始めて能く這般の說話を辨得せん。見ずや、僧㋐香嚴に問ふ、「如何なるか是れ道。」嚴云く、「枯木裏の龍吟。」僧云く、「如何なるか是れ道中の人。」嚴云く、「獨髏裏の眼睛。」僧後に㋖石霜に問ふ、「如何なるか是れ枯木裏の龍吟。」霜云く、「猶ほ喜を帶ぶること在り。」「如何なるか是れ獨髏裏の眼睛。」霜云く、「猶ほ識を帶ぶること在り。」僧又㋗曹山に問ふ、「如何なるか是れ枯木裏の龍吟。」山云く、「血脈不斷。」「如何なるか是れ獨髏裏の眼睛。」山云く、「盡大地未だ一箇も聞かざるもの有らず。」僧云く、「未審し龍吟是れ何の章句ぞ」山云く、「是れ何の章句と云ふことを知らざれども、聞く者は皆喪す。」復た頌有り、云く、「枯木龍吟眞の見道。獨髏識無く眼初めて明かなり。㋙喜識盡くる時消息盡く。當人那ぞ辨せん濁中の淸。」雪竇謂つ可し大いに手脚有りと。一時に儞

霜、曹山の答話を引用して頌出するを云ふ。

㋐香嚴は潙山鈷の法嗣。

㋖石霜は道吾智の法嗣。

㋗曹山は洞山价の法嗣。

㋙萬松云く、「道有るときは則ち喜有り、人有るときは則ち識有り。」

㋙好彩は「ばくちの彩の目の好きを云ふ」なり。

が與に交加して頭出す。然も是の如くなりと雖も、都て兩般無し。雪竇末後に爲人の處有り、更に道ふ難難と。只だ這の難難、也た須らく透過して始めて得べし。何が故ぞ、百丈道く、「一切の語言、山河大地、一一轉じて自己に歸す」と。雪竇凡そ是れ一拈一掇、末後に到つて須らく自己に歸すべし。且く道へ、什麼の處か是れ雪竇爲人の處、揀擇明白君自ら看よと。既に是れ葛藤を打して頌じ了る。何に因つてか卻つて道ふ、君自ら看よと。㋚好彩儞をして自ら看せしむ。且く道へ、意什麼の處にか落在す、道ふこと莫れ諸人理會し得ずと。設使ひ山僧も這裏に到つては、也た只だ是れ理會し得ず。

第三則

垂示に云く、一機一境、一言一句。且く箇の入處有らんことを圖る。好肉上に瘡を剜る、窠を成し窟を成す。大用現前、軌則を存せず。且く向上の事有ることを知らんを圖る。蓋天蓋地、又摸索不著。恁麼も也た得たり、不恁麼も也た得たり、不恁麼も也た得たり、太廉纖生。恁麼も也た得ず、不恁麼も也た得ず、太孤危生。二塗に涉らず、如何してか卽ち是ならん。請ふ試みに擧す看よ。

【本則】擧す、馬大師不安。（這の漢漏逗少からず、別人を帶累し去れり。）院主問ふ、「和尚近日尊候如何。」（四百四病一時に發す、三日の後亡

【本則】東禪禪師云く、第三に宗旨の出づる所を明す、もと馬大師凡そ言句有れば、是れ提婆宗の語に依る、此の日面佛月面佛を要と爲す。

僧を送らずんば、是れ好手、仁義道中。）大師曰く、「日面佛月面佛。（可煞だ新鮮、養子の緣。）

【評唱】㋑馬大師不安、㋺院主問ふ、「和尚近日尊候如何。」大師云く、「日面佛月面佛」と。祖師若し本分の事を以て相見せずんば、如何が此の道の光輝を得ん。此れ箇の公案、若し落處を知らば、便ち丹霄に獨步せん。若し落處を知らずんば、往往枯木巖前に差路し去ること在らん。若し是れ本分の人ならば、這裏に到つて、須らく是れ耕夫の牛を驅り、飢人の食を奪ふ底の手脚有つて、方に馬大師爲人の處を見るべし。如今多く人有つて道ふ、馬大師院主を接すと。且喜すらくは沒交涉、如今衆中多く錯つて會して瞎眼して云く、「這裏に在り、左眼は是れ日面、右眼は是れ月面」と。什麼の交涉か有らん、驢年にも未だ夢にだも見ざること在らん、只管に古人の事に蹉過す。只だ馬大師此の如く道ふが如きんば、意什麼の處にか在る、有る底は云ふ、「平胃散一盞を點じ來る」と、什麼の㋩巴鼻か有らん這裏に到つて作麼生か平穩なることを得去らん。所以に道ふ、「向上の一路、千聖不傳、學者形を勞すること、猿の影を捉ふるが如し」と、只だ這の日面佛月面佛、極めて是れ見難し。雪竇此に到つて、亦是れ頌じ難し。卻つて他の見得透するが爲に、平生の工夫を用ひ盡して他を指注す、諸人雪竇を見んと要する麼、下文を看取せよ。

㋑曾元第三、馬大師の章に云く、「江西の道一禪師は、漢州の人、姓は馬氏、本邑の羅漢寺にて出家す、容貌奇異牛の如く行き虎の如く視る云々。」

㋺院主は都寺なり、又監寺、監院なり。

㋩巴は把と同じ、道具の柄なり、鼻は「つまみ」なり。故に沒巴鼻は「とらえ處なき」義なり、支那にて常に用ふる俗語なれども、宗門にては又一轉して、納僧の巴鼻など用ふ、本の據るべき有るを云ふなり。

【頌】日面佛月面佛。（口を開かば膽を見る、兩面の鏡の如し、相照して中に於て影像無きが如し。）五帝三皇是れ何物ぞ。（大高生、他を謾ずること莫くんば好し、貴ぶ可し、賤むべし。）二十年來曾て苦辛す。（自ら是れ儞落草す、山僧が事に干らず、啞子苦瓜を喫す。）君が爲めに幾か蒼龍窟に下る。（何ぞ恁麼なることを消せん、錯りて用心することを莫くんば好し、奇特無しと道ふこと莫れ。）屈。（人を愁殺す、愁人愁人に向つて說くこと莫れ。）述するに堪へたり。（阿誰に向つてか說かん、愁人に說與すれば人を愁殺す。）明眼の衲僧も輕忽すること莫れ。（更に須らく子細にすべし、咄、倒退三千。）

【評唱】㋥神宗在位の時、自ら此の頌、國を諷すと謂へり、所以に肯て藏に入れず。雪竇先づ拈じて云く、「日面佛月面佛」と。一拈し了つて卻つて云ふ、「五帝三皇是れ何物ぞ」と。且く道へ、他の意作麼生、適來已に說了也、直下に佗を注す。所以に道ふ、鈎を四海に垂れて、只だ獰龍を釣る、と、只だ此の一句に已に了れり。後面に雪竇自ら他の平生心を用て參尋する所以を頌す。二十年來曾て苦辛す、君が爲めに幾か蒼龍窟に下る、箇の什麼にか似たる。一に人の蒼龍窟裏に入つて珠を取るに似て相似たり。後來漆桶を打破し、將に謂へり多少の奇特と。元來只だ箇の五帝三皇是れ何

㋥宋太祖の後、第六主を神宗と曰ふ、乃ち英宗の子、諱は頊、熙寧元年即位、治世十八年汴に都す、圓照の本公、雪竇錄を以て藏に入れんことを請ふ、時に中書省の諸大臣議評して曰く、「其の錄支旨妙理に至りては、即ち得て測度するに及ばず、今五帝三皇是れ何物ぞと云ふ句有り、三皇五帝は是れ我が王の先祖なり、今是れ

物ぞと云ふを消得す。且く道へ、雪竇の語、什麼の處にか落在す、須らく是れ自家に退歩して看て、方に始めて他の落處を見得す。豈に見ずや、興陽の㋚剖侍者㋩遠錄公の問に答ふ、「娑竭海を出でて乾坤震ふ、覿面相呈する事若何。」剖云く、「金翅鳥王宇宙に當る、箇の中誰か是れ出頭の人」と。遠云く、「忽ち出頭に遇はば、又作麼生。」剖云く、「鶻の鳩を捉ふるに似たり、君信せずんば、髑髏前に驗して始めて眞を知らん。」遠云く、「恁麼ならば則ち㋛節を屈して胸に當て、退身三歩せん。」剖云く、「須彌座下の烏龜子重ねて點額に遭ふて回るを待つこと莫れ」。所以に三皇五帝亦是れ何物ぞ、人多く雪竇の意を見ず、只管に國を諷すと道ふ。若し恁麼に會せば、只だ是れ情見と。此れは乃ち㋜禪月㋝公子行に題して云く、「錦衣鮮華にして手に鶻を擎ぐ、閑行の氣貌輕忽多し、稼穡の艱難總に知らず、五帝三皇是れ何物ぞ。」雪竇道く、「屈、述するに堪へたり、明眼の衲僧も輕忽すること莫れ。」多少の人か蒼龍窟裏に向つて活計を作す、直饒ひ是れ頂門に眼を具し、㋞肘後に符有つて明眼の衲僧、四天下を照破するも、這裏に到つて也た輕忽する莫れ、須らく是れ子細にして始めて得べし。

何物ぞと曰ふを以て、故に大藏に入るを許さず。」

㋚會元第十四に、鄂州清剖禪師、僧問ふ、「娑竭海を出でて云々、」法を大陽の玄に嗣ぐ。

㋩遠錄公、法を葉縣の省に嗣ぐ、會元十五に云く、「舒州浮山法遠圓鑑禪師云々。」

㋛夾山抄に屈節は叉手のことなり、腕節を屈するなり、躬身屈節叉手當胸の義、屈節は元來節義を「まげる」ことなれども、こゝに借り用ひて、折腰のことにしたるなり。

㋜蜀主王建貫休に賜ふて、禪月大師と號す。

㋝公子行は王子等の遊行。

㋞仙道家護身の符なり、肘後に付すれば、都べて鬼神の畏れ無し、今本分の一著子を指す。

第四則

垂示に云く、青天白日、更に東を指し西を劃すべからず。時節因緣、亦須らく病に應じて藥を與ふべし。且く道へ、放行するが好きか、把定するが好きか。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、德山潙山に到る。(擔板漢、野狐精。)複子を挾んで法堂上に於て、(妨げず人をして疑著せしむ、敗缺を納る。)東より西に過ぎ、西より東に過ぎ、(可煞だ禪有りて什麼をか作さん。)顧視して無無と云つて便ち出づ。(好し三十棒を與ふるに、可煞だ氣天を衝く、眞の師子兒善く師子吼す。)雪竇著語して云く、「勘破了也。」(錯、果然、點。)德山門首に至り、卻つて云く、「也た草草なることを得ず。」(放去收來、頭上は太高生、末後は太低生、過を知りて必ず改む、能く幾人か有らん。)便ち威儀を具し、再び入つて相見す。(依前として這の去就を作す、已に是れ第二重の敗缺、嶮。)潙山坐する次、(冷眼にして這の老漢を看る、虎鬚を捋づることは也た須らく是れ這般の人にして始めて得べし。)德山坐具を提起して云く、「和尚。」(頭を改め面を換ふ、風無きに浪を起す。)潙山拂子を取らんと擬す。(須らく是れ那の漢にして、始めて得べし、箏を帷幄の中に運す、妨げず天下の人の舌頭を坐斷することを。)德山便ち喝して、拂袖して出づ。(野狐精の見

【本則】東嶺禪師云く、第四に宗旨驚螢する所を明す、德山は是れ衲子の基、潙山も亦師家の宗、此の則ち二老を以て手本と爲すか。

解、這の一喝也た權有り也た實有り、也た照有り也た用有り、一等に是れ雲を拏ひ霧を攫む者、中に就いて奇特なり。)雪竇著語して云く、「勘破了也」(錯、果然、點。)德山法堂を背卻して、草鞋を著けて便ち行く。(風光愛しつべし、公案未だ圓かならず、頂上の笠を贏ち得て、廊下の鞋を失卻す、已に是れ喪身失命し了れり。)潙山晩に至つて首座に問ふ、「適來の新到、什麼の處にか在る。」(東邊に落節し西邊に拔本す、眼東南を觀て意西北に在り。)首座云く、「當時法堂を背卻し、草鞋を著けて出で去れり。」(靈龜尾を曳く、好し三十棒を與ふるに、這般の漢腦後に多少をか喫すべき。)潙山云く、「此の子已後孤峰頂上に向つて、草庵を盤結して、佛を呵し祖を罵り去ること在らん。」(賊過ぎて後弓を張る、天下の禪僧跳不出。)雪竇著語して云く、「雪上に霜を加ふ。」(錯、果然、點。)

【評唱】❶夾山三箇の點の字を下す、諸人還つて會す麼。有る時は一莖草を將て、丈六の金身と作して用ひ、有る時は丈六の金身を將て、一莖草と作して用ふ。❷德山は本是れ講僧、西蜀に在つて金剛經を講ず。敎中に道ふに因らば、金剛喩定後得智の中に、千劫に佛の威儀を學し、萬劫に佛の細行を學し、然して後に成佛す、他の南方の魔子、便ち卽心是佛と說くと。遂に發憤して、疏鈔を擔ふて行脚し、直に南方に往いて、這の魔子の輩を破せんと云ふ。看よ他の恁麼の發憤、也た是れ箇の猛利底の漢なることを。初め澧州に到る、路上に一婆子の❸油糍を賣るを見て、遂に疏鈔を放下して、

❶夾山は圜悟の自稱なり。
❷德山宣鑑禪師は、龍潭崇信の法嗣なり。
❸油糍は「ごまもち」なり、事苑に餅餅、注に胡麻は卽ち油麻なり。白胡麻であへたまんちゅう。

且く㊁點心を買つて喫せんとす。婆云く、「載する所の者は是れ什麼ぞ。」德山云く、「金剛經の疏鈔。」婆云く、「我に一問有り、儞若し答へ得ば、油糍を布施して點心と作さん、若し答へ得ずんば、別處に買ひ去れ。」德山云く、「但だ問へ。」婆云く、「金剛經に云く、『過去心も不可得、現在心も不可得、未來心も不可得』と、上座那箇の心をか點せんと欲す。」山無語、婆遂に指して去つて㊃龍潭に參せしむ、纔に門に跨つて便ち問ふ、「久しく龍潭と嚮く、到來するに及んで、潭も又見えず、龍も又現ぜず。」龍潭和尙❹屏風の後に於て身を引べて云く、「子親しく龍潭に到れり」と。師乃ち禮を設けて退く、夜間に至つて入室、侍立して更深けぬ。潭云く、「何ぞ下り去らざる。」山遂に珍重して簾を揭げて出づ。外面の黑きを見て、卻回して云く、「門外黑し。」潭遂に紙燭を點じて山に度與す、山接するに方つて、潭便ち吹滅す。山豁然として大悟、便ち禮拜す。潭云く、「子箇の什麼を見てか便ち禮拜する。」山云く、「某甲今より後、更に天下の老和尙の舌頭を疑著せず。」來日に至つて、潭上堂して云く、「可の中箇の漢有り、牙劍樹の如く、口血盆に似たり、一棒に打すれども頭を回さず、他時異日、孤峰頂上に向つて、吾が道を立し去ること在らん。」山遂に疏鈔を取つて、法堂前に於て、火炬を將て擧起して云く、「諸の玄辨を窮むるも、一毫を太虛に置くが若く、世の樞機を竭すも、一滴を巨壑に投ずるに似たり」と云つて、遂に之を燒く。後に潙山の化を盛にするを聞いて、

㊁文公家禮に曰く、婦長羞を具するを點心と云ふ。
㊃天王道悟禪師の法嗣。
❹屏風は「ついたて」なり、日本の屏風は榻屏なり、身を引べてとは、半身を出しかけるなり。

直に潙山に造つて、便ち作家相見す。包も亦解かず、直に法堂に上つて、東より西に過ぎ、西より東に過ぎて、顧視して無無と云つて便ち出づ。且く道へ、意作麽生、是れ顛すること莫し麽。人多く錯つて會して、用て建立と作す、直に是れ交渉無し。看よ他の恁麽に、妨げず奇特なることを。所以に道ふ、群を出づることは須らく是れ英靈の漢なるべし、勝に敵することは他の ❶獅子兒に還す。選佛若し是の如きの眼無くんば、假饒ひ千載にも又奚か爲んと。這裏に到つて、須らく是れ通方の作者にして、方に始めて見得すべし。何が故ぞ、佛法許多の事無し、那裏にか情見を著得し來らん。是れ他の心機、那裏にか如許多の ❷阿勞有らん。所以に玄沙道く、「直に秋潭の月影、靜夜の鐘聲、扣擊に隨つて以て虧くること無く、波瀾に觸れて散ぜざるに似たるも、猶ほ是れ生死岸頭の事、這裏に到つて、亦得失是非無し、亦奇特玄妙無し。既に奇特玄妙無し、作麽生か會す」と。他東より西に過ぎ、西より東に過ぐる、且く道へ、意作麽生。❶潙山老漢、也た他に管せず、若し是れ潙山にあらずんば、也た他に折挫一上せられん。看よ他の潙山老作家の相見、只管に坐ながら成敗を觀ることを。若し深く來風を辨ぜずんば、爭か能く此の如くならん。雪竇著語して云く、「勘破了也。」一へに鐵槨に似て相似たり。衆中之を著語と謂ふ、然も兩邊に在り雖も、卻つて兩邊に住在せず、作麽生か他の勘破了也と道ふことを

❶還は「わたす」なり、敵に勝つことは、尋常の者はならぬ故、其れは師子兒の手へ「わたす」なり。

❷阿勞は勞擾なり、事多く亂「やかましき」を云ふ、阿は發語の助辭、「とりみだす」を云ふ。

❶潙山靈祐禪師は、百丈懷海の法嗣なり。

會せん。什麽の處か是れ勘破の處、且く道へ、德山を勘破するか、潙山を勘破するか、德山遂に出で門首に到つて、卻つて ❸拔本せんことを要して、自ら云く、「也た草草なることを得じ」と。潙山と五臟心肝を ❹掀出して、法戰一場せんことを要して、再び威儀を具して、卻回して相見す。潙山坐する次で、德山坐具を提起して云く、「和尚。」潙山拂子を取らんと擬す、德山便ち喝し、拂袖して出づ、可煞だ奇特なり。衆中多く道ふ、潙山他を怕るると、甚の交渉か有らん、潙山亦忙しからず。所以に道ふ、智、禽に過ぎて禽を獲得し、智、獸に過ぎて獸を獲得し、智、人に過ぎて人を獲得すと。這般の禪に參得せば、盡大地、森羅萬象、天堂地獄、草芥人畜、一時に一喝を作し來るも、他亦管せず、禪床に掀倒し、大衆を喝散すとも、他亦顧みず、天の高きが如く、地の厚きに似たり。潙山若し天下の人の舌頭を坐斷する底の手脚無くんば、時に他を驗することも也た大いに難からん。若し是れ他の一千五百人の善知識にあらずんば、這裏に到つて也た分疎不下ならん。潙山は是れ籌を帷幄に運し、勝つことを千里に決す、德山法堂を背卻して、草鞋を着けて便ち出で去る。且く道へ、他の意作麽生。儞道へ、德山是れ勝つか是れ負くるか、潙山恁麽、是れ勝つか是れ負くるか。雪竇著語して云く、「勘破了也」と、是れ他工夫を下して、古人の ❼瞎訛極則の處を見透して、方に能く恁麽に妨げず奇

❸本は本錄、拔本は「もとでな、とりかへす」なり。

❹掀出は「まけだす」と課す。

❺祖庭事苑に曰く、瞎訛、上は正しく瞎に作る、淆殺雜なり、下は謬なり、公案の何んとも道理見分け難く、「むづかしくあやしき」體を形容せる語なり、「ちがひめ」也。

❼五燈嚴統十九に、衢州天寧訥堂梵志禪師、圜悟の法嗣。

特なることを。㋐訥堂云く、「雪竇兩箇の勘破を著け、三段の判を作して、方に此の公案を顯す、傍人の二人を斷るに似て相似たり。」後來這の老漢、緩緩地に晩に至つて方に首座に問ふ、「適來の新到、什麼の處にか在る。」首座云く、「當時法堂を背卻して、草鞋を着けて出で去れり。」潙山云く、「此の子、已後孤峯頂上に向つて、草庵を盤結して、佛を呵し祖を罵り去ること在らん。」且く道へ、他の意旨如何。潙山老漢、是れ好心にあらず、德山後來佛を呵し祖を罵り、風を打し雨を打す、舊に依つて他の窠窟を出でず。這の老漢に平生の伎倆を見透せらる。這裏に到つて、喚んで潙山他に受記を與ふると作し得てん麼、喚んで澤廣うして山を藪し、㋑理能く豹を伏すと作し得てん麼。若し恁麼ならば、且喜すらくは沒交渉。雪竇此の公案の落處を知つて、敢て他の與に斷じて更に道ふ、「雪上に霜を加ふ」と。又重ねて拈起し來つて人をして見せしむ。若し見得し去らば、儞に許す、潙山德山雪竇と同參なることを。若し也た見ずんば、切に忌む、妄に情解を生ずることを。

【頌】一勘破。（言猶ほ耳に在り、過。）二勘破。（兩重の公案。）雪上に霜を加ふ曾て嶮墮す。（三段同じからず、什麼の處にか在る。）飛騎將軍虜庭に入る。（嶮、敗軍の將再斬に勞すること無けん、喪身失命。）再び完全を得る能く幾箇ぞ。（死中に活と得たり。）急に走過す。（傍若無人、三十六策、儞が神通を盡すも何の用を作すにか堪へん。）放過せず。（理能く豹を伏す、鼻孔を穿卻す。）孤峰頂上草裏に坐す。（果然、鼻孔を穿過するも也た未だ奇特と爲す、什麼と爲てか卻つて草裏に在りて坐す。）咄。（會すや、兩刄相傷る、兩兩三三舊路に行く、唱拍相隨ふ、便ち打たん。）

【評唱】雪竇一百則の公案を頌するに、一則則に香を焚いて拈出す。所以に大いに世に行はる、他更に文章を會し、公案を透得し、盤礴して熟することを得て、方に筆を下すに可なり。何が故ぞ此の如くなる、龍蛇は辨じ易く、神子は瞞じ難し。雪竇這の公案を參透し、節角瞥訛の處に於て、三句の語を著けて、撮し來つて頌出す、雪上に霜を加ふ、幾乎と嶮墮す。只だ德山の如きんば、什麼にか似たる。一へに李廣が天性射を善するに似たり、㋒天子封じて飛騎將軍と爲す、深く虜庭に入つて、單于に生獲せらる。廣時に傷病す、廣を兩馬の間に置いて、絡うて盛り臥せしむ。廣遂に詐つて死す。其の傍を睨るに、一の胡兒の善馬に騎る有り、廣身を騰げて馬に上り、胡兒を推墮して、其の弓矢を奪つて、馬に鞭ち南に馳せ、弓を彎いて追騎を射退す、故を以て脫するを得たり。這の漢這般の手段有つて、死中に活と得たり、雪竇引いて頌中に在いて用ひて、德山再び入つて相見して、舊に依つて他の跳得出し去るに比す。看よ他の古人見到說到、行到用到、妨げず英靈なることを。人を殺すに眼を眨せざる底の手脚有つて、方に立地に成佛す可し。立地に成佛する底の人有つて、自然に人を殺すに眼を眨せず、方に自由自在の分有らん。如今の人、

㋐祖庭事苑雪竇拈古「理能く豹を伏すの注に、豹當に豹に作るべし、豹は狼戾なり。」又大慧普說に、所謂理能く豹を伏す、纔に理上に到道せば、自然に你をして禮拜せしめん。」種々の說あれども狸や豹の說は取らず、豹ほ强情なるものないふ。

㋒即ち漢の孝文皇帝なり。

有る底は問著すれば、頭上は一へに衲僧の氣槩に似たり。輕輕に拶著すれば、便ち腰段と做り、股截と做る、七支八離して、渾て些子相續の處無し。所以に古人道く、「相續也た大いに難し」と。看よ他の德山潙山此の如くなることを。豈に是れ滅滅挈挈底の見解ならんや。再び完全を得る能く幾箇ぞ、急に走過す。德山喝して便ち出で去る、一へに李廣が捉れて後、計を設けて一箭に一箇の番將を射殺して、虜庭を出づることを得るに似て相似たり。雪竇頌して此に到つて大いに工夫有り、德山法堂を背卻して、草鞋を著けて出で去る、便宜を得と道ふ。殊に知らず、這の老漢、舊に依つて他の出頭を放さざること在ることを。雪竇道く、「放過せず」と。潙山晚間に至つて首座に問ふ、「適來の新到、什麼の處にか在る。」首座云く、「當時法堂を背卻して、草鞋を著けて出で去れり」と。潙山云く、「此の子他日、孤峰頂上に向つて、草庵を盤結して、佛を呵し祖を罵り去ること在らん。」幾ぞ曾て是れ放過し來らん、妨げず奇特なることを。這裏に到つて、雪竇什麼と爲てか道ふ、「孤峰頂上草裏に坐す」と。又一喝を下す、且く道へ、什麼の處にか落在す、更に參せよ三十年。

第五則

垂示に云く、大凡宗敎を扶竪せんには、須らく是れ英靈の漢なるべし。人を殺すに眼を眨せざる底の手脚あつて、方に立地に成佛すべし。所以に照用同時、卷舒齊しく唱へ、理事不二、權實並べ行ふ。

一著を放過して、第二義門を建立す。直下に葛藤を截斷せば、後學初機は、湊泊を爲し難し。昨日も恁麼、事已むことを得ず、今日も又恁麼、罪過彌天。若し是れ明眼の漢ならば、一點も他を謾ずること得ず。其れ或は未だ然らずんば、虎口裏に身を橫へ、喪身失命を免れず。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、雪峰衆に示して云く、(一盲衆盲を引く、分外と爲さず。)盡大地撮し來るに、粟米粒の大さの如し。(是れ什麼の手段ぞ、山僧從來鬼眼睛を弄せず。)面前に拋向す。(只だ恐らくは拋不下ならんことを、什麼の伎倆か有らん。)漆桶不會。(勢に倚つて人を欺く、自領出去、大衆を謾ずること莫くんば好し。)鼓を打つて普請して看よ。(瞎、鼓を打つことは三軍の爲なり。)

【評唱】長慶、雲門に問ふ、❶「雪峰與麼に道ふ、還つて出頭不得の處有り麼。」門云く、「有り。」慶云く、「作麼生。」門云く、「總に野狐精の見解を作す可らず。」雪峰云く、❷「匹上足らず、匹下餘有り、我れ更に儞が與に葛藤を打せん。」拄杖を拈じて云く、「還つて雪峰を見る麼。咄。王令稍嚴なり、行市を攙奪することを許さず。」大潙の喆云く、「我れ更に儞諸人の與に、土上に泥を加へん。」拄杖を拈じて云く、「看よ看よ、雪峰諸人の面前に向つて

【本則】東嶺禪師云く、第五に雲門言句の根を爲すを明す、此の五六則は、一等に言句の根元爲りと雖も、本末無きに非ず、雪峰雲門師と爲り賓と爲る亟れり、盡くせり、白隱先師曰く、圜悟若し左手を握りて下語せば大展三拜せん、若し又右手を握りて下語せば牛文饌に直らずと、此の語以て規誡と爲す可し。

❶雪峰義存禪師は、德山宣鑑の法嗣にして、雲門文偃の師なり。

❷唐話纂要に、匹を比に作る、二字共に唇音なれば匹は比の轉音ならん、唐音匹はヒ、比

放屙することを。咄、什麼と爲てか屎臭も也た知らざる。」雪峰衆に示して云く、「盡大地撮し來るに、粟米粒の大さの如し。」古人接物利生、奇特の處有り、只だ是れ妨げず辛懃なり、三たび投子に上り九たび洞山に到る。漆桶木杓を置いて、到る處に飯頭と作る、也た只だ此の事を透脫せんが爲なり。洞山に至つて飯頭と作るに及んで、一日洞山、雪峰に問ふ、「什麼をか作す。」峰云く、「米を淘る。」山云く、「沙を淘つて米を去るか、米を淘つて沙を去るか。」峰云く、「沙米一齊に去る。」山云く、「大衆箇の什麼をか喫せん。」峰便ち盆を覆す、山云く、「子が緣德山に在り」と云つて、指して之れに見えしむ。纔に到つて便ち問ふ、「從上宗乘中の事、學人還つて分有りや也た無しや。」德山打すること一棒して云く、「什麼と道ふ。」此れに因つて省有り、後鵞山に在つて雪に阻てらる、巖頭に謂つて云く、「我れ當時德山の棒下に在つて、桶底の脫するが如くに相似たり。」巖頭喝して云く、「儞道ふことを見すや、門より入る者は、是れ家珍にあらず」と、須らく是れ自己胷中より流出して、蓋天蓋地にして、方に少分の相應有るべし。」雪峰忽然として大悟す。禮拜して云く、「師兄、今日始めて是れ鵞山成道」と。如今の人只管に道ふ、「古人特地に做作して、後人をして規矩に依らしむ」と。若し恁麼ならば、正に是れ他の古人を誘す、之れを出佛身血と謂ふ。古人は如今の人の苟且なるに似ず、豈に一言半句を以て、以て平生に當てんや。若し宗敎を扶竪し佛の壽命を續ぐことは、一言半句を吐くに、自然に天下の人の舌頭を坐斷する所以なり、儞が意路を著け、

はヒイなり、唐話の注に「上を見れば、限りはなけれども下を見ればまだよいうちと云ふ事」とあり。

情解を作し、道理に涉る處無し。看よ他の此れ箇の示衆、蓋し他曾て作家に見え來るが爲に、所以に作家の鉗鎚有り。凡そ一言半句を出すも、是れ心機意識思量の鬼窟裏に活計を作さず、直に是れ超群拔萃、古今を坐斷して、擬議を容れず、他家の用處、盡く是れ此の如し。一日衆に示して云く、「南山に一條の鱉鼻蛇有り、汝等諸人、切に須らく好く看取すべし。」時に稜道者衆を出でて云く、「恁麼ならば則ち今日堂中、大いに人有つて喪身失命し去ること在らん。」又云く、「盡大地是れ沙門の一隻眼、汝等諸人、什麼の處に向つてか屙せん。」又云く、「㋑望州亭に汝と相見了也、㋺烏石嶺に汝と相見了也、僧堂前に汝と相見了也。」時に保福、鵝湖に問ふ、「僧堂前は卽ち且く置く、如何なるか是れ望州亭、烏石嶺相見の處。」鵝湖㋭驟步して方丈に歸る。他常に這般の語を擧して衆に示す、只だ道ふが如きんば、盡大地撮し來るに、粟米粒の大さの如しと。這箇の時節、且く道へ、情識を以て卜度し得てん麼。須らく是れ羅籠を打破して、得失是非、一時に放下して、洒洒落落たらば、自然に他の㋩圈續を透得して、方に他の用處を見るべし。且く道へ、雪峰の意什麼の處にか在る、人多く情解を作して道ふ、「心は是れ萬法の主、盡大地一時に我が手裏に在り」と、且喜すらくは沒交涉。這裏に到つて、須らく是れ箇の眞實の漢にして、聊か擧著するを聞いて、徹骨

㋑望州亭は雪峰に在り、二十三景の一なり。
㋺福州烏石山浙江に有り。
㋭驟は韻會に、行くこと疾きなり。「ちよこ〳〵はしり」。
㋩圈續は「わな」と譯す、事苑に云く、圈は風木なり、續は蠱なり。「まげもの」也。
㋬俗呼小錄に云く、人の頹敗及び身病摧靡なる者を郎當と云ふとあり、「おちぶれ、」又は「よぼける」と譯す。

徹髓、見得透して、且つ情思意想に落ちざるべし。若し是れ箇の本色行脚の衲子ならば、他の恁麼に已に是れ ㊀ 郎當して人の爲にし了ることを見ん。看よ他の雪竇の頌に云く。

【頌】 牛頭沒し。(閃電に相似たり、蹉過了也。)馬頭回る。(擊石火の如し。)曹溪鏡裏塵埃を絕す。(鏡を打破し來れ儞が與に相見せん、須らく是れ打破して始めて得べし。)鼓を打つて看せしめ來るに君見ず。(儞が眼睛を刺破す、輕易することを莫くんば好し、漆桶什麼の見難き處か有らん。)百花春到つて誰が爲めにか開く。(法相饒さず、一場の狼藉、葛藤窟裏より出頭し來る。)

【評唱】 雪竇自然に他の古人を見て、只だ他の命脈の上に去つて一箭して、他の與に頌出することを消す。㊁「牛頭沒し馬頭回る」と、且く道へ、箇の什麼をか說く、見得透する底は、早朝に粥を喫し、齋時に飯を喫するが如くに相似たり。只だ是れ尋常なり、雪竇の慈悲、當頭に一鎚に擊碎し、一句に截斷す、只だ是れ妨げず孤峻なることを。擊石火の如く、閃電光に似たり、鋒鋩を露さず、儞が湊泊の處無し。且く道へ、意根下に向つて、摸索し得てん麼。此の兩句、一時に道ひ盡し了れり。雪竇第三の句に、卻つて一線道を通じて、略些の風規を露す、早く是れ落草、第四の句、直下に更に是れ落草、若し言上に向つて言を生じ、句上に句を生じ、意上に意を生じ、解を作し會を作さば、唯だ老僧を帶累するのみにあらず、亦乃ち雪竇に辜負せん。古人の句は此の如しと雖も、意は此の如くならず、

㊁ 間に髮を容れざるなり、牛馬に用無し、「あちらが、引つこむかと思へば、こちらが出る」なり。

終に道理を作して人を繫縛せず。曹溪鏡裏塵埃を絕す、多少の人道ふ、靜心便ち是れ鏡と。且喜すらくは沒交涉、只管に計較道理を作さば、什麼の了期か有らん。這箇は是れ本分の說話、山僧敢て本分に依らざるにあらず、牛頭沒し、馬頭回る、雪竇分明に說き了れり、自ら是れ人見ず。所以に雪竇此の如く郎當して頌して道ふ、「鼓を打つて看せしめ來るに君見ず」と。癡人還つて見る麼、更に儞に向つて道ふ、「百花春至つて誰が爲にか開く」と。謂つ可し戶牖を豁開して、儞が與に一時に八字に打開し了れりと。春の來るに及んで、幽谷野澗、乃至人無き處、百花競ひ發く。儞且く道へ、更に誰が爲にか開く。

第六則

【本則】 擧す、雲門垂語して曰く、「十五日已前は汝に問はず、(半は河南半は河北、這裏舊曆日を收めず。)十五日已後、一句を道ひ將ち來れ。」(免れず朝より暮に至ることを。切に忌む道著することを。來日是れ十六、日月流るゝが如し。)自ら代つて云く、「日日是れ好日。」(收、鰕跳れども斗を出でず、誰が家にか明月淸風無からん。還つて知るや、海神貴きことを知りて價を知らず。)

【評唱】 ㊀ 雲門初め睦州に參す、州旋機電轉して、直に是れ湊泊し難し。

【本則】
東嶺禪師云く、第六は則ち雲峰、雲門、師と爲り賓と爲るの妙を明す、此の頌先師特に評語を加ふ、初めの二句は圓融無碍自在爲るの意を論ず、次の六字は設ひ此の時節に至るも、祖師門下に於て、便ち是れ重々の繫縛、終りの二句は天下の宗匠皆此の無一物を

尋常人を接するに、纔かに門に跨れば、便ち搊住して曰く、「道へ道へ。」擬議㊐不來なれば、便ち推し出して曰く、㊅「秦時の轉轢鑽」と。雲門凡そ去つて見ゆ、第三回に至つて、纔かに門を敲く。州云く、「誰ぞ。」門云く、「文偃。」纔かに門を開く、便ち跳り入る、州搊住して云く、「道へ道へ。」門擬議す、便ち推し出さる。門の一足門閫の內に在り、州に急に門を合せられて、雲門の腳を拶折す。門忍痛して聲を作して、忽然として大悟す。後來語脈人を接するに、㊁一摸に睦州を脫出す。後㊆陳操尙書が宅に於て住すること三年、睦州指して雪峰の處に往いて去らしむ。彼に至つて衆を出でて便ち問ふ、「如何なるか是れ佛。」峰云く、「寐語すること莫れ。」雲門便ち禮拜す。一住三年、雪峰一日問ふ、「子が見處如何。」門云く、「某甲が見處、從上の諸聖と、一絲毫許りも移易せず。」㊇靈樹二十年、首座を請せず、常に云く、「我が首座生せり。」又云く、「我が首座㊈牧牛せり。」復云く、「我が首座行腳せり。」忽ち一日鐘を撞かしめて、三門前に首座を接す、衆皆之れを訝る、雲門果して至る、便ち請じて首座寮に入つて包を解かしむ。靈樹人號して知聖禪師と曰ふ、過去未來の事預め皆知る。一日㊉廣主劉王將に兵を興さんとす、躬ら院に入つて、師に臧否を決せんことを請はんとす、靈樹已に先づ知つて、怡然として坐化す。廣主怒つて曰く、「和尙何の時か疾を得たる。」侍者對へて曰く、「師曾て疾有らず、適に一㊀合子を封じて、王の來らんを俟つて之を呈せしむ。」廣主合を開いて一帖子を得るに云く、「人天の眼目、堂中の首座」と。廣主旨を悟つて遂に兵を寢む。雲門を請じて、出世して靈樹に住せしむ。後來方に雲門に住す、師開堂說法、鞠常侍と云ふもの有つて問を致す、「靈樹の果子熟するや也た未しや。」門云く、「什麼の年中にか生と道ふ㊋信を得たる。」復劉王の昔賣香の㊌客と爲る等の因緣を引く、劉王後に靈樹に謁して知聖禪師と爲す。靈樹は生生通を失はず、雲門は凡そ三生王と爲る、所以に通を失す。一日劉王師を詔して、㊍內に入れて夏を過さしむ、數人の尊宿と共に、皆內人の問訊を受けて說法す。唯だ師一人言はず、亦人の親近する無し。一の直殿使有つて、一偶を書して、㊎碧玉殿上に貼在して云く、「大智の修行始めて是れ禪、禪門に默に宜しく喧に宜しからず、萬般の巧說爭か實に如かん。」雲門の總に言はざるに輸卻す、雲門尋常愛して三字の禪を說く、顧、鑒、咦、又一字の禪を說く。僧問ふ、「父を殺し母を殺しては佛前に懺悔す、佛を殺し祖を殺しては、什麼の處に向つてか懺悔せん。」門云く、「露。」又問ふ、「如何なるか是れ正法眼藏。」門云く、「普。」直に是れ擬議を容れず、平鋪處に到つて、又卻つて人を罵

㊀一摸は模範なり、睦州の「いかたな、まるだしにする」なり。
㊁睦州の法嗣。
㊂靈樹如敏禪師は法を大安の門に嗣ぐ。
㊃牧牛は修行することなり。
㊄歷代世紀に南漢と號す、諱は龑姓は劉、後廣州に據るが故に廣主と曰ふ。
㊅正韵に合子は物を盛る器、又盒にも作る。
㊆信は信息、卽ち「たより」なり。
㊇客は商客「たびあきうど」なり。
㊈內は禁裏なり。
㊉劉主の殿の名なり。

認めて宗旨と爲す、悲しむ可し笑ふ可し、末後の八字は是れ則ち雲門の妙處にして、他師の及ぶ可らざる大事のみ、雲門宗の大事最も五六箇則の中に在り。

㊀雲門諱は文偃、雪峰の法嗣にして、吾が宗五家中雲門宗の開祖なり。
㊁不の字「きびしく云ふ」辭なり。
㊂方語に你が入頭の處無きを云ふ、所謂老古錐鈍うして了に鑽ること無く、用ふる處無きなり、「もみきり」也。秦時は「久しい」也。
㊃摸は模範なり、睦州の「いかたな、まるだしにする」なり。
㊄靈樹如敏禪師は法を大安の門に嗣ぐ。
㊅牧牛は修行することなり。
㊆歷代世紀に南漢と號す、諱は龑姓は劉、後廣州に據るが故に廣主と曰ふ。
㊇正韵に合子は物を盛る器、又盒にも作る。
㊈信は信息、卽ち「たより」なり。
㊉客は商客「たびあきうど」なり。
㊋內は禁裏なり。
㊌劉主の殿の名なり。

る、若し一句語を下せば、鐵橛子の如くに相似たり。後四哲を出す、乃ち㋐洞山の初、㋑智門の寛、㋒德山の密、㋓香林の遠、皆大宗師爲り。香林十八年侍者と爲る、凡そ他を接するに、只だ遠侍者と叫ぶ、遠云く、「諸。」門云く、「是れ什麼ぞ。」此の如きこと十八年。一日方に悟る、門云く、「我れ今より後更に汝を叫ばじ。」雲門尋常人を接するに、多く睦州の手段を用ふ、只だ是れ湊泊を爲し難し、釘を抽き楔を拔く底の鉗鎚有り、雲竇道く、「我れは愛す韶陽新定の機、一生人の與に釘を抽き楔を拔く」と。箇の門頭を垂れて衆に示して云く、「十五日已前は汝に問はず、十五日已後一句を道將し來れ。」千差を坐斷して凡聖を通せず、自ら代つて云く、「日日是れ好日。」十五日已前、這の語已に千差を坐斷す、十五日已後、這の語也た千差を坐斷す。是れ他明日は是れ十六と道はず、後人只管に語に隨つて解を生す、什麼の交涉か有らん。他の雲門箇の宗風を立す、須らく是れ箇の爲人の處有るべし。垂語し了つて、卻つて自ら代つて云く、「日日是れ好日」と。此の語古今を通貫して、從前至後、一時に坐斷す。山僧此の如きの說話、也た是れ語に隨つて解を生す。他殺せんより自殺せんには如かず、纔に道理を作さば、坑に墮ち塹に落つ。雲門一句の中に、三句俱に備る、蓋し是れ他家の宗旨此の如し。一句語を垂るゝに、須らく宗に歸せんことを要すべし。若し此の如くならずんば、只だ是れ杜撰、此の事許多の論說無し。而も未透の者は、卻つて此の如くならんことを要す。若し透得せば、便ち古人の意旨を見ん、雪竇の葛藤を打するを看取せよ。

㋐襄州洞山守初宗禁禪師。
㋑鄂州智門師寛禪師。
㋒鼎州德山緣密圓明禪師。
㋓益州青城香林院澄遠禪師。

【頌】一を去卻し、(七穿八穴、什麼の處に向つてか去る。一著を放過す。)七を拈得す。(拈不出、卻つて放過せず。)上下四維等匹無し。(何似生、上は是れ天、下は是れ地、東南西北と四維と、什麼の等匹か有らん。爭奈せん拄杖我が手裏に在ることを。)徐に行いて踏斷す流水の聲。(脚跟下を問ふこと莫れ、體究を爲し難し、葛藤窟裏に打入し去り了れり。)縱に觀て寫し出す飛禽の跡。(眼裏亦此の消息無し、野狐精の見解、依前として只だ舊窠窟裏に在り。)草茸茸。(腦後に箭を拔く、是れ什麼の消息ぞ、平實の處に墮在す。)煙羃羃。(未だ這の窠窟を出でず、足下雲生ず。)空生巖畔花狼藉。(什麼の處にか在る、不唧噜の漢、勘破了也。)彈指して悲むに堪へたり舜若多。(四方八面盡法界、舜若多の鼻孔裏に向つて一句を道ひ將ち來れ、什麼の處にか在る。)動著する時如何。(動著せば三十棒。(自領出去、便ち打たん。)

【評唱】雪竇の頌古、偏に能く此の如し、當頭に金剛王寶劍を以て、揮ふこと一下し了つて、然して後略些の風規を露す。然も此の如しと雖も、畢竟二解有ること無し、一を去卻し、七を拈得す。人多く算數の會を作して道ふ、「一を去卻するは、是れ十五日已前の事」と。雪竇蓋頭に兩句の言語を下し印破し了つて、卻つて露出して人をして見せしむ。一を去卻し、七を拈得す、切に忌む言句の中に向つて活計を作すことを。何が故ぞ、胡餅什麼の汁か有らん、人多く意識の中に落在す、須らく是れ語句

未生已前に向つて、會取して始めて得べし、大用現前、自然に見得せん。所以に釋迦老子、成道の後、摩竭提國に於て、三七日中、是の如きの事を思惟す。諸法寂滅の相、言を以て宣ぶ可らず、我れ寧ろ說法せず、疾かに涅槃に入らんと。這裏に到つて、箇の開口の處を覓むるに得ず、方便力を以ての故に、㋐五比丘の爲に說き已る。三百六十會に至つて、㋑一代時敎を說く、只だ是れ方便なり。所以に珍御の服を脫し、弊垢の衣を著け、已むことを得ずして第二義門の中、淺近の處に向つて、諸子を誘引す。若し他をして向上に全提せしめば、盡大地一箇半箇無けん。且く道へ、作麼生か是れ第一句、這裏に到つて、雪竇些の意を露して、人をして見せしむ。儞但だ上諸佛有ることを見ず、下衆生有ることを見ず、外山河大地有ることを見ず、內見聞覺知有ることを見ず、大死底の人の卻つて活くるが如くに相似て、長短好惡、打成一片にして、一々拈じ來るに、更に異見無し。然して後應用其の宜しきを失はず、方に他の一を去卻し七を拈得す、上下四維等匹無しと道ふことを見ん。若し此の句に於て透得せば、直に得たり上下四維等匹有る無きことを。森羅萬象、草芥人畜、著著全く自己の家風を彰す。所以に道ふ、萬象の中獨露身、惟だ人自ら肯ふて乃ち方に親し。昔年謬つて途中に向つて覓む、今日看來れば火裏の冰、天上天下惟我獨尊、人多く末を逐ふて、其の本を求めず、先本正しきを得れば、自然に風行けば草偃し、水到れば渠成る。徐に行いて踏斷す流水の聲、徐徐として行動する

㋐佛成道の後、初めて鹿苑に於て、四諦の法を說いて憍陳如等を度す。
㋑五時八敎。

時、浩浩たる流水の聲も、也た應に踏斷すべし。縱に觀て寫し出す飛禽の跡、目を縱にして一觀するに、直饒ひ是れ飛禽の跡も、亦寫し出すが如くに相似たり。這裏に到つて、鑊湯爐炭も吹いて滅せしめ、劍樹刀山も喝して便ち摧く、難事と爲さず。雪竇此に到つて慈悲の故に、人の無事界中に坐在せんことを恐れて、復た道ふ、「草茸茸、煙羃羃。」蓋覆卻する所以なり。直に得たり草茸茸、煙羃羃たることを。且く道へ、是れ什麼人の境界ぞ、喚んで日日是れ好日と作し得てん麼、且喜すらくは沒交涉。直に得たり徐に行いて踏斷す流水の聲も也た不是、縱に觀て寫し出す飛禽の跡も也た不是、草茸茸も也た不是、煙羃羃も也た不是、直饒ひ總に不恁麼なるも、正に是れ空生巖畔花狼藉、也た須らく是れ那邊を轉過して始めて得べし。豈見ずや須菩提巖中に宴坐す、諸天花を雨らして讚嘆す。尊者曰く、「空中に花を雨らして讚嘆するは、復た是れ何人ぞ。」天曰く、「我れは是れ天帝釋。」尊者曰く、「汝何をか讚嘆す。」天曰く、「我れ尊者の善く般若波羅蜜多を說き玉ふを重んず。」尊者曰く、「我れ般若に於て未だ嘗て一字をも說かず、汝云何が讚嘆せん。」天曰く、「尊者無說、我れ乃ち無聞、無說無聞、是れ眞の般若」と云つて、又復た地を動して花を雨らす。雪竇亦曾て頌有り、云く、「雨過ぎ雲凝つて曉半ばは開く、數峰畫くが如く碧崔嵬、空生解せず巖中に坐することを、天花動地を惹き得來る、天帝既に地を動して花を雨らす、這裏に到つて、更に那裏にか藏れ去らん。」雪竇、又道く、「我れ恐らくは之を逃るれども逃るゝこと得ず、大方の外皆充塞す、忙忙擾擾知んぬ何ぞ窮らん、八面の清風衣裓を惹く」と。

直に淨裸裸赤洒洒として、都て纖毫の過患無きことを得るも、也た未だ極則と爲さず。且く畢竟如何か即ち是ならん、下文を看取せよ。云く、「彈指して悲むに堪へたり舜若多。」梵語に舜若多、此には虛空神と云ふ、虛空を以て體と爲し、身無うして觸を覺す、佛光の照すを得て、方に身を現得す。儞若し舜若多神に似たることを得ん時、雪竇正に好し彈指して悲歎するに。又云く、「動著すること莫れ、動著する時如何、白日青天、眼を開いて瞎睡す。」

第七則

垂示に云く　聲前の一句、千聖不傳。未だ曾て親覲せざれば、大千を隔つるが如し。設使聲前に向つて辨得して、天下人の舌頭を截斷するも、亦未だ是れ性惺の漢にあらず。所以に道ふ、天も蓋ふこと能はず、地も載すること能はず、虛空も容るゝこと能はず、日月も照すこと能はず、無佛の處獨り尊と稱して、始めて些子に較れり。其れ或は未だ然らずんば、一毫頭上に於て透得して、大光明を放つて、七縱八橫、法に於て自在自由ならば、手に信せて拈じ來るに、不是あること無し。且く道へ、箇の什麼を得てか、此の如く奇特なる。復云く、大衆會すや、從前の汗馬人の識る無し、只重ねて蓋代の功を論せんことを要す。卽今の事は且く致く、雪竇の公案、又作麼生。下文を看取せよ。

【本則】　擧す、僧、法眼に問ふ、（什麼と道ふぞ、擦枷過狀。）「慧超、和尙に咨す如何なるか是れ佛。」（什麼と道ふぞ、眼睛突出す。）法眼云く、「汝は是れ慧超。」（模に依つて脫出す、鐵餕餡、就身打劫。）

【評唱】　❶法眼禪師、啐啄同時底の機有り、啐啄同時底の用を具して、方に能く此の如く答話す。所謂聲を超え色を越えて、大自在を得たり。縱奪時に臨み、殺活我れに在り、妨げず奇特なり。然れども此れ箇の公案、諸方に商量する者多く、情解の會を作す者少からず。知らず古人凡そ一言半句を垂示すること、擊石火の如く、閃電光に似て、直下に一條の正路を撥開することを。後人只管に言句上に去つて、解會を作して道く、「慧超は便ち是れ佛、所以に法眼恁麼に答ふ」と。有る者は道ふ、大いに牛に騎つて牛を覓むるに似たり。有る者は道ふ、問處便ち是と、什麼の交涉か有らん。若し恁麼に會し去らば、惟だ自己に辜負するのみにあらず、亦乃ち深く古人を㊁屈せん。若し他の全機を見んと要せば、是れ一棒に打せども頭を回さざる底の漢、牙劍樹の如く、口血盆に似て、言外に向つて歸を知つて、方に少分の相應有るを除非す。若し一々情解を作さば、盡大地是れ胡種族を滅する底の漢ならん。只だ超禪客此に於て悟り去るが如きんば、也た是れ他尋常管帶參究す。所以に一言の下に桶底の脫するが如くに相似たり。只だ㊅則監院の如きは、法眼の會中に

【本則】
東嶺禪師云く、第七に爲人方便を明す、法眼宗の臨機應變、敢て別人の企及する底の事に非す、法眼はもと雪峰より出づ、此の則最も本と爲すか。
❶法眼禪師諱は文益、地藏桂琛の法嗣にして、五百人の善知識と稱せられ、禪宗五家中法眼宗の開祖なり。
㊁屈は寃屈、「むじつ」なり。
㊅會元に金陵報恩院の玄則禪師は、滑州衞南の人なり。

在つて、也た曾て參請入室せず。一日法眼問うて云く、「則監院何ぞ來り入室せざる。」則云く、「和尚豈に知らずや、某甲青林の處に於て、箇の入頭有り。」法眼云く、「汝試みに我が爲に擧せよ看ん。」則ち云く、「某甲問ふ、如何なるか是れ佛。林云く、丙丁童子來求火。」法眼云く、「好語、恐らくは儞錯つて會せんことを、更に說く可し看ん。」則云く、「丙丁は火に屬す、火を以て火を求む、某甲が如きは是れ佛、更に去つて佛を覓む。」法眼云く、「監院果然錯つて會し了れり。」則㊀不憤して、便ち起單して㋕江を渡り去る。法眼云く、「此の人若し回らば救ふ可し、回らずんば救ふことを得じ。」則中路に到つて、自ら忖つて云く、「他は是れ五百人の善知識、豈に我れを賺す可けん耶。」遂に回つて再び參ず。法眼云く、「儞但だ我れに問へ、我れ儞が爲に答へん。」則便ち問ふ、「如何なるか是れ佛。」法眼云く、「丙丁童子來求火。」則言下に於て大悟す。如今有る者は只管に瞠眼して解會を作す。所謂彼れ既に瘡無し、之を傷ること勿れ。這般の公案、久參の者は、一擧すれば便ち落處を知る、法眼下に之を箭鋒相拄ふと謂ふ、更に五位君臣、㋩四料簡を用ひず、直に箭鋒相拄ふことを論ず。是れ他の家風此の如し、一句下に便ち見ば、當陽に便ち透らん。若し句下に向つて尋思せば、卒に摸索不著ならん。法眼出世して、五百の衆有り、是の時佛法大いに興る。時に㋭韶國

㊀不憤は只だ憤る意なり、不の字を付するは、つよく」云ひしなり、俗語に「つよく熱するを好不熱、つよくひゆるを好不冷」と云ふ。

㋕江は楊子江なり。

㋩臨濟大師人を接する手段。

㋭會元第十に、天台山の德韶國師は處州龍泉陳氏の子なり云云。

㋮疎山は江西に在り、匡仁禪師なり。

師、久しく㋮疎山に依る、自ら謂へり旨を得と。乃ち疎山平生の文字頂相を集めて、衆を領じて行脚す。法眼の會下に至つて、他亦去つて入室せず、只だ參徒をして衆に隨つて入室せしむ。一日法眼陞座す、僧有り問ふ、「如何なるか是れ曹源の一滴水。」法眼云く、「是れ曹源の一滴水。」其の僧惘然として退く。韶衆に在つて之を聞き、忽然として大悟す。後出世して法眼に承嗣す、頌有り、呈して云く、「㋯通玄峰頂、是れ人間にあらず、心外無法、瀟目青山。」法眼印して云く、「只だ這の一頌、吾宗を繼ぐ可し、子後に㋰王侯の敬重する有らん、吾汝に如かず」と。看よ他の古人、恁麼に悟り去ることを。是れ什麼の道理ぞ、只だ山僧をして說かしむ可らず、須らく是れ自己、二六時中精神を打辨す。恁麼に他と㋱承當するに似たらば、他日十字街頭に向つて、垂手爲人せんこと、也た難事と爲す。所以に僧、法眼に問ふ、「如何なるか是れ佛。」法眼云く、「汝は是れ慧超」と、甚の相辜負する處か有らん。見ずや雲門道く、「擧するに顧みざれば卽ち差互す、思量せんと擬せば何の劫にか悟らん」と。雪竇後面に頌し得て、妨げず顯赫なることを。試みに擧す看よ。

【頌】　江國の春風吹き起たず。（蓋大地那裏よりか這の消息を得たる、文彩已に彰る。）鷓鴣啼いて深花裏に在り。（喃喃たること何ぞ用ひん、又風に別調の中に吹かる。豈に恁麼の事有らんや。）三級浪

㋯天台山に通玄峰あり。

㋰傳燈二十五師の章に云く、時に吳越の忠懿王、國王の子なるを以て台州に刺たり、師の名を慕いて延請して道を問ふ、師謂つて曰く、「他日霸王と爲らば佛恩を忘るゝこと莫れ。」後の乾祐元年戊申國位を嗣ぐ、使を遣し之れを迎へて弟子の禮を申ぶ云々。

㋱承當は「ひきうけて、吾が物にする」と譯す。

高うして魚龍と化す。(這の一路を通ず、大衆を謾ずること莫くんば好し、龍頭に踏著す。)癡人猶ほ戽む夜塘の水。(扶籬摸壁、門を挨し戸に傍ふ、衲僧什麼の用處か有らん、株を守りて兎を待つ。)

【評唱】雪竇は是れ作家、古人の咬み難く嚼み難き、透り難く見難き、節角話訛の處に於て、頌出して人をして見せしむ、妨げず奇特なることを。雪竇法眼の關捩子を識得し、又慧超の落處を知る、更に後人の法眼の言句下に向つて、錯つて解會を作さんことを恐る。所以に頌出す、這の僧此の如く問ひ、法眼是の如く答ふ。便ち是れ江國の春風吹き起たす、鷓鴣啼いて深花裏に在り。此の兩句只だ是れ一句なり。且く道へ、雪竇の意什麼の處にか在る、江西江南、多く兩般の解會を作して道ふ、「江國の春風吹き起たすとは、用て汝は是れ慧超と云ふを頌す。只だ這箇の消息、直饒江國の春風も也た吹き起たす、鷓鴣啼いて深花裏に在りとは、用て諸方這の話を商量して浩浩地なること、鷓鴣の啼いて深花裏に在るに似て相似たることを頌すと、什麼の交渉か有らん。殊に知らず、雪竇の這の兩句、只だ是れ一句なることを。縫無く罅無きことを得んと要せば、明明に汝に向つて道ふ、「言も也た端、語も也た端、蓋天蓋地、他問ふ如何なるか是れ佛。」法眼云く、「汝は是れ慧超。」雪竇道く、「江國の春風吹き起たす、鷓鴣啼いて深花裏に在り。」這裏に向つて薦得し去らば、以て丹霄に獨歩す可し。儞若し情解を作さば、三生六十劫、雪竇の第三第四の句、忒煞だ ❼傷慈なり、人の爲に一時に說破す。超禪師當下に大悟の處、三級浪高うして魚龍と化するが如し、癡人猶

❼傷慈は、慈悲過ぎて、慈悲にきずが付くの義なり。

ほ戽む夜塘の水。禹門三級の浪、孟津は卽ち是れ龍門なり、禹帝鑿つて三級と爲す。今三月三、桃花開く時、天地の感ずる所にして、魚有り龍門を透得すれば、頭上に角を生じ、鬃鬣尾を昂げて、雲を拏らうて去る、跳り得ざる者は、點額して回る。癡人言下に向つて咬嚼するは、夜塘の水を戽んで魚を求むるに似て相似たり。殊に知らず、魚已に化して龍と爲ることを。端師翁頌有り、云く、「一文の❼大光錢、箇の油糕を買ひ得たり、肚裏に喫向し了つて、當下に飢を聞かず。」此の頌極めて好し、只だ是れ太だ拙なり。雪竇頌し得て極めて巧なり、鋒を傷り手を犯さず。舊時慶藏主愛して人に問ふ、「如何なるか是れ三級浪高うして魚龍と化す」と。我れは也た必とせざることあり、我れ且く儞に問はん、「化して龍と作り去る、卽今什麼の處にか在る。」

❼大光年中の製故に云ふ。

第八則

垂示に云く、會するときんば途中受用。龍の水を得るが如く、虎の山に靠るに似たり。會せざるときんば世諦流布、羝羊藩に觸れ、株を守つて兎を待つ。有る時の一句は、金剛王寶劍の如く、有る時の一句は、天下の人の舌頭を坐斷し、有る時の一句は、隨波逐浪。若し也た途中受用ならば、知音に遇うて機宜を分ち休咎を識り、相共に證明せん。若し也た世諦流布ならば、一隻眼を具して、以て十方を

坐斷して、壁立千仞なるべし。所以に道ふ、大用現前、軌則を存せず、有る時は一莖草を將て、丈六の金身と作して用ひ、有る時は丈六の金身を將て、一莖草と作して用ふ。且く道へ、什麼の道理にか憑る。還つて委悉すや、試みに擧す看よ。

【本則】擧す、翠巖夏末に衆に示して云く、「一夏以來、兄弟の爲めに說話す。(口を開かば焉ぞ恁麼なることを知らん。)看よ翠巖が眉毛在りや。」(只だ眼睛も也た地に落つることを贏ち得たり。鼻孔に和して也た失し了れり。地獄に入ること箭の射るが如し。)保福云く、「賊と作る人心虛なり。」(灼然、是れ賊賊を識る。)長慶云く、「生せず。」(吞頭地に落つ、錯を將て錯に就く、果然。)雲門云く、「關。」(什麼の處にか走在し去る、天下の衲僧跳不出、敗也。)

【評唱】古人晨參暮請有り、❶翠巖夏末に至つて、卻つて恁麼に衆に示す。然れども妨げず孤峻、妨げず天を驚し地を動すことを。且く道へ、一大藏教、五千四十八卷、免れず心と說き性と說き、頓と說き漸と說くことを。還つて這箇の消息有り麼、一等に是れ恁麼の時節、翠巖中に就いて奇特なり、看よ他の恁麼に道ふことを。且く道へ、他の意什麼の處にか落在す。古人一鈎を垂るるに、終に虛に設けず、須らく是れ箇の道理の人の爲にする有るべし。

【本則】
東嶺禪師云く、第八に宗師頭を衆め互に祖庭春色を成すを明す、翠巖本と成り保福長慶左右に扶持し、雲門結成して一宗の祕旨奧義を留示す、是の故に大應の大燈に於ける大燈の關山に於ける、此の則を以て宗旨を定む。

❶明州翠巖の令儀禪師は、保福從展、長慶慧稜、雲門文偃と共に雪峰義存の法嗣なり。

人多く錯り會して道く、「白日青天、㊁無向當の話を說いて、無事に事を生ず、夏末に先づ自ら過を說き、先づ自ら點檢し、別人の他を點檢せんことを免れ得ることを。」且喜すらくは沒交涉。這般の見解、之を胡種族を滅すと謂ふ。歷代の宗師出世、若し人に垂示せずんば、都て利益無し。箇の什麼をか圖らん、這裏に到つて、見得透せば、方に古人耕夫の牛を驅り、飢人の食を奪ふ手段有ることを。如上の人問著すれば、便ち言句下に向つて咬嚼し、眉毛上に活計を作す。看よ他の屋裏の人、自然に他の行履の處を知つて、千變萬化、節角聱訛、著著出身の路有り、便ち能く此の如く他と酬唱することを。此の語若し奇特無くんば、雲門・保福・長慶三人、㊅唖々地に他と酬唱して什麼か作ん。保福云く、「賊と作る人心㊀虛なり。」只だ此の語に因つて、適來の許多の情解を說くことを惹き得たり。且く道へ、保福の意作麼生、切に忌む句下に向つて他の古人を覓むることを。儞若し情を生じ念を起さば、則ち儞が眼睛を換へん。殊に知らず、保福一轉語を下して、翠巖の脚跟を截斷することを。長慶云く、「生也。」人多く道ふ、長慶翠巖の脚跟に隨つて轉ず、所以に生也と道ふ、且得沒交涉。知らず長慶自ら他の見解を出して生也と道ふことを。各出身の處有り、我れ且く儞に問はん、「是れ什麼の處か是れ生處。」一に作家面前に、金剛王寶劍を、直下に卽ち用ふるに似たり。若し能く常流の見

㊁楞伽云く、「來由沒く、向ふ所無き話なり、」禪子に、「玉巵當無し、」注に、「底無きなり。」「理に當らぬ。」

㊅唖々は、「わちや、くちや」と讀す。犬の多く集りて、くいあふ也。

㊀虛は、虛怯なり、「びくく、なぢつく」なり、虛誕の虛に非ず、慢世恒言に曾く、「古へより道ふ、賊人心虛なり」と、又四遊記に、「心虛し膽戰く、」「心がおるすになる」意なり。

解を打破し、得失是非を截斷せば、方に長慶他と酬唱する處を見ん。雲門云く、「關。」妨げず奇特なることを、只だ是れ參じ難し。雲門大師、多く一字の禪を以て人に示す、一字の中と雖も、須らく三句を具すべし。看よ他の古人機に臨んで酬唱することを、自然に今時の人と迥かに別なり。此れ乃ち句を下す底の樣子なり、他此の如く道ふと雖も、意決して那裏に在らず。既に那裏に在らず、且く道へ、什麼の處にか在る、也た須らく子細に自ら參じて始めて得べし。若し是れ明眼の人ならば、天を照し地を照す底の手脚有つて、直下に八面玲瓏たらん。雪竇他の一箇の關の字の爲に、他の三箇を和して、穿つて一串と作して頌出す。

【頌】翠巖徒に示す。(這の老賊、人家の男女を敎壞す。)千古對無し。(千箇萬箇、也た一箇半箇有り、分一節。)關字相酬ゆ。(道ふことを信せずや、妨げず奇特なることを、若し是れ恁麼の人ならば方に恁麼に道ふことを解せん。)失錢遭罪。(氣を飲み聲を呑む、雪竇も也た少からず、聲に和して便ち打たん。)潦倒たる保福。(同行道伴、猶ほ這の去就を作す、兩箇三箇。)抑揚得難し。(放行把住、誰か是れ同生同死、他を謗することを莫くんば好し、且喜すらくは沒交涉。)嘮々たる翠巖。(這の野狐精、口を合取せば好し。)分明に是れ賊。(道著するも也た妨げず、捉敗了也。)白圭玷無し。(還つて辨得するや、天下の人價を知らず。)誰れか眞假を辨せん。(多くは只だ是れ假、山僧從來眼無し、碧眼の胡僧。)長慶相諳んず。(是れ精精を識る、須らく是れ他始めて得べし、未だ一半を得ざること在り。)眉毛生せり。(什麼の處にか在る、頂門上より腳跟下に至るまで一莖草も也た無し。)

【評唱】雪竇若し恁麼に慈悲に頌出して人をして見せしめずんば、爭か善知識と名くることを得ん。古人此の如し、一一皆是れ事已むことを獲ず。蓋し後學他の言句に著して、轉た情解を生ずるは古人の意旨を見ざる以所の爲なり。如今忽ち箇の出で來つて、禪床を掀倒し、大衆を喝散する有らば、他を惟しむこと得じ。然も此の如くなりと雖も、也た須らく實に這の田地に到つて始めて得べし。雪竇道く、「千古對無し」と、他只だ道ふ、「看よ翠巖が眉毛在り麼」と。什麼の奇特の處有つてか、便乃ち千古對無き、須らく知るべし古人一言半句を吐き出し來るも、是れ造次ならず。須らく是れ乾坤を定むる底の眼有つて始めて得べし。雪竇一言半句を著く、金剛王寶劍の如く、踞地獅子の如く、擊石火の如く、閃電光に似たり。若し是れ頂門に眼を具せずんば、爭か能く他の古人の落處を見ん。這箇の示衆、直に得たり千古對無きことを、德山の棒、臨濟の喝に過ぎたり。且く道へ、雪竇爲人の意、什麼の處にか在る。爾且く作麼生か會せん、他の千古對無しと道ふことを。關字相酬ゆ、失錢遭罪、這箇の意如何。直饒ひ是れ透關底の眼を具するも、這裏に到つて、也た須らく子細にして始めて得べし。且く道へ、是れ翠巖失錢遭罪か、是れ雪竇失錢遭罪か、是れ雲門失錢遭罪か、爾若し透得せば、爾に許す眼を具することを。㊟潦倒たる保福、抑揚得難し。自己を抑するか、古人を揚するか。且く道へ、保福什麼の處

㊟潦倒は是れ反切語なり、潦倒の切は老なり、「よぼ！」したる保福」と云ふ義なり。

か是れ抑、什麼の處か是れ揚。㊀嘮々たる翠巖、分明に是れ賊。且く道へ、他什麼をか偷み來つてか、雪竇卻つて道ふ是れ賊と。切に忌む他の語脈に隨つて轉却することを。這裏に到つて、須らく是れ自ら操持有つて始めて得べし。白圭玷無し、翠巖の大に白圭に似て相似て、更に些の瑕翳無きを頌す、誰か眞假を辨せん。謂つべし人の辨得する有ること罕なりと。雪竇大才有り、所以に頭より尾に至つて、一串に穿卻して、末後卻つて方に道ふ、「長慶相諳んず、眉毛生也」と。且く道へ、生や什麼の處にか在る、急に眼を著けて看よ。

第九則

垂示に云く、明鏡臺に當つて、妍醜自ら辨ず。鍥鄒手に在つて、殺活時に臨む。漢去り胡來り、胡來り漢去る。死中に活を得、活中に死を得。且く道へ、這裏に到つて又作麼生。若し透關底の眼、轉身の處無くんば、這裡に到つて灼然として奈何ともせず。且く道へ、如何なるか是れ透關底の眼、轉身の處、試みに擧す看よ。

【本則】擧す、僧、趙州に問ふ、「如何なるか是れ趙州。」（河北河南、總に說不著、爛泥裏に刺有り。河南に在らずんば正に河北に在らん。）州云く、「東門西門南門北門。」（開

㊀嘮々は喧しきなり。

【本則】東瀟禪師云く、第九、五家の大事都て根本の大徹を以て、是れ基と爲すを明す、趙州平生尤も奬む可きの作用なり。

也、相罵ることは爾に饒す銜を接げ、相唾することは爾に饒す水を潑げ、見成公案、還つて見るや、便ち打たん。）

【評唱】大凡そ參禪問道は、自己を明究す、切に忌む言句を揀擇することを。何が故ぞ、見ずや、趙州擧して道く、「至道無難、唯嫌揀擇。」又見ずや、雲門道く、「如今の禪和子、三箇五箇頭を聚めて口㊁喃々地にして便ち道ふ、這箇は是れ上才の語句、那箇は是れ身處に就いて打出する語」と。知らず古人方便門の中、初機後學の、未だ心地を明めず、未だ本性を見ざるが爲に、已むことを得ずして、箇の方便の語句を立することを。祖師西來、單傳心印、直指人心、見性成佛の如きは、那裏にか此の如く葛藤せん。須らく是れ語言を斬斷し、格外に見諦して、透脫得し去るべし。謂つ可し龍の水を得るが如く、虎の山に靠るに似たりと。久參の先德、見て未だ透らず、透つて未だ明めざる有り、之を請益と謂ふ。若し是れ見得透する請益は、却つて語句上に周旋して、凝滯有る無きことを要す。久參の請益は、賊の與に梯を過ぐ、其の實は此の事言句上に在らず。所以に雲門道く、「此の事若し言句上に在らば、㊂三乘㊃十二分教、豈是れ言句無からん

㊁玉篇に呢喃は、小聲多言なり。

㊂鄉云く、一には聲聞、二には緣覺、三には菩薩、乘は以て運載して無窮に趣向するなり。

㊃鄉云く、一には梵語修多羅、此に契經と云ふ、二には祇夜應頌、三には私伽羅授記、四には伽陀諷頌、五には尼陀羅因緣、六には優陀那自說、七には伊帝目多本事、八には闍陀伽本生、九には毘舍略方廣、十には阿浮達磨未有、十一に婆陀婆喻、十二に優婆提舍論議。

㊄請益問、昏解問、察辨問、投機問、偈僻問、心行問、探拔問、不會問、擎擔問、盤問、故問、借問、實問、假問、審

や、何ぞ達磨の西來を須ひん」と。㊁汾陽の十八問の中に、此の問之を驗主問と謂ひ、亦之を探拔問と謂ふ。這の僧箇の問頭を致す、也た妨げず奇特なり、若し是れ趙州にあらずんば、也た他に祇對し難し。這の僧問ふ、「如何なるか是れ趙州。」趙州是れ本分の作家、便ち向つて道ふ、「東門西門南門北門」と。僧云く、「某甲這箇の趙州を問はず。」州云く、「儞那箇の趙州を問ふ。」後人喚んで無事禪の人を賺すこと少からずと作す。何が故ぞ、他趙州を問ふ、州答へて云く、「東門西門南門北門」と。所以に只だ他の趙州を答ふと。儞若し恁麼に會せば、三家村裏の漢も、更に是れ佛法を會し去らん。只だ這れ便ち是れ佛法を破滅す、魚目を將て明珠に比況するが如し、似たることは則ち似たり、是なることは則ち是ならず。山僧道ふ、「河南に在らずんば、正に河北に在らん」と。且く道へ、是れ有事か、是れ無事か、也た須らく是れ子細にして始めて得べし。遠錄公云く、「末後の一句、始めて㋟牢關に到る、指南の旨、言詮に在らず、㋠十日一風、五日一雨、邦を安んじ業を樂み、腹を鼓して謳歌す、之を太平の時節と謂ひ、之を無事と謂ふ」と。是れ㋡拍盲にして便ち無事と道ふにあらず、須らく是れ關棒子を透過し、荊棘林を出得して、淨躶々赤灑々たるべし。依前として平常の人に似たらば、儞に由つて有事も也た得たり、無事も也た得たり。七縱八橫、終に無を執し有を定めず、有般底の人

問、徵問、明問、驗主問。
㋟堅牢の關鎖なり。
㋠王充が論衡に曰く、「太平の瑞應、十日一風五日一雨、風條を鳴さず、雨壤を壞さず。」
㋡拍は「手のひらにて、物をうつこと」なり、盲人は、獨行できぬゆゑ、人の肩に手のひらを、打ちかけてあるくを拍盲と云ふ、今は「たゞむかう見す」と云ふ義なり。

は道く、「本來一星事無し、但だ只だ茶に遇うては茶を喫し、飯に遇うては飯を喫す」と。此れは是れ大安語、之を未得謂得、未證謂證と謂ふ。元來曾て參得透せず、人の心と說き性と說き、玄と說き妙と說くを見ては、便ち道ふ只だ是れ狂言なり、本來無事と。謂つべし一盲衆盲を引くと。殊に知らず、祖師未だ來らざる時、那裏にか天を喚んで地と作し、山を喚んで水と作し來らん。什麼の爲にか祖師更に西來す。諸方陞堂入室、箇の什麼をか說く、盡く是れ情識の計較なり。若し是れ情識計較の情盡くれば、方に見得透せん。若し見得透せば、舊に依つて天は是れ天、地は是れ地、山は是れ山、水は是れ水。古人道く、「㋢心は是れ根、法は是れ塵、兩種猶し鏡上の痕の如し。這箇の田地に到らば、自然に淨躶々赤灑々たらん。若し極則に理論せば、也た未だ是れ安穩の處にあらざること在らん。這裏に到つて、人多く錯り會して、無事界裏に打在して、佛も也た禮せず、香も也た燒かず、似たることは則ち也た似たり、爭奈せん脫體不是なることを。纔かに問著すれば、却つて是れ極則に相似たり、纔かに拶著すれば、七花八裂、空腹高心の處に坐在す。龎月三十日に到るに及んで、手を換へ胷を槌つも、已に是れ遲れ了れり。這の僧恁麼に問ひ、趙州恁麼に答ふ、且く道へ、作麼生か摸索せん。恁麼も也た得ず、不恁麼も也た得ず、畢竟如何。這の些子是れ難處なり、所以に雪竇拈出し來つて、當面に人に示す。趙州一日坐する次で、侍者報じて云く、「大王來也。」趙州㋣矍然として云く、「大王萬福。」侍者云く、「未到和

㋢永嘉證道歌の語なり。
㋣矍然は、左右驚き顧みるなり、一說に視ること遽かなる貌。

尙。」州云く、「又來也と道ふ」と。這裏に參到し、這裏に見到せば、妨げず奇特なり。南禪師拈じて云く、「侍者只だ客を報ずることを知つて、身の帝鄉に在ることを知らず、趙州草に入つて人を求む、覺えず渾身泥水なることを。」這の些子の實處、諸人還つて知る麼。雪竇の頌を看取せよ。

【頌】句裏に機を呈して劈面に來る。（響、魚行けば水濁る、趙州を謗する莫くんば好し。）爍迦羅眼纖埃を絕す。（沙を撒し土を撒す、趙州を帶累すること莫れ、天を撈し地を摸して什麼か作ん。）東西南北門相對す。（開也、那裏にか許多の門有らん、趙州城を背却して什麼の處に向つてか去る。）限無き輪鎚擊てども開けず。（自ら是れ儞が輪鎚到らず、開也。）

【評唱】趙州機に臨んで、一に金剛王寶劍に似たり。擬議せば卽ち儞が頭を截却し、往往に更に當面に儞が眼睛を換却す。這の僧也た敢て虎鬚を捋で、箇の問頭を致す、大いに無事に事を生ずるに似たり。爭奈せん句中に機有ることを、既に機を呈し來る、趙州也た他の問頭に辜負せず。所以に亦機を呈して答ふ、是れ他特地に此の如くならず、蓋し透底の人なるが爲に、自然に轍に合し、一に安排し來るに似て相似たり。見ずや一の外道有り、手に雀兒を握り來つて、世尊に問うて云く、「且く道へ、某甲が手中の雀兒、是れ死耶、是れ活耶。」世尊遂に門闔に騎つて云く、「儞道へ、我れ出耶入耶。」（一本に云く、世尊拳頭を竪起して云く、開也合也。）外道無語、遂に禮拜す。此の話便ち這の公案に似たり。古人自ら是れ血脈不斷。所以に道ふ、「問は答處に在り、答は問處に在り。」雪竇此の如く見得透して便ち道ふ、「句裏に機を呈して劈面に來る」と。句裏に機有り、兩意を帶ぶるが如し、又人に問ふに似、又境を問ふに似て相似たり。趙州一絲毫を移易せず、便ち他に向つて道ふ、「東門西門南門北門」と。爍迦羅眼纖埃を絕す、此れは趙州の人境俱に奪つて、句裏に向つて機を呈して他の興に答ふるを頌す、此れ之れを機有り境有りと謂ふ。纔かに轉ずれば便ち他の心膽を照破す、若し此の如くならずんば、他の問頭を塞ぎ難からん。爍迦羅眼は、是れ梵語、此に堅固眼と云ひ、亦金剛眼と云ふ。照見無碍、唯だ千里に明かに秋毫を察するのみにあらず、亦乃ち邪を定め正を決し、得失を辨じ、機宜を別ち、休咎を識る。雪竇云く、「東西南北相對す、限り無き輪鎚擊てども開けず。」既に是れ限り無き輪鎚、何が故ぞ、擊てども開けざる。自ら是れ雪竇の見處此の如し、儞諸人又作麼生か、此の門の開くを得去らん。請ふ參詳して看よ。

第十則

垂示に云く、恁麼恁麼、不恁麼不恁麼。若し戰を論せば、箇箇轉處に立在す。所以に道ふ、若し向上に轉じ去らば、直に得たり釋迦彌勒、文殊普賢、千聖萬聖、「天下の宗師、普く皆氣を飲み聲を呑むことを。若し向下に轉じ去らば、醯雞蟻蠓、蠢動含靈、一一大光明を放つて、壁立萬仞ならん。儻し或は不上不下ならば、又作麼生か商量せん。條有れば條を攀ぢ、條無ければ例を攀づ。試みに擧

す看よ。

【本則】擧す、睦州、僧に問ふ、「近離甚の處ぞ。」（探竿影草。）僧便ち喝す。（作家の禪客且く詐明頭なること莫れ、也た恁麼にし去ることを解す。）州云く、「老僧汝に一喝せらる。」（陷虎の機、人を猛して作麼せん。）僧又喝す。（頭角を看取せよ、似たることは則ち似たり、是なることは則ち未だ是ならず、只だ恐らくは龍頭蛇尾ならんことを。）州云く、「三喝四喝の後作麼生。」（逆水の波、未だ曾て一人の出得頭する有らず、那裏にか入り去る。）僧無語。（果然として摸索不着。）州便ち打つて云く、（若し睦州をして令を盡して行せしめば、盡大地の草木斬つて三段と爲さん。）「這の掠虛頭の漢。」（一着を放過すれば第二に落在す。）

【評唱】大凡そ宗敎を扶竪せんには、須らく是れ本分宗師の眼目、本分宗師の作用有るべし。睦州の機鋒閃電の如くに相似たり、愛して座主を勘す、尋常一言半句を出すに、箇の荊棘叢に似て相似たり。腳手を著くること得ず、他幾かに僧の來るを見て、便ち道ふ、「㊀見成公案、儱に三十棒を放す。」又僧を見て云く、「上座。」僧首を回す、州云く、「擔板漢。」又衆に示して云く、「未だ箇の入頭の處有

【本則】東嶺禪師云く、第十、睦州の大機大用、是れ大道の根本爲ることを明す、僧の來るを見て便ち道ふ、「見成公案、儱に三十棒を放す」等の三則、此の師を見るに堪へたり、又僧を見て云く、「上座」と、僧首を回す、州云く、「擔板漢」と、又衆に示して云く、「未だ箇の入頭の處有らざれば、須らく箇の入頭の處を得べし、既に箇の入頭の處を得れば、老僧に事負することを得ざれ、」睦州人の爲に多く是くの如し。

㊀現今成就の義にて「できあひ」と譯す。

らずんば、須らく箇の入頭の處を得べし、既に箇の入頭の處を得ば、老僧に辜負することを得ざれ。」㊁睦州人の爲にすること多く此の如し。這の僧也た善く離琢す、爭奈せん龍頭蛇尾なることを。當時若し是れ睦州にあらずんば、也た他に惑亂一場せられん。只だ他近離什麼の處と問ひ、僧便ち喝するが如きんば、且く道へ、他の意作麼生。這の老漢也た忙しからず、緩緩地に他に向つて道ふ、「老僧汝に一喝せらる」と。他の話を領して一邊に在くに似、又他を驗するに似て相似たり。身を斜にして他を如何と看る、這の僧又喝す。似たることは則ち似たり、是なることは未だ是ならず、這の老漢の鼻孔を穿卻し來らる。遂に問うて云く、「三喝四喝の後作麼生。」這の僧果然として無語、州便ち打つて云く、「這の㊂掠虛頭の漢」と。人を驗する端的の處、口を下せば便ち知音、可惜許。這の僧無語、睦州の掠虛頭の漢と道はるることを㊃惹き得たり。若し是れ諸人ならば、睦州に三喝四喝の後作麼生と道はれんに、合に作麼生か祗對して、他に掠虛頭の漢と道はるることを免れ得ん。這裏若し是れ存亡を識り、休咎を別ち、腳實地を踏む漢ならば、誰か三喝四喝の後作麼生と云ふを管せん。只だ這の僧無語の爲に、這の老漢に便ち欺に據つて案に結せらる。雪竇の頌出するを聽取せよ。

㊁睦州記興寺の道明禪師なり。

㊂事苑に、「掠は奪取なり」、又昌黎集の序に、「悉く易より已下を詞うて、古文と爲す、剽掠滑竊するを工と爲すのみ、」「人の云ひたる言句を奪ひ取り、我が胸中より出でたるやうに、いつはり云ふなり。」「內はからにて、外から奪ひ取りて來た物ばかり、それを我が物がほに、云つたり、したりする」義なり。

㊃惹得は、事を仕出すを云ふ、又「すなかひ。そびき出す」意にもなる。

【頌】　兩喝と三喝と。(雷聲浩大にして雨點全く無し、古より今に至るまで人の恁麼なる有ること罕なり。)作者機變を知る。(若し是れ作家にあらずんば爭か驗し得ん。只だ恐らくは不恁麼ならんことを。)若し虎頭に騎ると謂はゞ、(囫、瞎漢、虎頭如何が騎らん、多少の人恁麼に會す、也た人有り這の見解を作す。)二り俱に瞎漢と成らん。(親言は親口より出づ、何ぞ止だ兩箇のみならん、自領出去。)誰か瞎漢。(誰をして辨せしめん、賴に末後の句有り、泊乎と人を賺殺す。)拈じ來つて天下人に與へて看せしむ。(看ることは卽ち無きにあらず、覿着せば卽ち瞎す、闍梨若し眼を着けて看ば則ち兩手空を捺る。恁麼に擧す且く道へ是れ第幾機ぞ。)

【評唱】　雪竇妨げず爲人の處有り、若し是れ作者にあらずんば、只だ是れ胡喝亂喝せん。所以に古人道く、「有る時の一喝は、一喝の用を作さず、有る時の一喝は、卻つて一喝の用を作す、有る時の一喝は、踞地獅子の如く、有る時の一喝は、金剛王寶劍の如し」と。㋐興化道く、「我れ儞諸人を見るに、東廊下にも也た喝し、西廊下にも也た喝す、且く胡喝亂喝すること莫れ。」直饒興化を喝し得て、㋑三十三天に上せて、卻つて撲下來して、氣息一點も也た無くとも、我が甦醒し起き來らんを待つて、汝に向つて未在と道はん。何が故ぞ、興化未だ曾て㋒紫羅帳裏に向つて眞珠を撒して、儞諸人

㋐興府の興化存奬禪師なり。
㋑梵語忉利、此に三十三天と云ふ、卽ち帝釋所居の天なり。
㋒方語に、情を盡して揭示すとあれば、「心底をのこさず、打ち出して、見せる」の義なり、羅は「うすきもの」ゆゑ、はつきりとは見えねども、見えすくものなり、眞珠は光るものなれば外から見えすく、故に情を盡して揭示するに、喩へたるなり。

に與へざること在り、只管に胡喝亂喝して什麼をか作ん。臨濟道く、「我れ聞く、汝等は總に我が喝を學ぶ」と。我れ且く儞に問はん、「東堂に僧有り出でて、西堂に僧有り出でて、兩箇齊しく喝と下す、那箇か是れ賓、那箇か是れ主、儞若し賓主を分ち得ずんば、已後老僧を學ぶことを得ざれ」と。所以に雪竇頌して道く、「作者機變を知る」と。這の僧睦州に收へらるゝと雖も、他卻つて機變を識る處有り。且く道へ、什麼の處か、是れ這の僧の機變を識る處。鹿門の智禪師、這の僧を點じて云く、「㋓法を識る者は懼る。」嵒頭道く、「若し戰を論ぜば、箇箇轉處に立在す。」黃龍の心和尙道く、「㋔窮すれば則ち變じ、變ずれば則ち通ず」と。這箇の些子、是れ祖師天下の人の舌頭を坐斷する處なり、儞若し機變を識らば、擧著せば便ち落處を知らん。有般の漢は云ふ、他の三喝四喝と道ふことを管して什麼をか作さん、只管に喝し將ち去らん。什麼の三十二十喝とか說かん、喝して彌勒佛下生に到らん、之を虎頭に騎ると謂ふと。若し恁麼の知見ならば、睦州を識らざることは則ち故に是、這の僧を見んと要すとも、太だ遠きこと在らん。人の虎頭に騎るが如きんば、須らく是れ手中に刀有り、衆ねて轉變有つて始めて得べし。雪竇道く、「若し恁麼ならば、二り俱に瞎漢と成らん。」雪竇天に倚る長劍、凜凜たる全威に似たり。若し雪竇の意を會得せば、自然に千處萬處一時に會して、便ち他の雪竇後面の頌は、只だ是れ注脚を下すことを見ん。又道く、「誰か瞎漢。」且く道へ、是

㋓天童の覺、大隋の公案を拈じて云く、「法を識る者は懼る、敵を歎く者は亡ぶ、水中乳を辨ずるは須らく是れ鵝王なるべし。」
㋔易下繫辭の語なり。

れ賓家瞎するか、是れ主家瞎するか、是れ賓主一時に瞎すること莫し麼。拈じ來つて天下人に與へて看せしむと。此れは是れ活處、雪竇一時に頌し了れり。什麼と爲てか卻つて道ふ、拈じ來つて天下人に與へて看せしむと。且く道へ、作麼生か看ん、開眼も也た著たり、合眼も也た著たり。還つて人の免れ得る有り麼。

國譯佛果圜悟禪師碧巖錄卷第一終

①夾山無礙禪師降魔表

②慧芳附刊

臣聞く、㋑三乘路廣うして法界涯り無く、智海晏清にして十方安泰なり。時に魔軍有り競ひ起つて、心田を侵撓す、㋺六賊既に强うして、㋥心王驚動す。朝に百恠を生じ、暮に千邪を起し、眞如を撼惑し、法體を困勞す。㋭菩提の道路、隔絶して通せず、㋬涅槃を破壞し、三寶を傷殘す。無爲の珠玉、悉く偷將せられ、大藏の法財、皆劫奪せらる。㋣塵勞日に騰し、㋧欲火天に亘り、法城を飄蕩し、㋯聖境を焚燒す。臣乃ち斯の如きの暴亂を見て、恐らくは佛法以て存し難からんことを。遂に六波羅密と商量して同じく剪滅と爲し、㋷性空を遣して密使と爲して、魔軍を聽探す。見今屯して五蘊山中に在り、八萬四千餘衆有り、既に體勢を知る、計刹那に在り、遂に㋸十八界の雄兵を點じて、並に體空を立して號と爲す。人々無礙の力有り、箇箇勇健の能を懷く、直心見性の功を爲し、一正百邪の亂を

㋑或る說に云く、「圜悟此の碧巖集を評唱する時、萬般障碍多し、故に此の降魔表を作るなり」と、復た作者を詳にせずと云ふ說もあり。
㋺慧芳是れ何人なるや、宗派の圖に之れ無し。
㋺聲聞、緣覺、菩薩。
㋺六賊は眼、耳、鼻、舌、身、意の六識なり。
㋥心王は八識なり。
㋭菩提は正道と譯す。
㋬涅槃は、不生不滅。
㋸八萬の塵勞。
㋷六欲の火なり、六識の欲火なり。

去る。堅固の甲を攝り三昧の鏘を執る。智箭禪弓、光明の慧劒、大乘門中に向つて訓練し、寂滅山内に安營し、㋐三明嶺上に旗を開き、㋑八正路邊に排布す。大覺の性を遣して、捉生の將と爲し、四方に遊歷して、妄想の踪を搜求して、無明の蹟を抄截す。復た慈悲王を使して、㋒三毒の塞を破り、忍辱の帥嗔怒の城を伐ち、精進の軍傲慢の妖を除き、㋓喜捨の士慳貪の賊を捉ふ。逡巡として魔軍大いに起つて、殺氣天を衝く。臣乃ち摩訶を部領して、一時に齊しく入る。爾の時に當つて眼色を觀ず、耳聲を聽かず、鼻香を嗅がず、舌味を了せず、身觸を受けず、意緣を攀ぢず、一志前に向つて、念念退かず、倏忽として魔軍大いに敗る、六賊全く輸く。殺戮無邊、掃除蕩盡、妄想を生擒し、無明を活捉して、領して涅槃場中に向つて、慧劒を以て斬つて三段と爲す。煩惱の林當時に摧折し、人我の山化して微塵と作り、癡愛の網智火に焚燒せられ、邪見の林慧風に吹竭せらる。茲に因つて三明再び朗かに、㋔四智重ねて圓かにして、内外瑕無く、廓然として清淨なり。心王懽喜の殿に坐し、眞如解脫の樓に登り、自性無礙の堂に遊び、㋕三身法空の座に踞す。茲より法界寧靜にして、永く囂塵を絶し、共に生死の河を渡り、齊しく菩提の岸に到つて、魔軍既に退いて合に具に奏聞すべし。

㋐臣聞くより此に至りて一段なり、此の一段は表中の序段なり。
㋑性空は第七識を指す。
㋒十八界は、六根、六識、六塵なり、逢へば十八界、悟れば直に六賊を平ぐる雄兵となるなり。
㋓法華授記品抄に云く、「一には無數劫量の法門に於て、一時に明達して即佛道を成ずるを謂ふ、二には、是の如きの劫量の法門に明達して、總て清淨なるを謂ふ、三には、妙明の業金光聚を謂ふ。」
㋔一に正見、二に正思惟、三に正語、四に正業、五に正命、六に正精進、七に正念、八に正定。
㋒三毒は、貪、嗔、癡。
㋓喜捨は施す心、是れを四無量心と云ふ。
㋔四智は、大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智。
㋕三身は、法、報、應。

國譯佛果圜悟禪師碧巖錄卷第二

第十一則

垂示に云く、佛祖の大機、全く掌握に歸し、人天の命脈、悉く指呼を受く。等閑の一句一言、群を驚し衆を動す。一機一境、鎖を打し枷を敲く。向上の機を接し、向上の事を提ぐ。且く道へ、什麼人か曾て恁麼にし來る。還つて落處を知るありや。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、黃檗、衆に示して云く、(水を打して盆に碍へらる、一口に呑盡す、天下の禪僧跳不出。)「汝等諸人、盡く是れ噇酒糟の漢。恁麼に行脚せば、(道着す、草鞋を踏破す、天を掀し地を搖す。)何の處にか今日あらん。(今日を用て什麼にか作ん、妨げず群を驚し衆を動すことを。)還つて大唐國裡に禪師無きことを知るや。」(老僧不會、一口に呑盡す、也た是れ雲居の羅漢。)時に僧あり出でて云く、「只諸方の徒を匡し衆を領するが如きんば、又作麼生。」(也た好く一拶を與ふ、機に臨んで得て恁麼ならずんばあらず。)檗云く、「禪無しとは道はず、只是れ師無し。」(直に

【本則】
東嶺禪師云く、十一に、黃檗天性禪を會し、浸浸大の機格最も依學す可きに堪ふるを明す、古より道ふ、「岩頭末後の句の根基は尙ほ可なり、最も苦は黃檗禪師の一著」と。五家臨濟、本、此の宗より出づ、是の故に他道ふ、「我れ此に於て黃檗の宗風を建立す」と、雪竇、又曰く、「斷際の全

得たり分疎不下なることを、瓦解氷消、龍頭蛇尾の漢。)

【評唱】㊀黃檗身の長七尺、額に圓珠有り、天性禪を會す。師昔天台に遊ぶ、路に一僧に逢ふ、之と談笑すること故相識の如し。熟之を視るに、目光人を射る、頗る異相有り。乃ち偕に行く、溪水の暴漲するに屬うて、乃ち杖を植て笠を捐て止る。其の僧、師を率ゐて同じく渡らんとす。師曰く、「請ふ渡れ。」彼れ卽ち衣を褰げて波を躡むこと、平地を履むが如し、回顧して云く、「渡來渡來。」師咄して云く、「這の自了の漢、吾早く揑怪なることを知らば、當に汝が脛を斫るべし。」其の僧歎じて曰く、「眞の大乘の法器なり」と言ひ訖つて見えず。初め百丈に到る、丈問うて云く、「巍巍堂堂として嶺中より來る。」丈云く、「來ること何の事の爲ぞ。」檗云く、「別事の爲ならず。」百丈深く之を器とす。次の日百丈を辭す、丈云く、「什麼の處にか去る。」檗云く、「江西に馬大師を禮拜し去らん。」丈云く、「㊁馬大師已に遷化し去れり。儞道へ、黃檗恁麼に問ふ、是れ知り來つて問ふか、是れ知り來らずして問ふか。」卻つて云く、「某甲特地に去つて禮拜せんとす、福緣淺薄にして、一見するに及ばず、未審平日何の言句か有る、願はくは擧示を聞かん。」丈遂に再び馬祖に參する因緣を擧す。祖我が來るを見て、便ち拂子を竪起す。我れ問うて云く、「此の用に卽するか、此の用を離するか。」祖

機使擺を竪ぐ」と、又先師の牛頭の融大師、橫說竪說、猶ほ向上の關鍵子を知らざること在りと曰ふを評して曰く、「此の示衆は微妙不思議の關鍵子有り、是れ鶴林が講釋」と。

㊀黃檗希運禪師は、百丈懷海の法嗣にして、臨濟義玄の師なり、斷際禪師の謁狀を受く。

㊁唐の貞元四年二月四日馬大師示寂、此時黃檗二十一歲なり。

遂に拂子を禪床角に掛けて、良久。祖卻つて我れに問ふ、「汝已後兩片皮を鼓して、如何が人の爲にせん。」我れ拂子を取つて竪起す、祖云く、「此の用に卽するか、此の用を離するか。」我れ拂子を將て禪床角に掛く、祖威を振つて一喝す。我れ當時直に得たり三日耳聾することを。黃檗覺えず㋑悚然として舌を吐く。丈云く、「子已後馬大師に承嗣すること莫し麼。」檗云く、「然らず、今日師の擧するに因つて、馬大師の大機大用を見ることを得たり、若し馬師に承嗣せば、他日已後、我が兒孫を喪せん。」丈云く、「如是如是。見師と齊しきときは、師の半德を減ず、智師に過ぎて、方に傳授するに堪へたり、子が今の見處、宛も超師の作有り。」諸人且く道へ、黃檗恁麼に問ふ、是れ知つて故に問ふ耶、是れ知らずして問ふ耶、須らく是れ親しく他家の父子㋺行履の處を見て始めて得べし。黃檗一日、又百丈に問ふ、「㋩從上の宗乘如何が指示せん。」百丈良久す。檗云く、「後人をして斷絕し去らしむ可らず。」百丈云く、「將に謂へり汝は是れ箇の人」と、遂に乃ち起つて方丈に入る。檗、㋥裴相國と方外の友爲り、裴宛陵に鎭たり、師を請じて郡に至らしむ、所解一編を以て師に示す。師接して座に置いて、略披閱せず、良久して乃ち云く、「會す麼。」裴云く、「不會。」檗云く、「若し便ち恁麼に會得せば、猶ほ些子に較らん、若し也た紙墨に形さば、何の處にか更に吾宗有らん。」裴乃ち頌を以て贊して云く、「大士心印を傳へて自從り、額に圓珠有り七尺の身、錫を掛けて十年蜀水に棲む、盃を浮べて今日

㋑悚は說文に「懼るゝなり」と。
㋺履踐し行ふ用處を云ふ。
㋩拈華以來宗門所乘の大法。
㋥黃檗の法嗣裴休字は公美。

漳濱を渡る、八千の龍象高步に隨ひ、萬里の香花勝因を結ばんとす。師に事へて弟子と爲らんことを擬欲す、知らず法を將て何人にか付せん。」師亦喜べる色無うして云く、「心は大海の邊際無きが如し、口紅蓮を吐いて病身を養ふ、自ら一雙無事の手有り、曾て等閑の人を祇揖せず。」檗住して後、機鋒峭峻なり、臨濟會下に在り、睦州首座爲り、問うて云く、「上座此に在ること多時、何ぞ去つて問話せざる。」濟云く、「某甲をして什麼の話を問はしめてか卽ち得てん。」座云く、「何ぞ去つて如何なるか是れ佛法的的の大意と問はざる。」濟便ち去つて問ふ、三度打出さる。濟、座を辭して曰く、「首座の三番去つて問はしむることを蒙つて、打出さる、恐らくは因緣這裏に在らざらんことを、暫く且つ山を下らん。」座云く、「子若し去らば、須らく和尙を辭し去つて方に可なるべし。」首座預め去つて檗に白して云く、「問話の上座、甚だ不可得なり、和尙何ぞ穿鑿して一株の樹と成し去らしめて、後人の與に陰涼と爲らざる。」檗云く、「吾れ已に知れり。」濟來り辭す、檗云く、「汝別處に向つて去ることを得ざれ、直に高安灘頭に向つて、㋭大愚に見え去れ。」濟、大愚に到つて、遂に前話を擧す、「知らず某甲過什麼の處にか在る。」愚云く、「檗與麼に老婆心切、爾が爲にすること徹困なり、更に什麼の有過無過とか說かん。」濟、忽然大悟して云く、「黃檗の佛法多子無し。」大愚搊住して云く、「儞適來又過有りやと道ひ、今卻つて佛法外子無しと道ふ。」濟、大愚の脇下に於て墜くこと三拳、愚拓開して云く、「汝が師は黃檗なり、我が事に干るに非ず」と。一日檗、衆に示して

㋭歸宗常の法嗣。

云く、「㋐牛頭の融大師、横説竪説、猶ほ未だ向上の關棙子を知らざること在り」と。是の時㋑石頭馬祖下の禪和子、浩浩地に禪を説き道を説く。他何が故ぞ卻つて與麼に道ふ、所以に衆に示して云く、「汝等諸人、盡く是れ㋒噇酒糟の漢、恁麼に行脚せば、笑を人に取らん。但だ八百一千人の處を見て便ち去る。只だ熱鬧を圖る可らず、可の中總に汝が此の如く容易なるに似たらば、何の處にか更に今日の事有らん」と。唐の時愛して人を罵るに、噇酒糟の漢と作す、人多く嘆んで黄檗人を罵ると作す、具眼の者は自ら佗の落處を見ん。大意一鉤を垂れて人の問を釣る、衆中に身命を惜しまざる底の禪和有つて、便ち恁麼に衆を出でて佗に問ふを解して道ふ、只だ諸方に徒を匡し衆を領ずるが如きんば、又作麼生。也た好し一拶するに、這の老漢果然として㋓分疎不下。便ち卻つて漏逗して云く、「禪無しとは道はず、只だ是れ師無し」と。且く道へ、意什麼の處にか在る、佗の從上の宗師、有る時は擒、有る時は縱、有る時は殺、有る時は活、有る時は放、有る時は收、敢て諸人に問ふ、作麼生か是れ禪中の師。山僧恁麼に道ふ、已に是れ頭に和して沒卻し了れり、諸人の鼻孔、什麼の處にか在る。良久して云く、「穿卻し了れり。」

【頌】凜凜たる孤風自ら誇らず。(猶ほ自ら有ることを知らず、也た是れ雲居の羅漢。)寰海に端居して龍蛇を定む。(也た緇素を別たんことを要す、也た皂白分明ならんことを要す。)大中の天子曾て輕觸す。(什麼の大中天子とか說かん。任ひ大なるも也た須らく地より起るべし、更に高きも天有ることを爭奈何せん。)三度親しく爪牙を弄ずるに遭ふ。(死蝦蟆多口にして什麼か作ん。未だ奇特と爲ず猶ほ是れ小機巧、若し是れ大機大用現前せば、盡十方世界乃至山河大地、盡く黄檗の處に在りて命を乞はん。)

㋐牛頭融大師は、四祖道信傍出の法嗣。
㋑石頭希遷、法を青原の思に嗣ぐ。
㋒噇酒糟とは、便ち是れ言語を咬む、言語は乃ち古人の糟粕なり。
㋓分疎不下は、いひほどきえず」と譯す。

【評唱】雪竇此の一頌、一に黄檗の眞贊に似て相似たり。人卻つて㋔眞贊の會を作すことを得ざれ、他底の句下に、便ち出身の處有り。分明に道ふ、「凜凜たる孤風自ら誇らず」と。黄檗恁麼に衆に示す、且つ是れ人を爭ひ我れを負み、自ら逞しうし自ら誇るにあらず、若し這箇の消息を會せば、七縱八横に一任す。有る時は孤峯頂に獨立し、有る時は鬧市裏に身を横ふ、豈に偏に一隅を守る可けんや。愈捨つれば愈歇まず、愈尋ぬれば愈見えず、愈擔荷すれば愈沒溺す。古人道く、「㋕翼無うして天下に飛び、名有つて世間に傳ふ」と。情を盡して佛法の道理、玄妙奇特を捨卻して、一時に放下せば、卻つて些子に較れり、自然に觸處現成せん。雪竇道く、「寰海に端居して龍蛇を定む」と。是れ龍是れ蛇、門に入り來れば便ち驗取す、之を龍蛇を定むるの眼、虎兕を擒ふるの機と謂ふ。雪竇又道く、「㋖龍蛇を定むる眼何ぞ正しからん、虎兕を擒ふるの機全からず。」又道く、「大中の天子曾て輕觸す、

㋔影像の賛贊。
㋕管子、桓公に復して曰く、「翼無くして飛ぶ者は聲なり。」
㋖以下二句、瓢英集昭敏首座を送る長篇の中にあり。

㋑三度親しく爪牙を弄ずるに遭ふ。」黃檗豈に是れ如今惡毒手のみならんや、從來此の如し。大中天子は㋺續成通傳の中に載す。唐の憲宗二子有り、一を穆宗と曰ひ、一を宣宗と曰ふ。宣宗は乃ち大中なり、年十三、少うして㋩敏黠なり、常に跏趺坐を愛す。穆宗在位の時、早朝罷むに因つて、大中乃ち戲れに㋥龍床に登つて群臣を揖する勢を作す、大臣見て之を㋭心風と謂へり。乃ち穆宗に奏す、穆宗見て撫歎して曰く、「我が弟は乃ち㋯吾宗の㋰英胄なり。」穆宗、長慶四年に於て㋱晏駕す、三子有り、敬宗、文宗、武宗と曰ふ。敬宗父の位を繼いで二年にして、內臣謀つて之を易ふ。文宗位を繼いで一十四年にして、武宗卽位す、常に大中を喚んで癡奴と作す。一日武宗、大中の昔日戲に父の位に登りしことを恨んで、遂に打殺して後苑の中に致く、不潔を以て灌いて復た甦らむ。遂に潛かに遁れて㋲香嚴の閑和尙の會下に在り、後剃度して沙彌と爲る。未だ具戒を受けず、後智閑と遊方して廬山に到る。因に智閑瀑布に題する詩に云く、「雲を穿ち石を透つて勞を辭せず。地遠くして方に知る出處の高きことを。」閑此の兩句を吟じて、佇思すること久し、之れ他の語脈を釣つて如何と看んと欲す。大中續いて云く、「溪澗豈能く留むれども住ることを得んや。終に大海に歸して波濤と作る。」閑方に是れ尋常の人にあらざることを知る、乃ち默して之を識る。後に㋳鹽官の會中に到つて、大中を請じて書記と作す、黃檗彼に在つて首座と作る。檗一日佛を禮する次、大中見て問うて曰く、「佛に著いても求めず、法に著いても求めず、衆に著いても求めず、禮拜して當に何の求むる所ぞ。」檗云く、「佛に著いても求めず、法に著いても求めず、衆に著いても求めず、常に禮することは是の如し。」大中云く、「禮することを用ひて何か爲ん。」檗便ち掌す、大中云く、「大龕生。」檗云く、「這裏什麼の所在ぞ、龕と說き細と說く」と云つて、檗又掌す。大中後に國位を繼ぐ、黃檗に賜ふて龕行の沙門と爲す、裴相國朝に在り、後に奏して斷際禪師と賜ふ。雪竇他の血脈の出處を知つて、便ち用ひ得て巧なり、今還つて爪牙を弄ずる底有り麼、便ち打たん。

㋺續成通傳は、道宣律師の撰述なり。
㋩聰敏黠慧。
㋥天子の御座。
㋭心風は狂心なり。
㋯吾宗族。
㋰英傑胄胤、增韻に、「裔なり嗣なり。」
㋱唐制に天子の居を衙と曰ひ、行を駕と曰ふ、韋昭曰く、「凡そ崩ずるを晏駕と爲すことは、臣子の心猶ほ宮車駕に當つて出づると謂へるがごとし。」晏は晚なり。
㋲潙山粘の法嗣。
㋳鹽官、齊安國師は馬大師に嗣ぐ。

第十一則

垂示に云く、殺人刀、活人劍、乃ち上古の風規、亦今時の樞要なり。若し殺を論せば、一毫を傷らず、若し活を論せば、喪身失命す。所以に道ふ、向上の一路、千聖不傳。學者形を勞すること、猿の影を捉ふるが如し。且く道へ、既に是れ不傳、什麼としてか卻つて許多の葛藤公案ある。具眼の者、は試みに擧す看よ。

【本則】 擧す、僧、洞山に問ふ、「如何なるか是れ佛。」(鐵蒺藜、天下の衲僧跳不出。)山云く、「麻三斤。」(灼然破草鞋、槐樹を指して柳樹を罵つて秤錘と爲す。)

【評唱】 這箇の公案、多少の人錯つて會す、直に是れ咬嚼し難し、儞が口を下す處無けん。何が故ぞ、淡うして味無し。古人多少佛に答ふる話有り。或は云く、「杖林山下の❶竹筋鞭」と。洞山に至るに及んで卻つて道ふ、「麻三斤」と。妨げず古人の舌頭を截斷することを。人多く話會を作して道ふ、「洞山是の時庫下に在つて麻を秤る、僧有り問ふ、所以に此の如く答ふ」と。有る底は道ふ、「洞山東を問へば西を答ふ」と。有る底は道ふ、「儞是れ佛、更に去つて佛を問ふ、所以に洞山遠路に之を答ふ」と。死漢更に一般有つて道ふ、「只だ這の麻三斤便ち是れ佛」と。且得沒交涉、儞若し恁麼に洞山の句下に去つて尋討せば、參じて彌勒佛の下生に到るも、也た未だ夢にだも見ざること在り。何が故ぞ、言語は只だ是れ載道の器なり、殊に古人の意を知らず、只管に句中に去つて求めば、什麼の巴鼻か有らん。見ずや古人道く、「道本言無し、言に因つて道を顯す、道を見れば卽ち言を忘ず」と。若し這裏に到らば、我れに第一機を還し來つて始めて得てん。只だ這の麻三斤、一に長安の大路の一條に似て相似たり、擧足下足不是なること有ること無し。這箇の話と雲門の餬餅の話と是れ一般なり、妨げず會し難きことを。五祖先師の頭に云く、「賤賣の擔板漢、㊐貼秤す麻三斤、千百年の㊅滯貨、渾身を著くるに處無し。」儞但だ情塵意想計較得失是非を打疊得して、一時に淨盡せば、自然に會し去らん。

【頌】 金烏急に、(左眼半斤、快鶻趕へども及ばず、火焰裏に身を橫ふ。)玉兎速かなり。(右眼八兩、姮娥官裏に窠窟を作す。)善應何ぞ曾て輕觸あらん。(鐘の扣に在るが如く、谷の響を受くるが如し。)展事投機洞山を見ば、(錯りて定盤星を認む、自ら是れ闍黎恁麼に見る。)跛鼈盲龜空谷に入る。(自領出去、同坑に異土無し、阿誰か儞が鷄子を打つて死す。)花簇々錦簇々。(兩重の公案一狀に領過す、舊に依つて一般。)南地の竹北地の木。(三重も也た有り、四重の公案、頭上に頭を安す。)因つて思ふ長慶と陸大夫。(癩兒伴を率く、山僧も也た恁麼、雪竇も也た恁麼。)道ふことを解す笑ふべし哭すべからず。(呵々、蒼天夜半に更に寃苦を添ふ。)咦。(咄、是れ什麼ぞ、便ち打つ。)

【評唱】 雪竇見得透す、所以に劈頭に便ち道ふ、「金烏急に、玉兎速かなり」と、洞山の麻三斤と答

【本則】
東嶺禪師云く、十二に雲門宗は言句彌す意有り、參詳若し歲を歷ずんば、夢にだも曾て見及す可らざるの大事を明す。

❶筋は根なり、昔一人の外道有り、竹杖を將つて世尊丈六の長を量る、時に世尊長倍して三丈二尺と作る、外道又竹を接いで之れを量る、世尊又倍すること此の如く數倍す、外道竹を續ぐに任へず、竹杖を擲下して去る、其の杖、根を托して竹林と爲る。

㊐貼秤は「はかりに、重く掛け增す」を云ふ、五燈會元十八に、宗顯禪師の上堂、中邑仰山六窓獼猴の話を擧して云く、「我れ你が與めに箇の譬喻を說かん、中邑は大いに箇の金師に似たり、仰山、一塊の金を將ち來りて、金師をして價を酌いしむ、金師亦價を盡して相酌ゆ、交易を成すに臨んで、金を賣る底、更に與に貼秤す、金師然も暗に喜ぶと雖も、心中未だ偸疑を免れず、何が故ぞ、若し細作に非ずんば定めて是れ賊贓」と。

㊅滯貨は「店ざらし、れきもの」なり。

ふると更に兩般無し。日出で月沒す、日々是の如し。人多く情解して、只管に道ふ、「金烏は是れ左眼、玉兎は是れ右眼」と。纔かに問著すれば、便ち瞠眼して云く、「這裏に在り」と。什麼の交渉か有らん。若し恁麼に會せば、達磨の一宗、地を掃つて盡きん。所以に道ふ、「鉤を四海に垂れて、只だ獰龍を釣る、格外の玄機は、知己を尋ねんが爲なり」と。雪竇は是れ㊁陰界を出づる底の人、豈這般の見解を作さんや。雪竇輕々に㊄關を敲き節を擊つの處に去つて、略些子を露して儞をして見せしむ。便ち箇の注脚を下して道ふ、「善應何ぞ曾て輕觸有らん」と。洞山輕しく這の僧に酬いず、鐘の扣に在るが如く、谷の響を受くるが如し、大小隨ひ應じて、敢て輕觸せず。雪竇一時に心肝五臟を突出して、儞諸人に呈似し了れり。雪竇靜而善應の頌有り云く、「覿面に相呈す、多端に在らず、龍蛇は辨じ易く、神子は瞞じ難し。金鎚影動き、寶劍光寒じ、直下來也、急に眼を著けて看よ」と。洞山初め雲門に參ず、門問ふ、「近離甚の處ぞ。」山云く、「㋹渣渡。」門云く、「夏甚麼の處にか在りし。」山云く、「湖南の報慈。」門云く、「幾時か彼の中を離る。」山云く、「八月二十五。」門云く、「儞に三頓の棒を放す、參堂し去れ。」師晚間入室す、親近して問うて云く、「某甲過什麼の處にか在る。」門云く、「飯袋子、江西湖南、便ち恁麼に去るや。」洞山言下に於て、豁然大悟。遂に云く、「某甲他日人煙無き處に向つて、箇の庵子を卓て、一粒の米を蓄へず、一藍の菜を種ゑず、常に往來十方の大善知識を接待して、盡く伊が與に釘を抽却し、楔を拔却し、

㊁五陰界。
㊄乃ち緊要の處を叩くなり。
㋹渣渡は地名なり。

㋺膩脂帽子を拈却し、㋻鶴臭布衫を脱却して、各灑々落々地にして、箇の無事の人と作し去らしめん。」門云く、「身は椰子の大さの如くにして、許大の口を開き得たり。」洞山便ち辭し去る。他の當時の悟處、直下に穎脱なり、豈小見に同じからんや。後來出世して機に應ず、麻三斤の語、諸方只だ佛に答ふる話會を作す。如何なるか是れ佛、杖林山下の竹筋鞭、丙丁童子來求火と、只管に佛の上に於て道理を作す。雪竇云く、「若し恁麼に展事と投機との會を作さば、正に跛鼈旨龜の空谷に入るに似たり、何の年の日月にか、出路を尋得し去らん、花簇簇錦簇簇。」此れは是れ僧、智門和尚に問ふ、「洞山麻三斤と道ふ意旨如何ん。」智門云く、「花簇々錦簇々、會す麼。」僧云く、「不會。」智門云く、「南地の竹北地の木。」僧回つて洞山に擧似す、山云く、「我れ汝が爲に說かず、我れ大衆の爲に說かん」と。遂に上堂して云く、「言に事を展ぶる無く、語機に投せず、言を承くる者は喪し、句に滯る者は迷ふ」と。雪竇人の情見を破つて、故意に引いて一串と作して頌出す。後人卻つて轉た情見を生じて道ふ、㋼麻は是れ孝服、竹は是れ孝杖。所以に道ふ、南地の竹北地の木、花簇々錦簇々、是れ棺材頭邊に畫く底の花草なりと。還つて羞を識る麼。殊に知らず南地の竹北地の木、麻三斤と、只だ是れ㋽阿鋒と阿爹と相似たることを。古人一轉語を答ふ、決して是れ意恁麼ならず、正に雪竇の金烏急に玉兎

㋺膩脂帽子は人髮の油著きたる頭巾なり。
㋻鶴臭布衫は、「はやぶさの」屁(なまぐさき)に似たる「かたびら」なり。
㋼三年の喪、麻を以て衣と爲し竹を以て杖と爲す。
㋽增賴に、南人父を呼んで鋒と曰ひ、說文に北人父を呼んで爹と曰ふ。

遠かなりと道ふに似たり、自ら一般に寛曠なり。只だ是れ金鍮辨じ難く、魚魯參差す。雪竇老婆心切にして、儞が疑情を破らんと要して、更に箇の死漢を引く。因つて思ふ ㊊長慶陸大夫、道ふことを解す笑ふべし哭すべからずと、若し他の頌を論せば、只だ頭上の三句に、一時に頌じ了れり。我れ且く儞に問はん、都盧只だ是れ箇の麻三斤、雪竇却つて許多の葛藤有り、只だ是れ慈悲忒煞し、所以に此の如し。陸亘大夫、宣州の觀察使と作つて、南泉に參ず、泉遷化す、亘喪を聞いて寺に入つて下祭㋐し、却つて呵々大笑す。院主云く、「先師と大夫と師資の義有り、何ぞ哭せざる。」大夫云く、「道ひ得ば卽ち哭せん。」院主無語、亘大いに哭して云く、「蒼天蒼天、先師世を去るとき遠し矣」と。後來長慶聞いて云く、「大夫笑ふべし哭すべからず。」雪竇此の意の大綱を借つて道ふ、「儞若し這般の情解を作さば、正に好し笑ふに、哭すること莫けん」と。是れは便ち是れ、末後一箇の字有り、妨げず贅訛なることを。更に道ふ、「咦」と、雪竇還つて洗得脫する麼。

㊊五燈嚴統第四に、唐の陸亘、字は景山、吳郡の人なり、宣宣歙觀察使に至り、御史大夫を加ふ、初めて南泉に問ふ、「古人瓶中に一鵝を養ふ、鵝漸く長大にして、瓶を出づるを得ず、如今瓶を毀つを得ず、鵝を損ずることを得ずして、和尙作麼生か出し得ん。」泉、「大夫」と召す、陸應諾す、泉曰く、「出せり。」陸此れより開悟す云云。

㋐下祭は、奠祭なり。

第十三則

垂示に云く、雲大野に凝つて、徧界藏さず。雪蘆花を覆うて、朕迹を分ち難し。冷處は氷雪よりも冷かに、細處は米末よりも細かなり。深々たる處は佛眼も窺ひ難く、密々たる處は魔外も測ることを莫し。擧一明三は卽ち且く止く、天下の人の舌頭を坐斷して、作麼生か道はん。且く道へ、是れ什麼人の分上の事ぞ。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、僧、巴陵に問ふ、「如何なるか是れ提婆宗。」（白馬蘆花に入る、什麼と道ふぞ、點。）巴陵云く、「銀椀裏に雪を盛る。」（儞が咽喉を塞斷す、七花八裂。）

【評唱】這箇の公案、人多く錯り會して道ふ、「此は是れ外道宗」と。什麼の交涉か有らん。㋑第十五祖提婆尊者は、亦是れ外道中の一數なり。因に第十四祖龍樹尊者に見えて、針を以て鉢に投ず、龍樹深く之を器として、佛心宗を傳ふ、繼いで第十五祖と爲る。楞伽經に云く、「佛語心を宗と爲し、無門を法門と爲す。」馬祖云く、「凡そ言句有るは是れ提婆宗なり、只だ此れ箇れを以て主と爲す」と。諸人盡く是れ衲僧門下の客、還つて曾て提婆宗を體究し得てん麼。若し體究得せば、西天の九十六種の外道、汝に一時に降伏せられん。若し體究不得ならば、未だ著しく袈裟を返披し去ること在るを免れず。且く道へ、是れ作麼生、若し言句是と道はば、也た沒交涉、若し言句不是と道はば、也た沒交涉。且く道へ、馬大師の意什麼の處にか在る。後來雲門道く、「馬大

【本則】東嶺禪師云く、十三に、雲門宗の大事、馬大師、凡そ言句有れば是れ提婆宗と道ふより出づ、巴陵の三轉語も最も參詳す可きの本則を明す。

㋑鄭云く、提婆大士は、南天竺の人、姓は毘、舍羅長者の子なり、天性才辨にして喜んで羅漢を修す、云云。

師の好言語、只だ是れ人の問ふ無し。」僧有り便ち問ふ、「如何なるか是れ提婆宗。」門云く、「九十六種、汝は是れ最下の一種。」昔僧有り、大隋を辭す、隋云く、「什麼の處にか去る。」「普賢を禮拜し去る。」大隋拂子を竪起して云く、「文殊普賢、盡く這裏に在り。」僧一圓相を畫して、手を以て師に托呈し、又背後に拋向す。隋云く、「侍者㊐一貼の茶を將ち來つて、這の僧に與へ去れ。」雲門別して云く、「西天は頭を斬り臂を截る、這裏は自傾出去。」又云く、「赤旛我が手裏に在り」と。西天に論議に勝つ者は、手に赤旛を執り、負墮する者は㋑袈裟を返披して、㋺偏門より出入す。西天に論議せんと欲せば、須らく王勅を奉じて、大寺の中に於て、鐘を聲し鼓を擊つて、然して後に論議することを得べし。是に於て外道僧寺の中に於て、鐘鼓を封じ禁じて、之が爲に㋭沙汰す。時に迦那提婆尊者、佛法に難有らんことを知つて、遂に神通を運して、樓に登り鐘を撞いて、外道を擯せんと欲す。外道遂に問ふ、「樓上に鐘を聲す者は誰ぞ。」提婆云く、「天。」外道云く、「天は是れ誰ぞ。」婆云く、「我れ。」外道云く、「我れは是れ誰ぞ。」婆云く、「我れは是れ儞。」外道云く、「儞は是れ誰ぞ。」婆云く、「儞は是れ狗。」外道云く、「狗は是れ誰ぞ。」婆云く、「狗は是れ儞。」是の如くすること七返、外道自ら負墮するを知つて、義に伏して遂に自ら門を開く。提婆是に於て樓上より赤旛を持して下り來る。外道云く、「汝何ぞ後れざる。」婆云く、「汝何ぞ前まざる。」外道云く、「汝は是れ賤人か。」婆云く、「汝は是れ良人か。」是の如く展轉酬問す。提婆折くに無礙の辯を以てす、是に由つて歸伏す。時に提婆尊者、手に赤旛を持す、義墮する者は旛下に立つ、外道皆首斬つて過を謝せんとす。時に提婆之を止めて、但だ化して髮を削つて道に入らしむ、是に於て提婆宗大に興る。雪竇後に此の事を用て之を頌す。巴陵をば衆中之を㋩多口と謂ふ、常に坐具を縫うて行脚す、深く他の雲門脚跟下の大事を得たり、所以に奇特なり。後出世して法を雲門に嗣ぐ。先に岳州の巴陵に住す、更に法嗣の書を作さず、只だ三轉語を將て雲門に上る。如何なるか是れ吹毛の劍。珊瑚枝如何なるか是れ道。明眼の人井に落つ。如何なるか是れ吹毛の劍。珊瑚枝枝月を撐著す。如何なるか是れ提婆宗。銀椀裏に雪を盛る。雲門云く、「他日老僧が忌辰に、只だ此の三轉語を擧せば、恩を報ずること足りなん矣。」自後果して忌辰の齋を作さず、雲門の囑に依つて、只だ此の三轉語を擧す。然も諸方此の話に答ふるに、多く事上に就いて答ふ。唯だ巴陵のみ有つて恁麼に道ふ、極めて是れ孤峻なり、妨げず會し難きことを。亦些子の鋒鋩を露さず、八面に敵を受けて、著々出身の路有り、陷虎の機有つて、人の情見を脫す。若し一色邊の事を論せば、這裏に到つて須らく是れ自家に透脫し了るべし、却つて須らく人に遇うて始めて得べし。所以に道ふ、道吾笏を舞せば同人會し、石霜弓を彎けば作者諳んず。此の理若し師の印授無くんば、何

㊐唐土にては、平生茶を紙に包み、懷中して時に出して、呑むことあり、故に一貼と云ふ。
㋑要覽に云く、袈裟を背著す、即ち是れ表を以て裏と爲し、前を易へて後に歸するなり。
㋺偏門は正門に非ざるなり。
㋭按するに、沙汰は、石沙をゆりて、其の中より金を撰り分けることなり、故に官より、僧尼の善惡を吟味し、惡しき者を還俗さするを沙汰すと云ふ。會昌には、善惡に拘はらず、僧籍を一定して、其の定數を殘し、其の餘は悉く還俗させたるなり、今は此の類ならん。

㋩鑒公の辯口、利舌鏡舌揷背なり。

の法を將てか玄談を語らんと擬す。雪竇後に隨つて拈提して人の爲にす、所以に頌出す。

【頌】老新開、(千兵は得易く一將は求め難し、多口の阿師。)端的別なり。(是れ什麼の端的ぞ、頂門上の一着、夢にも見るや也た未しや。)道ふことを解す銀椀に雪を盛ると。(鰕跳れども斗を出でず、兩重の公案、多少の人喪身失命す。)九十六箇應に自知すべし。(身を兼て內に在り闍黎還つて知るや、一坑に埋却せん。)知らずんば却つて天邊の月に問へ。(遠うして遠し、自領出去、空に望んで啓告す。)提婆宗提婆宗。(什麼と道ふぞ、山僧這裏に在り、滿口に霜を含む。)赤旛の下清風を起す。(百雜碎、打つて云く、已に着け了れり。儞且く去つて頭を斬り臂を截り來れ、儞が與に一句を道はん。)

【評唱】老新開、㊀新開は乃ち院の名なり、端的別なり。雪竇讚歎するに分有り。且く道へ、什麼の處か是れ別處、一切の語言、皆是れ佛法。山僧此の如きの說話、什麼の道理をか成し去らん。雪竇微しく些子の意を露して道ふ、「只だ是れ端的別なり」と。後面に打開して云く、「道ふことを解す銀椀裏に雪を盛る」と。更に儞が與に箇の注脚を下す、㊁九十六箇應に自知すべし、負墮して始めて得ん、儞若し知らずんば、天邊の月に問取せよ。古人曾て此の話に答へて云く、「天邊の月に問取せよ」と。雪竇頌し了つて、末後に須らく活路有り、㊂獅子返擲の句有るべし、更に提起して儞が與に道ふ、「提婆宗提婆宗、赤旛の下清風を起す。」巴陵道

㊀新開は乃ち巴陵郡の新開院、鑒公所住の寺なり。
㊁九十六種の外道。
㊂獅子は生れて三歲の時、母獅崖より蹈落す、子則ち立ち回つて、母に向つて牙齒を咬む、是れを返擲と云ふ。

く、「銀椀裏に雪を盛る」と。什麼と爲てか却つて道ふ、「赤旛の下清風を起す」と、還つて雪竇人を殺すに刀を用ひざることを知る麼。

第十四則

【本則】擧す、僧、雲門に問ふ、「如何なるか是れ一代時敎。」(直に如今に至りて了せず、座主會せず、葛藤窟裏。)雲門云く、「對一說。」(無孔の鐵鎚、七花八裂、老鼠生薑を咬む。)

【評唱】禪家の流、㊀佛性の義を知らんと欲せば、當に時節因緣を觀すべし。之を敎外別傳、單傳心印、直指人心、見性成佛と謂ふ。釋迦老子、㊁四十九年の住世、㊃三百六十會、㊄頓漸權實を開談す、之を一代時敎と謂ふ。這の僧拈じ來つて問うて云く、「如何なるか是れ一代時敎。」雲門何ぞ他の與に紛々に解說せずして、却つて他に向つて箇の對一說と道ふ。雲門尋常一句の中に、須らく三句を具すべし、之を函蓋乾坤の句、隨波逐浪の句、截斷衆流の句と謂ふ。放去收來、自然に奇特なり。釘を斬り鐵を截るが如く、人をして他底を義解卜度し得ざらしむ。一大藏經、只だ三箇の字

【本則】東禪禪師云く、十四に、佛一代の時敎、皆我が向上宗乘より出づることを明す。
㊀涅槃經に云く、乳味中に醍醐有り、衆生の佛性も亦復た是くの如し、佛性を見んと欲せば、當に時節形色を觀察すべし、是の故に我れ說く、「一切衆生悉く佛性有り」と、實に虛妄ならず。
㊁世尊住世七十九年、今、說化の時に約す、故に四十九年と云ふ。
㊂華嚴に始り、涅槃に終る。
㊃頓とは、法相を說かず、直に

を消す、四方八面、儞が穿鑿の處無し。人多く錯り會して却つて道ふ、「一時機宜の事に對するが故に說く」と。又道ふ、「森羅及び萬象、皆是れ一法の所印なり、之を對一說と謂ふ」と。更に有るは道ふ、「只だ是れ那箇の一法を說くと、什麼の交涉か有らん。唯だ會せざるのみに非ず、更に地獄に入ること箭の如し」。殊に知らず、古人の意此の如くならざることを。所以に道ふ、「粉骨碎身未だ酬ゆるに足らず、一句了然として百億を超ゆ」と、妨げず奇特なることを。如何なるか是れ一代時敎、只だ箇の對一說と道ふことを消す。若し當頭に薦得せば、便ち歸家穩坐す可し、若し薦不得ならば、且く伏して處分を聽け。

眞性を說く、華嚴等の說是れなり、漸とは、始め鹿野苑より、終り鶴林に至るまで、淺より深に至る、之れなり、權は、方便、實は實大乘なり。

【頌】對一說。(活鱍々、言猶ほ耳に在り、妨げず孤峻なり。)太だ孤絕。(傍觀分有り、何ぞ止だ壁立千仞のみならん、豈に恁麼の事有らんや。)無孔の鐵鎚重ねて楔を下す。(錯りて名言を會す、雲門老漢也た是れ泥裏に土塊を洗ふ、雪竇也た是れ粧飾す。)閻浮樹下笑呵々。(四州八縣曾て箇の漢を見す、同道の者方に知る、能く幾人有りてか知らん。)昨夜驪龍角を拗して折す。(止だ驪龍の拗折するのみに非す、誰れ有つてか見來る、還つて證明する有りや、啞。)別々。(讚歎するに分有り、須らく是れ雪竇にして始めて得べし、什麼の別處か有らん。)韶陽老人一槪を得たり。(什麼の處にか在る、更に一槪有り、阿誰にか分付せん。德山臨濟も也た須らく退倒三千すべし、那一槪、又作麼生。便ち打つ。)

【評唱】對一說太だ孤絕、雪竇之を讚し及さず。此の語獨脫孤危にして、光前絕後なり。萬丈の懸崖の如くに相似たり、亦百萬の軍陣の如し。儞が入處無し、只だ是れ忒煞だ孤危なり。㊟古人道く、「親切を得んと欲せば、問を將ち來つて問ふこと莫れ。」問は答處に在り、答は問端に在り、直に是れ孤峻なり。且く道へ、什麼の處か是れ孤峻の處ぞ、天下の人奈何ともすること得ず。這の僧也た是れ箇の作家、所以に此の如く問ふ、雲門又恁麼に答ふ。大いに無孔の鐵鎚重ねて楔を下すに似て相似たり。雪竇文言を使ふに、用ひ得て甚だ巧なり、閻浮樹下笑呵々とは、起世經の中に說く。須彌南畔の吠琉璃樹、㊝閻浮洲に映じて、中皆青色なり。此の洲は乃ち大樹を名と爲て、閻浮提と名く。其の樹の縱廣七由旬、下に閻浮壇金聚有り、高さ二十由旬、金の樹下より出生するを以ての故に、閻浮樹と號す。所以に雪竇自ら說く、他閻浮樹下に在つて呵呵と笑ふ。且く道へ、他箇の什麼をか笑ふ、昨夜驪龍角を拗し折することを笑ふ、只だ之を瞻し之を仰して、雲門を讚嘆するに分有ることを得たり。雪竇一時に頌し了つて、末後に却つて道ふ、「別々、韶陽老人一槪を得たり。」何ぞ全得と道はざる、如何ぞ只だ一槪を得たる。且く道へ、那一槪什麼の處にか在る、直に得たり第二人を穿過するこ

㊟南院首山の語なり。
㊝梵語閻浮、此に勝金と言ふ。

とを。

第十五則

垂示に云く、殺人刀、活人劍。乃ち上古の風規、是れ今時の樞要なり。且く道へ、如今那箇か是れ殺人刀、活人劍。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、僧、雲門に問ふ、「是れ目前の機にあらず、亦目前の機に非ざる時如何。」(跩跳して什麼か作ん、倒退三千里。)門云く。「倒一說。」(平出、欵は囚人の口より出づ、也た放過することを得す、荒草裏に身を横ふ。)

【評唱】這の僧妨げず是れ箇の作家、恁麼に問ふことを解す。頭邊は之を請益と謂ふ、此れは是れ呈解問、亦之を藏鋒問と謂ふ。若し是れ雲門にあらずんば、也た他を奈何ともせず。雲門這般の手脚有り、他既に問を將ち來る、已むことを得すして之に應す。何が故ぞ、作家の宗師、明鏡臺に臨んで、胡來れば胡現じ、漢來れば漢現するが如し。古人道く、「❹親切を得んと欲せば、問を將ち來つて問ふこと莫れ」と。何が故ぞ、問は答處に在り、答は問處に在り、從上の諸聖、何ぞ曾て一法の人に與ふる有らん、那裏にか禪道の儞に與へ來る有らん。儞若し地獄の業を造らずんば、自然に地獄

【本則】東嶽禪師云く、十五は面前の大事是れ言句の奥義なることを明す、是の故に岩頭曰く、「只だ面前些子を露すのみ、」一个の些子、許多の衲子を蹉跎し了れり。

❹會元第十一に、首山念上堂の語なり。

の果を招かす、儞若し天堂の因を造らずんば、自然に天堂の果を受けす。一切の業緣は、皆是れ自作自受。古人分明に儞に向つて道ふ、若し此の事を論せば、言句上に在らす、若し言句上に在らば、三乘十二分敎、豈是れ言句無からんや、更に何を用てか祖師西來す。前頭には對一說と道ひ、❺這裏には却つて倒一說と道ふ、只だ一字を爭ふ、什麼と爲てか卻つて千差萬別有る。且く道へ、蓦訛什麼の處にか在る。所以に道ふ、法は法に隨つて行じ、法輪は處に隨つて建立す。是れ目前の機にあらす、亦目前の事に非ざる時如何。只だ當頭の一點を消す。若し是れ具眼の漢ならば、一點も也た他を謾することを得す。問處既に蓦訛、答處須らく恁麼なることを得べし。其の實は雲門賊馬に騎つて賊を趕ふ。有る者は錯つて會して道ふ、「本是れ主家の話、卻つて是れ賓家に道ふ、所以に雲門倒一說と云ふ」と。什麼の死急か有らん、這の僧問ひ得て好し、是れ目前の機にあらす、亦目前の事に非ざる時如何。雲門何ぞ他に別の語言を答へすして、只だ他に向つて倒一說と道ふ。雲門一時に他底を打破す、這裏に到つて倒一說と道ふも、也た是れ好肉上に瘡を剜る。何か故ぞ　❺言迹の興り、白雲萬里、異途の由つて生ずる所なり。設使一時に言無く句無きも、露柱燈籠、何ぞ曾て言句有らん。還つて會す麼、若し會せずんば、這裏に到つて也た須らく是れ轉動して、

❺肇論の般若無知論に曰く、「夫れ言迹の興り、異途の由つて生ずる所なり、而も言は言ふこと能はざる所有り、迹は迹とすること能はざる所有り、是を以て強く言を言ふ者は、言ふこと能はざる所を言ふ、迹を善くする者は、尋で迹とすると能はざる所を迹とす、至理虛玄なり、心を擬すれば已に差ふ、況んや乃ち言有るをや。」

始めて落處を知るべし。

【頌】倒一說。(放不下、七花八裂、須彌南畔卷盡す五千四十八。)分一節。(儞が邊に在り我が邊に在り、半は河南半は河北、手を把つて共に行く。)同死同生君が爲めに訣す。(泥裏に土塊を洗ふ、甚の來由をか着たる、儞に放すことを得ず。)八萬四千鳳毛に非ず。(羽毛相似たり、太煞だ人の威光を滅す、漆桶麻の如く粟の如し。)三十三人虎穴に入る。(唯だ我れ能く知る、一將は求め難し、野狐精の一隊。)別別。(什麼の別處か有らん、少賣弄跳するに一任す。)擾擾忽忽たり水裏の月。(青天白日、頭に迷うて影を認む、着忙して什麼か作ん。)

【評唱】雪竇亦妨げず作家、一句下に於て、便ち分一節と道ふ。分明に一著を放過して、他と手を把つて共に行く。他從來放行の手段有り、敢て儞が與に泥に入り水に入つて、同死同生す。所以に雪竇恁麼に頌す、其の實は他無し、只だ儞が與に粘を解き縛を去り、釘を抽き楔を拔かんことを要す。如今卻つて言句に因つて、轉た情解を生ず。只だ巖頭の雪峰我れと同條に生ずと雖も、我れと同條に死せずと道ふが如きんば、若し全機透脫して、大自在を得る底の人に非ずんば、焉んぞ能く儞と同死同生せん。何が故ぞ、他許多の得失是非、㋩滲漏處無きが爲なり。故に洞山云く、「若し向上の人の眞僞を辨認せんと要せば、三種の滲漏有り。情滲漏、見滲漏、語滲漏。見滲漏とは、機位を離れざれば、毒海に墮在す。情滲漏とは、智常に向背して、見處偏枯なり。語滲漏とは、體妙宗を失し、機終始を昧す。此の三滲漏、宜しく己之を知るべし。」又三玄有り、㋥體中玄、句中玄、玄中玄。古人這の境界に到つて、全機大用す、生に遇うては儞と同生し、死に遇うては儞と同死す、虎口裏に向つて身を橫へ、手脚を放得して、千里萬里、儞が銜み去るに隨ふ。何が故ぞ、他の這の一著子を得るに還して始めて得ん。八萬四千鳳毛に非ずとは、靈山八萬四千の聖衆、鳳毛に非ずとなり。南史に云く、「宋の時㋭謝超宗は、陳郡陽夏の人、謝鳳が子なり、博學にして文才傑俊なり、朝中に比無し、當世之が爲に獨步す、善く文を爲つて王府の常侍と爲る。㋬王母殷淑儀薨ず、超宗㋣誄を作つて之を奏す、武帝其の文を見て、大いに嘆賞を加へて曰く、超宗殊に㋠鳳毛有りと。」㋡古詩に云く、「朝罷んで香煙滿袖に携ふ。詩成つて珠玉毫を揮ふに在り。世に絲綸を掌るの美を知らんと欲せば、池上如今鳳毛有り」と。昔日靈山會上、四衆雲の如くに集る、世尊花を拈ず、唯だ迦葉獨り破顏微笑す、餘は是れ何の宗旨と云ふことを知らず。雪竇所以に道ふ、「八萬四千鳳毛に非ず」と。三十三人虎穴に入るとは、阿難、迦葉に問うて云く、「世尊金襴の袈裟を傳ふる外、別に何の法をか傳ふ。」迦葉、「阿難」と召す、阿難應喏す、迦

㋩佛見法見未だ空ぜず、法塵煩惱、之れを滲漏と云ふ。

㋥宏智の小參に、「玄中玄、毘盧を超え釋迦を越ゆ、體中玄、一切處自然に普遍せり、句中玄、哆哆和和、廣長舌を出す、豈に是れ納僧具足受用底の時節にあらずや。」

㋭謝は姓、超宗は名なり。

㋬殷は姓、淑儀は女官の名、孝敬王の子、鬻の母なり。

㋣文苑彙傳に云く、「誄は死を哀んで其の行を述ぶるの辭なり。」

㋠文苑彙傳に云く、「子能く父の美を繼ぐ者を鳳毛と稱す。」

㋡杜子美、賈至舍人早に大明宮に朝するを和し奉る詩なり、注に曰く、「香煙滿袖とは卽ち至が詩に、衣冠の身は御爐の香を惹くと云ふ者なり、近侍

葉云く、「門前の刹竿を倒卻し著せよ。」阿難遂に悟る。已後祖祖相傳へて、西天此土の三十三人、虎穴に入る底の手脚有り。㊀古人道く、「虎穴に入らずんば、爭か虎子を得ん」と。雲門は是れ這般の人にして、善能く同死同生す、宗師人の爲にすること須らく此の如くなるに至つて、曲彔木牀上に據つて坐すべし。捨得して儞をして打破せしむ、儞が虎鬚を捋づることを容す、也た須らく是れ這般の田地に到つて始めて得べし。㊁七事を具して身に隨つて、以て同生同死す可し。㊂高ぶる者は之を抑へ、下る者は之を擧げ、足らざる者には之に與へ、孤峰に在る者は、救うて荒草に入らしめ、荒草に落つる者は、救うて孤峰に處らしむ。儞若し鑊湯爐炭に入らば、我も也た鑊湯爐炭に入らん、其の實は他無し、只だ儞が與に粘を解き縛を去り、釘を抽き楔を拔き、㊃角駄を卸卻せんことを要す。㊄平田和尚、一頌有り、最も好し、「靈光不昧、萬古の㊅徽猷、此の門に入り來つて、知解を存することを莫れ」と。別別、擾擾忽忽水裏の月、妨げず出身の路有り、亦、活人の機有り、雪竇拈じ了つて、人をして自ら去つて生機を明悟せしむ。他の語句に隨ふこと莫れ、儞若し他に隨はば、正に是れ擾擾忽忽水裏の月ならん。如今作麼生か平穩を得去らん、一著を放過す。

に居るを謂ふ、毒を揮ふに在りの句は、才敏にして詩工なるを云ふ、轉結二句は、超宗が事を擧げて、制誥を掌つて父子美を繼ぐに比するなり。」

㊀後漢の班超の語、事苑第二に詳なり。

㊁猶ほ辨慶が七つ道具と云ふが如く、武の七事を假り來りて、爲人の手段不足無きを云ふ。諸乘法數に、三衣、一鉢、香合、拂子、尼師壇、紙被、浴具を七事とせり、其の他種々の說あれども、今は前說を取る。

㊂老子に云く、「天の道は、夫れ猶ほ弓を張るがごときか、高ぶる者は之れを抑へ、下る者は之れを擧げ、餘り有る者は之れを損し、足らざる者は之れを補ふ、云々。」

㊃籠は籠と音通ず、龐居士の偈に云く、「弩上籠頭を著け、口中鐵片を著く」と、字典に、「籠頭は馬の被具なり、和名、おもがい。」

㊄事苑に云く、「角駄は重を負ふなり、驢馬物を負ふが謂ふ、」按ずるに、角は荷物を包みたるなり、猶ほ一行李と云ふがごとし。

㊅會元第四に、「天台の平田普岸禪師は洪州の人なり、百丈門下に於て嘗を得たり云々。」今擧する所、上堂の語なり。

㊆徽は美なり、猷は道なり。

第十六則

垂示に云く、道に橫徑無し、立者孤危なり。法は見聞に非ず、言思迥絕す。若し能く荊棘林を透過し、佛祖の縛を解開して、箇の穩密の田地を得ば、諸天花を捧ぐるに路無く、外道潛かに窺ふに門無けん。終日行じて未だ嘗て行せず、終日說いて未だ嘗て說かず。便ち以て自由自在にして、啐啄の機を展べ、殺活の劍を用ふべし。直饒恁麼なるも、更に須らく建化門中、一手は擡げ一手は搦ふることあるを知つて、猶ほ些子に較るべし。若し是本分の事上ならば、且得沒交涉。生麼生か是本分の事、試みに擧す看よ。

【本則】擧す、僧、鏡淸に問ふ、「學人啐す、請ふ師啄せよ。」(風無きに浪を起して什麼か作ん、儞許多の見解を用て什麼か作ん。)淸云く、「還つて活を得るや也た無や。」(箚、帽を買ふに頭を相す、錯を將て錯に就く、總に恁麼なる可らず。)僧云く、「若し活せずんば、人に怪笑せられん。」(相帶累す、天を撐へ地を撐ふ、擔板漢。)淸云く、「也た是れ草裏の漢。」(果然、自領出去、放過せば卽ち不可。)

【本則】東嶺禪師云く、十六は、啐啄の機、死活の異有り、學者須らく知るべきを明す。

【評唱】 ㊀鏡清、雪峰に承嗣す、㊁本仁、㊂玄沙、㊃疎山、㊄太原孚の輩と同時なり。初め雪峰に見えて旨を得たり、後常に啐啄の機を以て、後學に開示す、善能く應機說法す。衆に示して云く、「大凡そ行脚の人は、須らく啐啄同時の眼を具し、啐啄同時の用有つて、方に禪僧と稱すべし。母啄せんと欲するに而も子啐せざることを得ず、子啐せんと欲するに而も母啄せざることを得ざるが如し。」僧有り便ち出でて問ふ、「母啄し子啐す、和尙分上に於て、箇の什麼邊の事をか成し得たる。」淸云く、「好箇の消息。」僧云く、「子啐し母啄す、學人分上に於て、箇の什麼邊の事をか成し得たる。」淸云く、「箇の面目を露す。」所以に鏡淸門下、啐啄の機有り、這の僧も亦是れ他の門下の客、他の家裏の事を會す、所以に此の如く問ふ。學人啐す、請ふ師啄せよ。此の問、洞下に之れを借事明機と謂ふ。那裏か此の如くならん、子啐し母啄す、自然に恰好同時なり。鏡淸也た好し、謂つ可し拳踢相應じ、心眼相照すと。便ち答へて道ふ、還つて活を得るや也た無やと。其の僧也た好し、亦機變を知つて、一句下に賓有り主有り、照有り用有り、殺有り活有り。僧云く、「若し活せずんば、人に怪笑せられん。」淸云く、「也た是れ草裏の漢」と。一等に是れ泥に入り水に入る、鏡淸妨げず惡腳手なり、這の僧既に會して恁麼に問ふ、什麼と爲てか卻つて道ふ、也た是れ草裏の漢と。所以に作家の眼目、須らく是れ恁麼なるべし。擊石火の如く、閃電光に似たり、㊅構得構不得、未だ喪身失命を免れず。若し恁麼ならば、便ち鏡淸の草裏の漢と道ふことを見ん。所以に南院、衆に示して云く、「諸方只だ啐啄同時の眼を具して、啐啄同時の用を具せず。」僧有り出でて問ふ、「如何なるか是れ啐啄同時の用。」南院云く、「作家は啐啄せず、啐啄すれば同時に失す。」僧云く、「猶ほ是れ學人が疑處。」南院云く、「作麼生か是れ儞が疑處。」僧云く、「失。」南院便ち打す、其の僧肯はず、院便ち趕ひ出す。僧後に雲門の會裏に到つて前話を擧す。一僧有り、云く、「南院の棒折るる耶。」其の僧豁然として省有り。且く道へ、意什麼の處にか在る、其の僧卻回して南院に見えんとす、院適に已に遷化す、卻つて㊆風穴に見えて、纔かに禮拜す。穴云く、「是れ當時先師に啐啄同時を問ふ底の僧なること莫し麼。」僧云く、「是。」穴云く、「儞當時作麼生か會す。」僧云く、「某甲當初、時に燈影裏に行くが如くに相似たり。」穴云く、「儞會せり。」且く道へ、是れ箇の什麼の道理ぞ、這の僧都來只だ道ふ、「某甲當初、時に燈影裏に行くが如くに相似たり」と、甚麼に因つてか風穴便ち他に向つて道ふ、「儞會せり」と。後來翠巖拈じて云く、「南院然も箏を帷幄に運すと雖も、爭奈せん士曠かに人稀にして、知音の者少きことを。」風穴拈じて云く、「南院當時他の口を開かんを待つて、劈脊に便ち打つて、他作麼生と看ん」と。若し此の公案を見ば、便ち這の僧と鏡淸と相見の處を見ん、諸

㊀鏡淸道怤禪師。
㊁高安白水の本仁禪師、法を洞山の价和尙に嗣ぐ。
㊂玄沙師備、法を雪峰に嗣ぐ。
㊃蹤山匡仁、法を洞山の价に嗣ぐ。
㊄太原孚は雪峰の法嗣なり、初め楊州の光孝寺に在り、涅槃經を講ずる等の緣、詳に第九十九則に見ゆ。
㊅構は、字典に成なり、譯語は「こしらへる、でさあがる、らちあける、しなふせる」等、處に因り一定せざれども、成の意を離れず、構得は、目指す相手を手に入れるの義なり。
㊆風穴は南院の嫡子なり。

人作麼生か、他の草裏の漢と道はるゝことを免れ得ん。所以に雪竇他の草裏の漢と道ふことを愛して、便ち頌出す。

【頌】古佛家風有り。(言猶ほ耳に在り、千古の榜樣、釋迦老子を誘ふること莫くんば好し。)對揚貶剝に遭ふ。(鼻孔什麼としてか却つて山僧が手裏に在る、八棒十三に對す、儞作麼生か一着を放過す、便ち打たん。)子母相知らず。(既に相知らず、什麼と爲てか却つて啐啄有る、天然。)是れ誰か同じく啐啄す。(百雜碎、老婆心切、且く錯りて認むること莫れ。)啄、覺。(什麼と道ふぞ、第二頭に落在す。)猶ほ殼に在り。(何ぞ出頭し來らざる。)重ねて撲に遭ふ。(錯、便ち打つ、兩重の公案、三重四重し了れり。)天下の禪僧徒に名邀す。(放過し了れり、擧起することを須ひず、還つて名邀し得る底有りや、若し名邀し得るも也た是れ草裏の漢。千古萬古黑漫々、溝に塡ち堅に塞る、人の會する無し。)

【評唱】古佛家風有り、雪竇一句に頌し了れり。凡そ是れ出頭し來るも、直に是れ近傍し得ず、若し近傍し著せば、則ち㋟萬里崖州。纔かに出頭し來るも、便ち是れ落草。直饒七縱八橫なるも、一揑を消ひず。雪竇道く、「古佛家風有り。」是れ如今恁麼なるのみにあらず、釋迦老子、初め生下し來つて、一手は天を指し、一手は地を指して、四方を目顧して云く、「天上天下唯我獨尊」と。雲門道く、「我れ當時若し見しかば、一棒に打殺して、狗子に與へて喫却せしめん、貴ぶらくは天下の太平を要せん」と。此の如く方に酬得して恰好なり、所以に啐啄の機、皆是れ古佛の家風。若し此の道に達せば、便ち㋠一拳に黃鶴樓を拳倒し、一踢に鸚鵡洲を踢翻す。㋡大火聚の如く、之に近けば則ち面門を燎卻す、太阿の劍の如く、㋢之を擬すれば則ち喪身失命す。此れは箇れ唯だ是れ透脫して、大解脫を得る者、方に能く此の如し。苟し或は源に迷ひ句に滯らば、決定して這般の說話を構ふこと得ず。對揚貶剝に遭ふ、則ち是れ一賓一主、一問一答、問答の處に於て、便ち貶剝有り、之を對揚貶剝に遭ふと謂ふ。雪竇深く此の事を知る、所以に只だ兩句下に向つて頌し了る。末後只だ是れ落草して、儞が爲に注破す。子母相知らず、是れ誰か同じく啐啄す、母啄すと雖も、子の啐を致す能はず、子啐すと雖も、母の啄を致す能はず、各相知らず。啐啄の時に當つて、是れ誰か同じく啐啄する。若し恁麼に會するも、也た雪竇末後の句を出で得ざること在らん。何が故ぞ、見ずや、香嚴道く、「子啐し母啄す、子覺して殼無し、子母俱に忘ず。緣に應じて錯らず、同道唱和、妙玄獨腳」と。雪竇妨げず落草、葛藤を打して道く、「啄」と。此の一字、鏡清の答へて還つて活を得るや也た無やと道ふことを頌す。覺は這の僧若し活せずんば、人に怪笑せられんと道ふことを頌す。什麼と爲てか雪竇卻つて便ち道ふ、「猶ほ殼に在り」と。雪竇石火光中に

㋟萬里崖州は、方語に、遠くして遠し。

㋠是の句は、白雲の端、臨濟三頓の棒を喫する機緣を頌する第一二の句なり、其の三四に云く、「意氣有る時意氣を添へ風流ならざる處也た風流。」

㋡大論に云く、「般若波羅密は、譬へば大火聚の如く云々。」

㋢第一百則頌評に、「劍を以て玉に擬すれば、頭鼎中に墮つ。」擬は「あてがふ」と讀す。

同つて緇素を別ち、閃電機裏に ㋐ 端倪を辨ず。鏡清道く、「也た是れ草裏の漢」と。雪竇道く、「重ねて撲に遭ふ」と。者の難處の些子是なり。鏡清道く、「也た是れ草裏の漢」と。喚んで鏡清人の眼睛を換ふと作し得てん麼。這の句是れ猶ほ殼に在ること莫し麼。且得沒交渉、那裏にか此の如くならん。若し會得せば、天下を繞つて行脚すとも、恩を報ゆるに分有らん。山僧が恁麼の說話、也た是れ草裏の漢。天下の衲僧徒に名邈す、誰か是れ名邈せざる者。這裏に到つて、雪竇自ら名邈し出さず、卻つて更に他の天下の衲僧を累す。且く道へ、鏡清作麼生か是れ這の僧の爲にする處、天下の衲僧跳不出。

㋐莊子に曰く、「始終を反覆して、端倪を知らず。」類書纂要に、「端倪は猶ほ端緒のごとし。」其のほしくれを見て取りて、全體を知ることなり。

第十七則

垂示に云く、釘を斬り鐵を截つて、始めて本分の宗師たる可し。箭を避け刀に隈れば、焉んぞ通方の作者たらん。針箭不入の處は則ち且く置く、白浪滔天の時如何。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、僧、香林に問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」（大いに人の疑着する有り、猶ほ這箇の消息の在る有り。）林云く、「坐久成勞。」（魚行けば水濁り、鳥飛べば毛を落す、狗口を合取せよ、好し作家の眼目、鋸解稱鎚。）

【評唱】㋑ 香林道く、「坐久成勞」と、還つて會す麼。若し會得せば、百草頭上に干戈を罷卻せん、若し也た會せずんば、伏して處分を聽け。古人行脚、交を結び友を擇んで、同行道伴と爲つて、撥草瞻風す。是の時雲門化を廣南に旺にす、香林得得として蜀を出づ、㋺ 鵝湖、鏡清と同時なり。先づ湖南の㋩ 報慈に參ず、後方に雲門の會下に至つて、侍者と作ること十八年、雲門の處に在つて、親しく得、親しく聞く。他の悟る時晩しと雖も妨げず是れ大根器なり。雲門の左右に居ること十八年、雲門常に只だ遠侍者と喚ぶ。纔かに應喏すれば、門云く、「是れ什麼ぞ。」香林當時也た下語して見解を呈す、精魂を弄して、終に相契はず。一日忽ち云く、「我れ會せり。」門云く、「何ぞ向上に道ひ將ち來らざる。」又住すること三年、雲門、室中に大機辯を垂るるとは、多半は他の遠侍者の隨處に入作せんが爲なり。雲門凡そ一言半句有る、都て遠侍者の處に收在す。香林後蜀に歸る、初め導江の水晶宮に住し、後に青城の香林に住す。㋥ 智門の祚和尙、本浙人なり、盛に香林の道化を聞いて、特に來つて蜀に入つて參禮す。祚は乃ち雪竇の師なり、雲門人を接すること無數なりと雖も、當代道行の者、只だ香林の

【本則】東籍禪師云く、十七は、九年面壁、只だ這の些子を傳へ、世人知る可らざるを明す。

㋑益州青城の香林院澄遠禪師は雲門の法嗣なり。

㋺鵝湖の智孚禪師、法を雪峰に嗣ぐ。

㋩五燈嚴統十三に、潭州報慈の藏嶼匡化禪師は、龍牙の遁に嗣ぐ。

㋥隋州智門の光祚禪師、法を香林の遠和尙に得たり。

㋭會元に云く、「香林禪師は漢州の人なり、姓は上官云々、將に寂を示さんとす、知府宋公瑤を辭して曰く、老僧行脚し去らん。大通剣曰く、這の僧風狂せり、八十歳にして行脚して、邪裏にか去る。宋公曰く、大善知識去住自由なり。師衆に謂つて云く、老僧四十

一派最も盛なり。川に歸つて住院すること四十年、八十歲にして方に遷化す。嘗て云く、㋚「我れ四十年、方に打成一片」と。凡そ衆に示して云く、「大凡そ行腳して、知識を參尋せんには、眼を帶びて行かんことを要す、須らく緇素を分ち、淺深を看て始めて得べし。先づ須らく志を立つべし、而も釋迦老子、㋛因地に在せし時、一言一念を發するに、皆是れ志を立つ。」後來僧問ふ、「如何なるか是れ室內一盞の燈。」林云く、「三人龜を證して鼈と成す。」又問ふ、「如何なるか是れ衲衣下の事。」林云く、「臘月の火山を燒く」と。古來祖師意に答ふること甚だ多し、唯だ香林の此の一則、天下の人の舌頭を坐斷す、儞が計較して道理を作す處無し。僧問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」林云く、「坐久成勞。」謂つ可し言無味、句無味と。無味の談、人口を塞斷す。儞が氣を出す處無し、見んと要せば便ち見よ、若し見ずんば、切に忌む解會を作すことを、香林曾て作家に遇ひ來れり。所以に雲門の手段有つて、三句の體調有り、人多く錯り會して道ふ、「祖師西來して、九年面壁す、豈是れ坐久成勞にあらずや」と。什麼の巴鼻か有らん、他の古人大自在を得る處を見す、他は是れ腦實地を踏んで、許多佛法の知見道理無し、時に臨んで應用す、所謂法は法に隨つて行じ、法嚩は處に隨つて建立す。㋝雪竇風に因つて火を吹いて、㋟傍に指出す。

㋚因風吹火、方語に、力を勞する多からざるなり、因行掉臂と同意なり。

㋟傍字の下に、一箇半箇の四字あれども、恐らくは頌の一箇兩箇と云ふが、爰へ紛れ來りしものならん、今は之れを削る。

㋛因地、方に打成一片と、言ひ訖て逝す。」

㋝雪竇は著語の修行中を云ふ。

【頌】一箇兩箇千萬箇。（何ぞ依つて之れを行せざる、麻の如く粟に似たり、群を成し隊を作して什麼に作ん。）籠頭を脫卻し角馱を卸す。（今日より去つて應に須らく灑灑落落たるべく、還つて休得するや也た未だしや。）左轉右轉後に隨ひ來る。（猶ほ自ら放不下、影影響響便ち打たん。）紫胡劉鐵磨を打たんことを要す。（山僧拄杖子を拗折して更に此の令を行はす。賊過ぎて後弓を張る、便ち打つ、嶮。）

【評唱】雪竇直下に擊石火の如く、閃電光に似たり。拶出して放つて儞をして見せしむ。聊か擧著するを聞いて便ち會せば始めて得てん。也た妨げず是れ他の屋裏の兒孫にして、方に能く恁麼に道ふ、若し能く直下に便ち恁麼に會し去らば、妨げず奇特なることを。「一箇兩箇千萬箇、籠頭を脫卻し角馱を卸す」と。灑灑落落として、生死の所染を被らず、聖凡情解の所縛を被らず、上攀仰無く、下己躬を絕す、一に他の香林・雪竇の如くに相似たらば、何ぞ止只是れ千萬箇のみならん。直に得たり盡大地の人、悉く皆此の如く、前佛後佛も、也た悉く皆此の如きことを。苟し或は言句の中に於て解會を作さば、便ち紫胡の劉鐵磨を打せんと要するに似て相似たり。其れ實に纔かに擧せば、聲に和して便ち打たん。紫胡、南泉に參す、㋡趙州㋢岑大蟲と同參、時に劉鐵磨潙山下に在つて庵を卓つ。諸方皆他を奈何ともせず。一日紫胡得得として去つて訪うて云く、「便ち是れ劉鐵磨なること莫し

㋡趙州從諗禪師。

㋢岑大蟲は、湖南長沙景岑禪師なり。

㋣不敢は謙讓の辭。「さうではない」也。

や否や。」麽云く、「和尚顚倒すること莫れ。」胡聲に和して便ち打つ。香林這の僧の「如何なるか是れ祖師西來意」と問ふに答へて、卻つて云ふ、「坐久成勞」と。若し恁麽に會得せば、左轉右轉後に隨ひ來れり。且く道へ、雪竇此の如く頌出する意作麽生。無事にして好し、試みに請ふ舉す看よ。

第十八則

【本則】　擧す、肅宗皇帝忠國師に問ふ、(本是れ代宗、此には誤る。)「百年後所須何物ぞ。」(預め搔いて痒を待つ、果然摸を起し樣を畫く。老老大大這の去就を作す、東を指して西と作す可らず。)國師云く、「老僧の爲めに箇の無縫塔を作れ。」(把不住。)帝云く、「請ふ師塔樣。」(好し一箭を與ふるに。)國師良久して云く、「會すや。」(囚に停めて智を長す、直に得たり東を指し西を劃し南を將て北と作すことを。直に得たり口匾檐に似たることを。)帝云く、「不會。」(賴に不會に値ふ、當時更に一拶を與へて伊をして滿口に霜を含ましめば卻つて些子に較らん。)國師云く、「吾れに付法の弟子耽源といふものあり、卻つて此の事を諳んず、請ふ詔して之れに問へ。」(賴に禪床を抵倒せざるに値ふ、何ぞ佗に本分の草料を與へざる、人を搔胡することを莫くんば好し、一着を放過す。)國師遷化の後、(惜む可し果然として錯りて定盤星を認む。)帝、耽源に詔して、此意如何と問ふ。(子は父の業を承げ、去るや、也た第二頭第三頭に落在す。)源云く、「湘の南潭の北。」(也た是れ把不住、兩兩三三什麼をか作す、半開半合。)雪竇著語して云く、「獨掌浪りに鳴らす。(一盲衆盲を引く、果然として語に隨つて解を生ず、邪に隨ひ惡を逐うて什麼にか作ん。)中に黃金有つて一國に充つ。(上は是れ天、下は是れ地、這箇の消息無し、是れ誰が分上の事ぞ。)雪竇著語して云く、「山形の拄杖子。(拗折了也、也た是れ摸を起し樣を畫く。)無影樹下の合同船。」(祖師喪し了れり、闍梨什麼と道ふぞ。)雪竇著語して云く、「海晏河淸、(洪波浩渺白浪滔天、猶ほ些子に較れり。)瑠璃殿上に知識無し。」(咄。)雪竇著語して云く、「拈了也。」(賊過ぎて後弓を張る、言猶ほ耳に在り。)

【本則】東嶺禪師云く、十八は塔を建つるの樣、最も全提半提の大事有ることを明す。

【評唱】㋑肅宗、㋺代宗、皆玄宗の子孫なり、太子爲りし時、常に參禪を愛す。國に㋩巨盜有るが爲に、玄宗遂に蜀に幸す。唐は本、長安に都す、安祿山僭據するが爲に、後に洛陽に都す、肅宗攝政す。是の時㋥忠國師、鄧州の白崖山に在つて住庵す、今の香嚴の道場是れなり。四十餘年山を下らず、道行帝里に聞ゆ。上元二年に中使に勅して詔して入內せしむ、待するに師の禮を以て、甚だ之を敬重す。嘗て帝の輿に無上道を演ぶ、師朝より退く、帝自ら車を攀ぢて之を送る、朝臣皆㋭慍る色有り、其の不便を奏せんと欲す。國師他心通を具

㋑肅宗は玄宗の第三子なり。
㋺代宗は肅宗の長子なり。
㋩巨盜は安祿山。
㋥南陽の白崖山香嚴寺の慧忠禪師は、六祖大鑑の法嗣なり、代宗、大證國師の徽號を賜ふ。
㋭慍は字典に「心蘊積する所あるなり。」

す、而して先づ聖に見えて奏して曰く、「我れ天帝釋の前に在つて、衆散天子を見るに、閃電光の如くに相似たり。」帝、愈敬重を加ふ。代宗の㋺臨御に及んで、復た延いて光宅寺に止らしむ。十有六載、機に隨つて說法す、大曆十年に至つて遷化す。山南府の㋩青銼山和尚、昔國師と同行たり、國師嘗て帝に奏して他を詔させしむ、三たび詔せども起たず、常に國師の名に耽り利を愛し、人間に戀著することを罵る。國師他の㋥父子二朝の中に於て國師と爲る、他家の父子、一時に參禪す。傳燈錄に考ふる所に據れば、此れは乃ち是れ代宗の設くる問なり。是れ國師に如何なるか是れ㋭十身調御と問ふが若きんば、此れ卻つて是れ慧宗の問なり。國師緣終つて、將に涅槃に入らんとす、乃ち代宗を辭す。代宗問うて曰く、「國師百年の後所須何物ぞ」と。只だ是れ平常一箇の問端なり、這の老漢風無きに浪を起して卻つて道ふ、「老僧が爲に箇の無縫塔を造れ」と。且く道へ、白日青天、此の如くにして什麼にか作さん。箇の塔を做ることは便ち了せん、什麼と爲てか卻つて道ふ、「箇の無縫塔を做れ」と、代宗也た妨げず作家なることを。偏に一拶を與へて道ふ、「請ふ師塔樣」と。國師良久して云く、「會す麼。」奇恠なり這の些子、最も是れ參じ難し。大小の國師、佗に一拶せられて、直に得たり口匾檐に似たることを。然も此の如くなりと雖も、若し是れ這の老漢にあらずんば、幾乎ど弄倒し了ちん。多少の人道ふ、「國師不言の處、便ち是れ塔樣」と。若し恁麼に會せば、達磨の一宗、地を掃つて盡きん。若し良久便ち是と謂はば、啞子も也た禪を會すべし。豈見すや、外道、佛に問ふ、有言を問はず、無言を問はず、世尊良久す。外道禮拜し、贊嘆して曰く、「世尊大慈大悲、我が迷雲を開いて、我をして得入せしむ。」外道去るに及んで、阿難、佛に問ふ、「外道何の所證有つてか、而も得入と言ふ。」世尊云く、「世の良馬の鞭影を見て行くが如し」と。人多く良久の處に向つて會す、什麼の巴鼻か有らん。五祖先師拈じて云く、「前面は是れ珍珠瑪瑙、後面は是れ瑪瑙珍珠、左邊は是れ觀音勢至、右邊は是れ文殊普賢、中間に箇の旛子有つて、風に吹著せられて、㋬胡盧胡盧と道ふ」と。國師云く、「會す麼。」帝曰く、「不會」と。卻つて些子に較れり。且く道へ、這箇の不會と武帝の不識と、是れ同か是れ別か、然も似たることは則ち似たりと雖も、是なることは則ち未だ是ならず。國師云く、「吾に付法の弟子耽源と云ふもの有り、卻つて此の事を諳んず、請ふ詔して之に問へ」と。雪竇拈じて云く、「獨堂浪りに鳴らず。」代宗の會せざることは則ち且く置く、耽源還つて會す麼、只だ箇の請ふ師塔樣と道ふことを消ふ、盡大地の人奈何ともせず。五祖先師拈じて云く、「儞は是れ一國の師、箇の什麼の爲にか道はずして、卻つて弟子に推與す」と。國師遷化の後、帝耽源を詔して、「此の意如何」と問ふ、源便ち來つて國師の爲に、胡言漢語して道理を說くに、自然に他の國師の說話を會す。只だ一頭を消ふ、(祖庭事苑齋時に出づ。)「湘の南潭

㋺臨御は皇帝の位に登るなり、御は卽ち統御。
㋩佛眼宗派圖に、興元青埜白雲庵の如觀と云ふもの有り、京兆の丁氏忠國師の同行なり、三たび詔せども起たず。
㋥慧宗、代宗。
㋭九十九則に見ゆ。

㋬胡盧は、唐音、うふろふ、旛が風に吹かれて「ぶう〳〵」と云ふ音なり、又旛脚の鈴が、「うふろん〳〵」と鳴ると云へる說もあり。

の北、中に黃金有つて一國に充つ、無影樹下の合同船、瑠璃殿上に知識無し」と。耽源名は應眞、國師の處に在つて侍者と作る。後に吉州の耽源寺に住す、時に仰山來つて耽源に參ず、源言重く性惡うして、犯す可らず、住すること得ず。仰先づ去つて、⑭性空禪師に參ず、僧有り、性空に問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」空云く、「人の千尺井中に在るが如し、寸繩を假らずして、此の人を出し得ば、卽ち汝に西來意を答へん。」僧云く、「近日湖南の暢和尙、亦、人の爲に東語西語す。」空乃ち「沙彌」と喚び、「這の死屍を拽き出し著よ。」（沙彌は仰山なり、）山後に舉して耽源に問ふ、「如何が井中の人を出し得ん。」耽源曰く、「咄。癡漢、誰か井中に在る。」仰山契はず、後溈山に問ふ、山乃ち「悲寂」と呼ぶ、山應喏す。溈云く、「出了也。」仰山此に因つて大悟して云く、「我れ耽源の處に在つて體を得、溈山の處に用を得たり」と。只だ是れ這の一箇の頌子、人の邪解を引くこと少からず。人多く錯り會して道ふ、「相は是れ相見、譚は是れ譚論、中間に箇の無縫塔有り、所以に道ふ、中に黃金有つて一國に充つ」と。帝、國師と對答す、便ち是れ無影樹下の合同船、帝會せず、遂に道ふ、「瑠璃殿上に知識無しと。」有る底は道ふ、「相は是れ相州の南、譚は是れ譚州の北」と。中に黃金有つて一國に充つとは、⑦官家を頌す。眨眼顧視して云く、「這箇は是れ無縫塔」と。若し恁麼に會せば、情見を出でず、只だ雪竇の四轉語を下すが如きんば、又作麼生か會せん。今の人殊に古人

⑭潭州石霜山の性空禪師、法を百丈の海に嗣ぐ。

⑦官家は天子なり、廣記に、五帝は天下を宮とし、三王は天下を家とす、今、有る底は、鷹宗天子を頌すと謂ふなり。」

の意を知らず。且く道へ、湘の南潭の北、偏作麼生か會せん。中に黃金有つて一國に充つ、偏作麼生か會せん。無影樹下の合同船、偏作麼生か會せん。瑠璃殿上に知識無し、偏作麼生か會せん。若し恁麼に見得せば。妨げず平生を慶快せん、湘の南潭の北、雪竇道く、「獨掌浪りに鳴らず」と。已むことを得ずして偏が與に說く、中に黃金有つて一國に充つ。雪竇道く、「⑦山形の拄杖子」と。古人道く、「拄杖子を識得せば、一生參學の事畢んぬ。」無影樹下の合同船、雪竇道く、「海晏河淸」と、一時に戶牖を豁開して、八面玲瓏、瑠璃殿上に知識無し。雪竇道く、「拈了也」と、一時に偏が與に說き了れり。妨げず見難きことを、見得せば也た好し、只だ是れ些子も錯つて認むる處有れば、語に隨つて解を生ず、末後に至つて道ふ、「拈了也」と、卻つて些子に較れり。雪竇分明に一時に下語し了つて、後面に單に箇の無縫塔子を頌す。

【頌】無縫塔。（這の一縫、大小大什麼と道ふぞ。）見ること還つて難し。（眼の見る可きに非ず、瞎。）澄潭には許さず蒼龍の蟠ることを。（見るや、洪波浩渺、蒼龍什處に向つてか蟠る、這裏直に得たり摸索不著なることを。）層落落。（眼花することなかれ、眼花して什麼か作ん。）影團團。（通身是れ眼、七に落ち八に落つ、兩兩三三舊路に行く、左轉右轉後に隨ひ來る。）千古萬古人に與へて看せしむ。（見るや、瞎漢作麼生か看ん、闍黎覷得見するや。）

【評唱】雪竇當頭に道ふ、「無縫塔見ること還つて難し」と。然も獨露して私無しと雖も、則ち是れ見ん

⑦山形の拄杖子は、細工を施さぬ山出しの拄杖なり。

と要する時還つて難し。雪竇忒煞だ慈悲、更に儞に向つて道ふ、澄潭許さず蒼龍の蟠ることを。五祖先師道く、「雪竇の頌古一冊、我は只だ他の澄潭許さず蒼龍の蟠るをの一句を愛す」と。猶ほ些子に較れり、多少の人他の國師良久の處に去つて活計を作す。若し恁麼に會せば、一時に錯り了れり。道ふことを見ずや、臥龍止水を鑒みず、無處には月有つて波澄み、有處には風無うして浪起る。又道く、「臥龍長に怖る碧潭の清きことを。」若し是れ這箇の漢ならば、直饒洪波浩渺白浪滔天なるも、亦裏許に在つて蟠らず、雪竇此に到つて頌し了る。後頭に些子の眼目を著けて、一箇の無縫塔を琢出す。後に隨つて說いて道ふ、「層落落影團團、千古萬古人に與へて看せしむ」と。儞作麼生か看ん、卽今什麼の處にか在る。直饒儞見得して分明なるも、也た錯つて定盤星を認むること莫れ。

第十九則

垂示に云く、一塵擧つて大地收り、一花開いて世界起る。只塵未だ擧らず、花未だ開かざる時の如きんば、如何が眼を著けん。所以に道ふ、一綟絲を斬るが如し、一斬一切斬。一綟絲を染るが如し、一染一切染。只如今便ち葛藤を將て截斷して、自己の家珍を運出せば、高低普く應じ、前後差ふこと無く、各各現成せん。儻し或は未だ然らずんば、下文を看取せよ。

【本則】擧す、俱胝和尙、凡そ所問あれば、(什麼の消息か有らん、鈍根の阿師。)只一指を竪つ。(這の老漢也た天下の人の舌頭を坐斷せんことを要す、熱するときは則ち普天普地熱し、寒するときは則ち普天普地寒す、天下の人の舌頭を換卻す。)

【評唱】若し指頭上に向つて會せば、則ち俱胝に辜負せん。若し指頭上に向つて會せずんば、則ち生鐵鑄就すに相似ん。會も也た恁麼にし去り、高も也た恁麼にし去り、低も也た恁麼にし去り、會も也た恁麼にし去り、是も也た恁麼にし去り、非も也た恁麼にし去る。所以に道ふ、「一塵纔かに起つて、大地全く收り、一花開かんと欲して、世界便ち起る。」❶一毛頭の獅子、百億毛頭に現ず」と。❷聞明道く、「塞するときは則ち普天普地寒く、熱するときは則ち普天普地熱す」と。山河大地、下黃泉に徹し、萬象森羅、上霄漢に通ず。且く道へ、是れ什麼物か恁麼に奇怪なることを得たる、若し也た識得せば、一揑を消せず、若し識不得ならば、人を礙塞殺せん。俱胝和尙は、乃ち婺州金華の人なり、初め住庵の時、一尼有り、實際と名く、庵に到つて直に入つて、更に笠を下さず、錫を持して禪牀を遶ること三匝して云く、「道ひ得ば卽ち笠を下さん。」是の如く三たび問ふ、俱胝對無し、尼便ち去る。俱胝曰く、「天勢稍晚れぬ、且く留つて一宿せよ。」尼曰く、「道ひ得ば卽ち宿せん。」胝又對無し、尼便ち行く。胝嘆じて曰く、「我れ丈夫の形に處すと雖も、而も丈夫の氣無し」と、遂に發憤して此の事を明めんと要す。庵を棄て諸方に往いて參請し、

【本則】東嶺禪師云く、十九は千七百則の公案、俱胝一指頭を出でざるを明す。

❶華嚴經に云く、文殊駕する所の獅子王、一毛頭上の獅子、百億毛頭に現ず、百億毛頭の獅子、一毛頭上に現ず。

❷德山の緣密圓明禪師、雲門大師の法嗣。

打疊行脚せんと擬す。其の夜山神告げて曰く、「此を離るることを須ひざれ、來日肉身の菩薩有つて來つて、和尚の爲に說法せん、去ることを須ひざれ」と。果して是の次の日、天龍和尚、庵に到る、胝乃ち迎へ禮して、具に前事を陳ぶ。天龍只だ一指を竪て之に示す、俱胝忽然として大悟す。是れ他當時㈧鄭重に㈡專注す、所以に桶底脫し易し。後來凡そ所問有れば、只だ一指を竪つ。長慶道く、「美食飽人の喫に中らず。」玄沙道く、「我れ當時若し見ば、指頭を拗折せん。」玄覺云く、「玄沙恁麼に道ふ意作麼生。」雲居の錫云く、「只だ恁麼に道ふが如きんば、是れ伊を肯ふか、是れ伊を肯はざるか、若し伊を肯はば、何ぞ指頭を拗折せんと言ふ、若し伊を肯はずんば、俱胝の過什麼の處にか在る。」先曹山云く、「俱胝㈬承當の處莽鹵なり、只だ一機一境を認得して、一等に是れ手を拍ち掌を撫す。他の㈭西園を見るに奇怪なり」と。玄覺又云く、「且く道へ、俱胝還つて悟るや也た未しや、什麼と爲てか承當の處莽鹵なる、若し是れ悟らずんば、又平生只だ一指頭の禪を用ひ盡さずと道はんや。且く道へ、曹山の意什麼の處にか在る」と。當時俱胝實に然も會せずんば、他の悟後に到るに及んで、凡そ所問有れば、只だ一指を竪つ。什麼に因つてか千人萬人羅籠すれども住らず、他を撲すれども破れず、儞若し用て指頭の會を作さば、決定して古人の意を見ず、這般

㈧鄭名に曰く、鄭重は慇懃なり。
㈡增韵に、專注は一なり、純篤なり。
㈬承當は「ひきうけた」と讀す。
㈭會元第三に、馬祖の法嗣、南岳の西園曇藏禪師云々、一日自ら浴を燒く次で、僧問ふ、「何んぞ沙彌を使はざる、」師掌を撫すること三下、僧曹山に舉似す、山曰く、「一等に是れ手を拍ち掌を撫す、中に就いて西園奇特なり」云々。

の禪は參じ易し、只だ是れ會し難し。如今の人纔かに問著すれば、也た指を竪て拳を竪つ。只だ是れ精魂を弄す、也た須らく是れ徹骨徹髓、見透して始めて得べし。俱胝庵中に一の童子有り、外に於て人に詰られて曰く、「和尚尋常何の法を以てか人に示す」と。童子指頭を竪起す、歸つて師に舉似す。俱胝刀を以て其の指を斷つ、童子叫喚して走り出づ。俱胝召すこと一聲、童子首を回す、俱胝卻つて指頭を竪起す。童子豁然として領解す。且く道へ、箇の什麼の道理をか見る。遷化に至るに及んで、衆に謂つて曰く、「吾天龍一指頭の禪を得て、平生用ひ盡さず、會せんと要す麼。」指頭を竪起して便ち脫去す。後來明招の獨眼龍、國泰の深師叔に問うて云く、「古人道く、『俱胝只だ三行の咒を念じて、便ち名一切の人に超ゆることを得たり』と、作麼生か他の與に三行の咒を拈卻せん。」深亦一指頭を竪起す。招云く、「今日に因らずんば、爭か這の瓜州の客を識得せん。」且く道へ、意作麼生、㈥秘魔は平生只だ一杈を用ふ。㈦打地和尚は、凡そ所問有れば、只だ地を打つこと一下す。後人に佗の棒を藏卻して、卻つて「如何なるか是れ佛」と問はれて、他只だ口を張る、亦是れ一生用ひ盡さず。㈧無業云く、「祖師此土に大乘の根器有ることを覩て、唯だ心印を單傳して、迷塗を指示す、之を得る者は、愚と智と、

㈥會元第四に云く、五臺山秘魔岩和尚、常に一木叉を持して、僧の來りて禮拜するを見る毎に、頭を叉卻して曰く、「那箇の魔魅か汝をして出家せしむ、那箇の魔魅か汝をして行脚せしむ、道ひ得るも也た叉下に死し、道ひ得ざるも也た叉下に死せん、速に道へ速に道へ」云々。
㈦會元第三に、忻州打地和尚、江西より旨を傾じて、常に其の名を晦す、云々。
㈧會元第三に、汾州無業禪師は商州上洛杜氏の子なり云々、法を馬祖に嗣ぐ。

凡と聖とを揀ばず、且つ虚の多からんより、如かじ實の少からんには。大丈夫の漢、卽今直下に休歇し去つて、頓に萬緣を息め去らば、生死の流を超えて、迥かに常格を出でん。縱ひ眷屬莊嚴有るも、求めざるに自ら得」と。無業一生凡そ所問有れば、只だ道ふ「莫妄想」と。所以に道ふ、「一處透れば千處萬處一時に透る、一機明かなれば千機萬機一時に明かなり」と。如今の人總に不恁麼、只管に意を恣にして情解して、他の古人省要の處を會せず、他豈に是れ機關轉換の處無からざらんや。什麼と爲てか只だ一指頭を用ふ、須らく知るべし俱胝這裏に到つて、深密爲人の處有ることを。省力を會得せんと要する麼。他圓明の寒するときは則ち普天普地寒く、熱するときは則ち普天普地熱すと道ふに還す。山河大地、上に通じて孤危、萬象森羅、下に徹して嶮峻。什麼の處よりか一指頭の禪を得來らん。

【頌】　對揚深く愛す老俱胝。（癩兒伴を牽く、同道方に知る、是れ一機一境を免れざることを。）宇宙空じ來るに更に誰か有らん。（兩箇三箇更に一箇有り、也た須らく打殺すべし。）曾て滄溟に向つて浮木を下す。（全く是れ這箇是なることは則ち是、太孤峻生、破草鞋、什麼の用處か有らん。）夜濤相共に盲龜を接す。（天を撈し地を摸す、什麼の了期か有らん、接得して何の用を作すにか堪へん、令に據つて行ず、無佛世界に趂向せん。閻黎一箇の瞎漢を接得す。）

【評唱】　雪竇四六の文章を會して、七通八達、凡そ是れ諸訛奇特の公案、偏に去つて頌するを愛す。

「❷對揚深く愛す老俱胝、宇宙空じ來るに更に誰か有らん」と。今時の學者古人を抑揚す、或は賓或は主、一問一答、當面に提持して、此の如く爲人の處有り。所以に道ふ、「對揚深く愛す老俱胝」と。且く道へ、雪竇他を愛して什麼か爲ん、天地開闢より以來、更に誰人か有らん、只だ是れ老俱胝一箇なり、若し是れ別人ならば須らく參雜すべし。唯だ是の俱胝老、只だ一指頭を用ひて、直に老死に至る。時の人多く邪解して道ふ、「山河大地も也た空じ、人も也た空じ、法も也た空す、直饒宇宙一時に空じ來るも、只だ是れ俱胝老一箇」と、且得沒交涉。曾て滄溟に向つて浮木を下す、如今之を生死海と謂ふ。衆生業海の中に在つて、頭出頭沒して、自己を明めず、出期有ること無し。俱胝老慈を垂れて、物を接す、生死海の中に於て、一指頭を用て人を接す、浮木を下して盲龜を接するに似て相似たり。諸の衆生をして、彼岸に到ることを得せしむ。夜濤相共に盲龜を接す、法華經に云く、「一眼の龜の浮木の孔に値ふて、沒溺の患無きが如し」と。大善知識、一箇の龍の如く虎に似たる底の漢を接得して、他をして有佛世界に向つて、互に賓主と爲り、無佛世界に要津を坐斷せしむ。箇の盲龜を接得して、何の用を作すにか堪へん。

❷對は答なり、揚は舉なり、問答の義。

第二十則

垂示に云く、堆山積嶽。撞墻磕壁。佇思停機せば、一場の苦屈。或は箇の漢あつて出で來つて、大

海を掀翻し、須彌を踢倒し、白雲を喝散し、虛空を打破して、直下に一機一境に向つて、天下の人の舌頭を坐斷せば、爾が近傍の處無けん。且く道へ、從上來是れ什麼人か會て恁麼なる。試みに擧す看よ。

【本則】㊀擧す、㊁龍牙㊂翠微に問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」（諸方の舊話也た勘過せんと要す。）微云く、「我が與めに禪板を過し來れ。」（禪板を用て什麼か作ん、泊んど放過すべきに。嶮。）牙、禪板を過して翠微に與ふ。（也た是れ把不住、青龍を駕與すれども騎ることを解せず。可惜許、當面に承當せず。）微接得して便ち打つ。（着、箇の死漢を打得して甚の事を濟さん、也た第二頭に落在し了れり。）牙云く、「打つことは卽ち打つに任す。要且つ祖師西來意無し。」（這の漢第二頭に話在す、賊過ぎて後弓を張る。）牙又臨濟に問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」（諸方の舊公案再び問ひ將ち來る、半文錢に直らず。）濟云く、「我が與めに蒲團を過し來れ。」（曹溪の波浪若し相似たらば、限り無き平人も陸沉せられん。一狀に領過す、一坑に埋卻せん。）牙、蒲團を取つて臨濟に過與す。（依前として把不住、依前として不伶俐、越國に依稀として楊州に髣髴たり。）濟、接得して便ち打つ。（着、惜む可し這般の死漢を打することを、一模に脫出す。）牙云く、「打つことは卽ち打つに任す、要且つ祖師西來意無し。」（灼然、鬼窟裏に在りて活計を作す、將に謂へり便宜を得たりと。賊過ぎて後弓を張る。）

【評唱】㊀翠巖の芝和尙云く、「當時是の如し、今時の衲子、皮下還つて血有り麼。」溈山の喆云く、「翠微、臨濟、謂つ可し本分の宗師と。龍牙は一等に是れ撥草瞻風す、妨げず後人の與に龜鑑と作ることを。」住院の後僧有り、問ふ、「和尙當時還つて二尊宿を肯ふ麼。」牙云く、「肯ふことは卽ち肯ふ、只だ是れ祖師西來意無し。」龍牙前を瞻後を顧て、病に應じて藥を與ふ、大溈は則ち然らず、伊が和尙當時還つて二尊宿を肯ふ麼と問はんを待つて、明不明、劈脊に便ち打せん。惟だ翠微・臨濟を扶竪するのみに非ず、亦來問に辜負せず。㊁石門聰云く、「龍牙人の拶著する無くんば猶は可なり、箇の衲子に挨著せられて、一隻眼を失卻す。」雪竇云く、「臨濟・翠微、只だ把住することを解して、放開することを解せず、我れ當時若し龍牙と作らば、伊が蒲團禪板を索めんを待つて、拈起して劈面に便ち擲たん。」五祖の戒云く、「和尙恁麼に㊃面長なることを得たり。」或は云く、「祖師、㊄土宿頭に臨む」と。黃龍の新云く、「龍牙耕夫の牛を驅り、飢人の食を奪ふ。既に明かなることは則ち明かなり矣、什麼に因つて卻つて祖師西來意無き。會す麼、棒頭に眼有

【本則】
㊀東嶽禪師云く、二十は、古人行脚、みな悟後の大事を極むることを明す、此の故に、雪竇和尙再應頌出して、以て宗旨別に生涯有ることを顯す、溈山の師曰く、「翠微臨濟、謂つ可し本分の宗師と、一等に是れ撥草瞻風、妨げず後人の與に龜鑑と作ることを。」
㊁龍牙は湖南龍牙山妙濟院の居遯禪師にして、洞山良价の法嗣なり。
㊂翠微は京兆終南山の無學禪師にして、丹霞天然の法嗣なり。

㊀瑞州大愚の守芝禪師、のち翠巖に住す、汾陽昭の法嗣なり。
㊁會元に襄州石門の聰禪師、法を大陽の堅禪師に嗣ぐ云々。
㊃面長は「ばからしい」と譯す、冬瓜は直して懂侗の義なり。
㊄土宿は土を主る星なり、土が頭上に臨む、不祥知るべし。

り、明かなること日の如し、眞金を識らんと要せば火裏に看よ」と。大凡そ要妙を激揚し、宗乘を提唱せんには、第一機下に向つて明得して、以て天下の人の舌頭を坐斷す可し。儻し或は躊躇せば、第二に落在せん。這の二老漢、然も風を打し雨を打し、天を驚し地を動すと雖も、要且つ曾て箇の明眼の漢を打著せず。古人の參禪、多少か辛苦する。大丈夫の志氣を立て山川を經歷し、尊宿に參見す。龍牙先づ翠微・臨濟に參じ、後德山に參ず。遂に問ふ、「學人鐵鄒の劍に仗つて、師の頭を取らんと擬する時如何。」德山頸を引べて云く、㋭「囫。」牙云く、「師の頭落ちぬ。」山微笑して便ち休し去る。次に洞山に到る、洞山問ふ、「近離甚の處ぞ。」牙云く、「德山より來る。」洞山云く、「德山何の言句か有りし。」牙遂に前話を擧す、洞山云く、「他什麼とか道ひし。」牙云く、「他無語。」洞山云く、「道ふこと莫れ語無しと、且く試みに德山落つる底の頭を將つて、老僧に呈似せよ看ん。」牙此に於て省有り、遂に香を爇いて德山を望んで、禮拜懺悔す。德山聞いて云く、「洞山老漢、好惡を識らず、這の漢死し來ること多少時ぞ、救ひ得るも什麼の用處か有らん。從他あれ老僧が頭を擔うて、天下を遠つて走ることを。」龍牙根性聰敏、一肚皮の禪を擔うて行脚す。直に長安の翠微に向つて便ち問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」微云く、「我が與に禪板を㋩過し來れ。」牙禪板を取つて微に與ふ、微接得して便ち打つ。牙云く、「打つことは卽ち打つに任す、要且つ祖師西來意無し。」又臨濟に問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」濟云く、「我が與に薄團を過し來れ。」牙蒲團を取つて臨濟に與ふ、濟接得して便ち打つ。牙云く、「打つことは卽ち打つに任す、要且つ祖師西來意無し。」他箇の問端を致す、妨げず他の曲彔木床上の老漢を見んと要し、亦自己一段の大事を明めんと要することを。謂つ可し言虛に設けず、機亂に發せず、做工夫の處に出在すと。見ずや㋥五洩、石頭に參す、先づ自ら約して曰く、「若し一言に相契はば卽ち住らん、然らずんば卽ち去らん」と。石頭據座、洩拂袖して出づ。石頭是れ法器なることを知つて、卽ち開示を垂る、洩其の旨を領せず、告辭して出でて門に至る。石頭之を呼んで云く、「闍黎。」洩回顧す、石頭云く、「生より死に至るまで、只だ是れ這箇、頭を回し腦を轉じて、更に別に求むること莫れ」と。洩言下に於て大悟す。又麻谷、錫を持して章敬に到つて、禪床を遶ること三匝、錫を振ふこと一下、卓然として立つ。敬云く、「是是。」又南泉に到つて、依前として床を遶り錫を振つて立つ。南泉云く、「不是不是。」此れは是れ風力の所轉、終に敗壞を成す。谷云く、「章敬は是と道ひ、和尙は什麼と爲てか不是と道ふ。」南泉云く、「章敬は卽ち是、是れ汝は不是」と。古人也た妨げず提持して此の一件の事を透脫せんと要することを。如今の人纔かに問著すれば、全く些子の工夫を用ふる處無し。今日も也た只だ是れ恁麼、明日も也た只だ是れ恁麼ならば、盡未來際にも也た未だ了日有らず、須らく是れ精神を抖擻して、始めて少分の相應有ることを得べし。儞看よ、龍牙一問を發して道く、「如何

㋭囫は玉篇に、戶臥の切、音和、船を乘く聲、唐音「おう」、重き物を乘く故、思はず「おう」と聲が出るなり。

㋩過雅に、「長州の人、物を以て人に與ふるを過すと曰ふ。」

㋥五洩、石頭　長州五洩山の靈默禪師、法を馬祖に嗣ぐ。

なるか是れ祖師西來意。」翠微云く、「我が與に禪板を過し來れ。」牙、微に過與す、微接得して便ち打つ。牙當時禪板を取る時、豈に翠微が他を打たんと要するを知らざらんや。也た便ち他會せずと道ふことを得す、什麼と爲てか卻つて禪板を過して他に與ふ。且く道へ、當機承當得する時、合に作麼生か、他活水の處に向つて用ひす。自ら死水裏に去つて活計を作して、一向に主宰と作つて、便ち道ふ、「打つことは卽ち打つに任す、要且つ祖師西來意無し」と。又走つて河北に去つて臨濟に參す、依前として恁麼に問ふ、濟云く、「我が與に蒲團を過し來れ。」牙、濟に過與す、濟接得して便ち打つ。牙云く、「打つことは便ち打つに任す、要且つ祖師西來意無し。」且く道へ、二尊宿又法嗣を同じうせす、什麼と爲てか答處相似て用處一般なる。須らく知るべし古人一言半句、亂に施爲せざることを。他後來住院、僧有り、問うて云く、「和尙當時二尊宿に見ゆ、是れ他を肯ふか他を肯はざるか。」牙云く、「肯ふことは則ち肯ふ、要且つ祖師西來意無し」と。爛泥裏に刺有り、放過して人に與ふ、已に第二に落つ、這の老漢把得定して、只だ洞下の尊宿と做し得たり。若し是れ德山・臨濟の門下ならば、須らく別に生涯有ることを知るべし。若し是れ山僧ならば則ち然らす、只だ他に向つて道はん、「肯ふことは卽ち未だ肯はす、要且つ祖師西來意無し」と。見すや僧大梅に問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」梅云く、「西來無意」と。鹽官聞いて云く、「一箇の棺材、兩箇の死漢。」玄沙聞いて云く、「鹽官是れ作家」と。雪竇道く、「三箇も也た有り。」只だ這の僧の祖師西來意を問ふが如きんば、卻つて他に向つて道ふ、「西來無意」と。

偏若し恁麼に會せば、無事界裏に墮在せん。所以に道ふ、「㊥須らく活句に參ずべし、死句に參ずることを莫れ、活句下に薦得せば、永劫にも忘れず、死句下に薦得せば、自救不了」と。龍牙恁麼に道ふ、「妨げず善を盡すことを。」古人道く、「相續也た大いに難し」と。他の古人、一言半句、亂に施爲せす、前後相照して、權有り實有り、照有り用有り、賓主歷然、互換縱橫。若し其の親切を辨せんと要せば、龍牙の宗乘を味さすと雖も、爭奈せん第二頭に落在することを。當時二尊宿、禪板蒲團を索む、牙、他の意を知らずんばある可らす、是れ他、他の胸襟裏の事を用ひんと要す。然も是の如くなりと雖も、妨げず用ひ得て太だ峻なることを。龍牙恁麼に問ひ、二老恁麼に答ふ、什麼と爲てか卻つて祖師西來意無き。這裏に到つて、須らく別に箇の奇特の處有ることを知るべし。雪竇拈出して人をして看せしむ。

【頌】　龍牙山裡龍に眼無し。(瞎、別人を設ずることは卽ち得たり。泥裏に土塊を洗ふ、天下の人總に知る。)死水何ぞ曾て古風を振はん。(忽然として活する時奈何ともすること無けん。累天下の人に及んで出頭することを得す。)禪板蒲團用ふること能はす、(阿誰をしてか說かしめん、偏禪板蒲團を要して什麼か作ん。是れ闍黎に分付すること莫しや。)只應に分付して盧公に與ふべし。(也た則ち分付することを着す、漆桶這般の見解を作すこと莫れ。)

㊥會元十五、德山の緣密上堂に云く、「但だ活句に參ぜよ、死句に參ずること莫れ、活句下に薦得すれば、永劫にも滯ること無し云々。」

【評唱】雪竇欵に據つて案に結す、他恁麼に頌すと雖も、且く道へ、意什麼の處にか在る。甚の處か是れ眼無き、甚の處か是れ死水裏。這裏に到つて、須らく是れ變通有つて始めて得べし。所以に道ふ、「澄潭許さず蒼龍の蟠ることを、死水何ぞ曾て蟄龍有らん」と。道ふことを見すや、❶死水龍を藏さずと。若し是れ活底の龍ならば、須らく洪波浩渺、白浪滔天の處に向つて去るべし。此れ龍牙走つて死水中に入り去つて人に打せらるゝことを言ふ。他卻つて道ふ、「打つことは卽ち打つに任す、要且つ祖師西來意無し」と。雪竇死水何ぞ曾て古風を振はんと道ふことを招き得たり。然も此の如くなりと雖も、且く道へ、雪竇是れ伊を扶持するか、是れ他の威光を減ずるか。人多く錯り會して道ふ、什麼と爲てか、只だ應に分付して盧公に與ふべき。殊に知らず、卻つて是れ龍牙❷分付して人に與ふることを。大凡そ參請は、須らく是れ機上に向つて辨別して、方に他の古人相見の處を見るべし、禪板蒲團用ふること能はず。翠微云く、「我が與に禪板を過し來れ。」牙他に過與す、豈に是れ死水裏に活計を作すにあらずや。分明に是れ❸青龍を駕與すれども、只だ是れ他騎ることを解せず、只だ應に分付して盧公に與ふべし。往々喚んで六祖と作すは非なり、曾て分付して人に與へて、用て人を打たんことを要すと道はば、卻つて箇の什麼をか成し去らん。昔雪竇自ら呼んで盧公と爲す、他迹を晦して自ら貽すと云

❶首山廣教錄に、問ふ、「龍欄喪靈する時如何ん、」師曰く、「死水龍を藏さず。」
❷分付は「わたす」なり、又、囑付と同じく「いひつける」ことにもなる。
❸駕與は「のせてやる」と譯す、駕は車に馬を付けるを云ふ、今、青龍を付けてやつても、其の車にえのらぬなり。

ふに題して云く、「❹圖畫當年洞庭を愛す、波心❺七十二峯青し。❻而今高臥して前事を思へば、添へ得たり盧公が石屏に倚ることを。」雪竇龍牙の頭上に去つて行かんことを要す、又人の錯り會せんことを恐る。所以に別に頌して人の疑解を翦らんことを要す。雪竇復た拈じて曰く、

【頌】這の老漢、未だ勦絶するを得ず、復た一頌を成す。(灼然、能く幾人有りてか知る、自ら知る一半に較ることを。賴に末後の句有り。)盧公に付し了るも亦何ぞ憑らん。(盡大地恁麼の人を討ぬるに也た得難し、誰をして領話せしめん。)坐倚將つて祖燈を繼ぐことを休めよ。(草裏の漢、黑山下に打入して坐す、鬼窟裏に落在し去れり。)對するに堪へたり暮雲の歸つて未だ合せざるに、(一箇半箇、擧着せば卽ち錯らん、果然として出不得。)遠山限り無く碧層層。(儞が眼を寒卻し、儞が耳を寒卻す、深坑に沒溺す、更に參せよ三十年。)

【評唱】盧公に付し了るも亦何ぞ憑らん、何の憑據か有らん。直に須らく這裏に向つて恁麼に會し去るべし、更に株を守つて兎を待つこと莫れ。髑髏前に一時に打破して、一點の事の胸中に在くこと無く、放つて灑灑落落地ならしめば、又何ぞ必ずしも憑ることを要せん。或は坐し或は倚つて、佛法の道理を作すことを消ひざれ。所以に道ふ、「坐倚將て祖燈を繼ぐことを休めよ」と。雪竇一時に拈じ了れり、他箇の轉身の處有つて、末後自ら箇の消息を露す。此子の好處有り、道く、暮雲の歸つて未だ

❹雪竇未だ洞庭翠峰に住ぜざる時、洞庭の圖畫を看ても、彼の景勝を愛したり。
❺宋の蘇舜欽、水月院記の中に「山有り七十二、惟だ洞庭を雄と稱す。」
❻而今は翠峰に住してより。

合せざるに對するに堪へたり。且く道へ、雪竇の意什麼の處にか在る、暮雲歸つて合せんと欲して未だ合せざるの時、儞道へ作麼生。遠山限り無く碧層層、舊に依つて鬼窟裏に打入し去る。這裏に到つて得失是非、一時に坐斷して、灑灑落落として始めて些子に較れり。遠山限り無く碧層層、且く道へ、是れ文殊の境界耶、是れ普賢の境界耶、是れ觀音の境界耶。此に到つて且く道へ、是れ什麼人の分上の事ぞ。

國譯佛果圜悟禪師碧巖錄卷第二

終

國譯佛果圜悟禪師碧巖錄卷第三

第二十一則

垂示に云く、法輪を建て宗旨を立す、錦上に花を鋪く、籠頭を脱し角駄を卸す。太平の時節、或は若し格外の句を辨得せば、擧一明三、其れ或は未だ然らずんば、舊に依つて伏して處分を聽け。

【本則】擧す、僧、智門に問ふ、「蓮花未だ水を出でざる時如何。」（不疑の地に鈎在す、泥裏土塊を洗ふ、那裏よりか這の消息を得來る。）智門云く、「蓮花。」（一二三四五六七、天下の人を疑殺す。）僧云く、「水を出でて後如何。」（鬼窟裏に向つて活計を作す莫れ、又恁麼に去るや。）門云く、「荷葉。」（幽州は猶ほ自ら可なり、最も苦しきは是れ江南、兩頭三面、天下の人を笑殺す。）

【評唱】❹智門若し是れ機に應じて物を接せば、猶ほ些子に較れり。若し是れ衆流を截斷せば、千里萬里。且く道へ、這の蓮花、出水と未出水と是れ一か是れ二か。若し恁麼に見得せば、儞に許す這の入處有ることを。然

【本則】
東籟禪師云く、二十一則は、碧巖に須出する所の一百則、是れ雪竇の遙作にして、本、雲門宗より出づ、中に就いて最も雲門林才を以て、所依の者と爲すことを明す、智門和尚は、雪竇の師とする所の尊宿のみ。
❹智門の光祚禪師は、雲林澄遠の法嗣にして、雪竇重顯の師なり。
❺顧禎は、事苑に、大面の鏡、

も是の如くなりと雖も、若し是れ一と道はば、佛性を㋺顢頇し、眞如を㋩儱侗す。若し是れ二と道はば、心境未だ忘せず、解路上に落在して走らば、什麼の歇期か有らん。且く道へ、古人の意作麼生、其の實は許多の事無し。所以に投子道ふ、「儱侗だ名言數句に著する莫れ、若し諸事を了せば、自然に著せず、卽ち許多の位次不同無けん。」儱一切の法を攝す、一切の法儱を攝すること得ず。本得失夢幻、如許多の名目無し、强ひて佗の與に名字を安立す可らず。儱諸人を誑謔し得ん麼、儱諸人問ふが故に、所以に言有り、儱若し問はずんば、我をして儱に向つて什麼をか道はしめてか卽ち得ん。一切の事は皆是れ儱將ち得來る、都て我が事に干らず。㋥古人道く、「佛性の義を識らんと欲せば、當に時節因緣を觀ずべし。」見ずや、雲門擧す、僧㋭靈雲に問うて云く、「佛未だ出世せざる時如何。」雲拂子を竪起す。僧云く、「出世して後如何。」雲亦拂子を竪起す。雲門云く、「前頭は打著、後頭は打不著。」又云く、「出と不出とを說かずんば、何の處にか伊が問ふ時節有らん」と。古人一問一答、時に應じ節に應じて、許多の事無し。儱言を尋ね句を逐はば、丁に交涉無からん。儱若し能く言中に言を透得し、意中に意を透得し、機中に機を透得して、放つて閑閑地ならしめば、方に智門答話の處を見ん。㋬問ふ、「佛未だ出世せざる時如何。牛頭未だ四祖に見えざる時如何。玻石の內混沌未分の時如何。父母未生の時如何。」雲門道く、

玉浦云く、無分曉なり、癡鈍晴昧の義なり、人生れて手無く、冬瓜の如きを云ふなり。

㋩儱侗は事苑に、未だ器を成さざるなり、なんでもないもの也。

㋥百丈の語なり、もと是れ涅槃經の文。

㋭靈雲は潙山の弟に嗣ぐ。

㋬蜀本に「問佛より父母未生の時如何」迄を削る。

「古より今に至る、只だ是れ一段の事、是無く非無く、得無く失無く、生と未生と無し。」古人這裏に到つて、㋟一綫道を放つて、出有り入有り、若し是れ未了底の人ならば、㋠扶羅摸壁、㋡依草附木、或は他をして放下せしめ、又莽莽蕩蕩荒然たる處に打入し去る。若し是れ得る底の人ならば、二六時中、一物に依倚せず。一物に依倚せずと雖も、若し一機一境を露さば、作麼生か他を摸索せん。這の僧問うて道く、「蓮花未だ水を出でざる時如何。」智門云く、「蓮花。」便ち只だ攔問の一答、妨げず奇特なることを。諸方皆之を顚倒の語と謂ふ、那裏にか此の如くならん。見ずや嵩頭道く、「常に貴ぶらくは未だ口を開かざる巳前、猶ほ些子に較ることを。」古人機を露す處、已に是れ漏逗し了れり。如今の學者、古人の意を省せず、只管に去つて、出水と未出水とを理論す、什麼の交涉か有らん。見ずや僧、智門に問ふ、「如何なるか是れ般若の體。」門云く、「蚌明月を含む。」僧云く、「如何なるか是れ般若の用。」門云く、「兎子懷胎」と。看よ他此の如く對答す、天下の人他の語脈を討ね得ざることを。或は人有つて㋣夾山に問うて道く、「蓮花水を出でざる時如何」と。只だ他に對して道はん、「露柱燈籠。」且く道へ、「蓮花と是れ同か是れ別か、水を出でて後如何。」他に對して道はん、「杖頭日月を挑げ、腳下太だ泥深し」と。儱且く道へ、是か不是か、且く錯つて定盤星を認むること莫れ。雪竇弐煞だ慈悲、

㋟綫は線に同じ、一條の小路を通ずるなり。

㋠盲人の籬壁に依つて、摸索して行くが如し。

㋡精靈孤魂の草木に依附するが如し。

㋢杜預の注に云く、草廣野に生じて、莽莽然たるなり、蕩蕩は廣遠の貌。

㋣夾山は圜悟なり。

人の情解を打破す、所以に頌出す。

【頌】　蓮花荷葉君に報じて知らしむ。(老婆心切、見成公案、文彩已に彰る。)出水は未出の時に何如れ。(泥裏に土塊を洗ふ、分開せば也た好し、儘倜し去る可らず。)江北江南王老に問はゞ、(主人公什麼の處にか在る、王老師に問うて什麼か作ん、儞自ら草鞋を踏破す。)一狐疑し了つて一狐疑せん。(一坑に埋卻せん、自ら是れ儞疑ふ、疑情未だ息まざることを免れず、打つて云く、會すや。)

【評唱】　智門本是れ㋐浙人なり、得得として㋑川に入つて香林に參す、既に徹して卻回して、隋州の智門に住す。雪竇は是れ他の的子、見得して好く玄を窮め妙を極む。直に道ふ、「蓮花荷葉君に報じて知らしむ、出水は何ぞ未出の時に如かん」と。這裏人の直下に便ち會せんことを要す。山僧は道ふ、「未出水の時如何、露柱燈籠、出水の後如何、杖頭日月を挑げ、腳下太だ泥深し」と。儞且く錯つて定盤星を認むること莫れ、如今の人、人の言句を咬む者、甚麼の限りか有らん。儞且く道へ、出水の時是れ什麼の時節ぞ、未出水の時是れ什麼の時節ぞ、若し這裏に向つて見得せば、儞に許す親しく智門に見ゆることを。雪竇道く、「儞若し見ずんば、江北江南㋒王老に問へ。」雪竇の意に道く、「儞只管に江北江南に去つて、尊宿に出水と未出水とを問うて、江南に兩句を添へ得、江北に兩句を添へ得、一重に一重を添へば、展轉して疑を生ぜん」と。且く道へ、何の時疑はざることを得去らん、㋓野狐の疑多くして、冰凌上に行いて、以て水聲を聽いて、若し鳴らざれば方に河を過ぐ可きが如し。參學の人、若し一狐疑し了つて一狐疑せば、幾時か平穩を得去らん。

㋐東浙。
㋑蜀の四川。
㋒大唐に張、李、王等の姓多し、南泉姓は王、自ら王老師と稱す、今總に知識を指して王老と云ふ。
㋓漢書の文帝記註に曰く、狐の獸たる其の性疑多し、毎に冰河を渡るに、且つ聽き且つ渡る、故に疑ふ者を目つて狐疑と稱するなり。

第二十二則

垂示に云く、大方外無く、細なること隣虛の若し。擒縱他に非ず、卷舒我れに在り。必ず粘を解き縛を去らんと欲せば、直に須らく迹を削り聲を呑むべし。人人要津を坐斷し、箇箇壁立千仞ならん。且く道へ、是れ什麼人の境界ぞ。試みに擧す看よ。

【本則】　擧す、雪峰衆に示して云く、「南山に一條の鼈鼻蛇あり、(怪を見て怪とせざれば其の怪自ら壞す、大小大の怪事、妨げず人をして疑着せしむ。)汝等諸人切に須らく好く看るべし。」(囫、一場の漏逗。)長慶云く、「今日堂中、大に人有り喪身失命。」(普州の人賊を送る、己を以て人に方ぶ。)僧、玄沙に擧示す。(同坑に異土無し、奴は婢を見て殷勤、同病相憐む。)玄沙云く、「須らく是れ稜兄にして始めて得べし。然も此の如くなりと雖も、我は卽ち不恁麼。」(野狐精の見解を作すことを免れず、是れ什麼の消息ぞ、毒氣人を傷る。)

【本則】　東嶺禪師云く、二十二則、雲門宗は、もと、馬大師に出で、雪峰玄沙の間に盛大なることを明す、是を以て之を考ふるに、五家皆全く雲門林才の宗を備ふるか、曹洞の五位、兼中至の如き、雲門林才の旨に

僧云く、「和尚作麼生。」（也た好く這の老漢を拶着す。）玄沙云く、「南山を用ひて什麼をか作さん。」（釣魚船に上る謝三郎、只だ這の野狐精、些子に較れり。喪身失命するも也た知らず。）雲門拄杖を以て雪峯の面前に擬向して、怕る〻勢を作す。（他を怕れて什麼か作ん、一子親しく得たり、一等に是れ精魂を弄す、諸人試みに辨じて看よ。）

【評唱】 儞若し平展せば、平展するに一任す、儞若し打破せば、打破するに一任す。雪峯は巖頭・欽山と同行なり、凡そ三たび投子に到り、九たび洞山に上る、後德山に參じて、方に漆桶を打破す。一日巖頭を率ゐて欽山を訪はんとす、鵞山店上に至つて雪に阻てらる。巖頭毎日只だ是れ打睡す、雪峯は一向に坐禪す。巖頭喝して云く、❶「噇眠し去れ。毎日床上に、恰も七村裏の土地に似て相似たり。佗時後日、人家の男女を魔魅し去ることあらん。」峰自ら點胷して云く、「某甲這裏未穩在、敢て自ら瞞せず。」頭云く、「我れ將に謂へり儞已後、孤峯頂上に向つて、草庵を❷盤結して、大敎を❸播揚せん」と。猶ほ這箇の語話を作す、峯云く、「某甲實に未穩在。」頭云く、「儞若し實に此の如くならば、儞が見處に據つて、一一に通じ來れ、是處は我れ儞が與に證明し、不是處は儞が與に❹剗却

❶噇は玉篇に喫の貌。增一阿含經に云く、「世尊阿那律に告げて言く、汝寢寐す可し、然る所以は、一切の諸法、食に由つて存す、食せざれば存せず、眼は眠を以て食と爲す云云。」
❷盤曲結搆。
❸播布揚揚。
❹剗は廣韻「に削なり。」

參ぜざれば、全く辨了し難し、況んや兼中到洞上究竟の位に於てをや。又潙仰宗は百丈獨坐大雄峯の一機を離れず、法眼は普利全胝の旨、もと、玄沙、地藏の爲人方便の中より出づ、畢竟雲門林才に歸す、是れが根基と爲る故なり。

❶瞳は玉篇に喫の貌。增一阿含經に云く、「世尊阿那律に告げて言く、汝寢寐す可し、然る所以は、一切の諸法、食に由つて存す、食せざれば存せず、眼は眠を以て食と爲す云云。」

せん。」峯遂に擧す、「鹽官の上堂に色空の義を擧するを見て、箇の入處を得たり」と。頭曰く、「此去つて三十年、切に忌む擧著することを。」峯又擧す、「❺洞山過水の頌を見て、箇の入處を得たり」と。頭云く、「若し與麼ならば、自救不了。」後德山に到つて問ふ、「從上宗乘中の事、學人還つて分有りや也た無しや。」山打つこと一棒して、「什麼と道ふぞ」と。我れ當時桶底の脫するが如くに相似たり。頭遂に喝して云く、「儞道ふことを聞かずや、門より入る者は、是れ家珍にあらず」と。峯云く、「他後如何してか卽ち是ならん。」頭云く、「他日若し大敎を播揚せんと欲せば、一一自己の胷襟より流出し將ち來つて、我が與に蓋天蓋地し去れ。」峯言下に於て大悟す。便ち禮拜し、起き來つて連聲に叫んで云く、「今日始めて是れ鵞山成道、今日始めて是れ鵞山成道」と。後❻閩中に回つて、❼象骨山に住す、自ら貽して頌を作つて云く、「人生❽倏忽たり暫く❾須臾、浮世那ぞ能く久しく居ることを得ん。❿嶺を出でて纔かに三十二に登とす、閩に入つて早く是れ四旬餘。他の非頻頻に擧することを用ひざれ、己が過應に須らく⓫旋旋に除くべし。⓬滿朝朱紫の貴きに報じ奉る。閻王は怕れず金魚を佩ぶることを。」凡そ上堂、衆に示して云く、「一一蓋天蓋地、更に玄と說き妙と說かず、亦心と說き性と說かず、⓭突然として獨露す。

❺傳燈十五洞山の章に云く、後因に水を過ぎ影を覩、大に前旨を悟る、因つて一偈有り、曰く、「切に忌む他に從ひ覓むることを、迢々として我れと疎なり、我れ今獨り自ら往く處々渠れに逢ふことを得たり渠れ今正に是れ我れ、我れ今是れ渠れにあらず、應に須らく恁麼に會して、方に如々に契ふことを得べし。」
❻閩中は福州なり、便ち雪峯の鄉國。
❼鄉云く、象骨は卽ち雪峯の別山なり、形の象骨に似たるを

㊂大火聚の如し、之に近けば則ち面門を燎却す。太阿の劒に似たり、之を擬すれば則ち喪身失命す。若し也た佇思停機せば、則ち沒交渉。」只だ百丈、黃檗に問ふが如きんば、「甚の處よりか去來する。」檗云く、「大雄山下菌を採つて去來す。」丈云く、「還つて大蟲を見る麼。」檗便ち虎聲を作す、丈便ち斧を拈じて斫る勢を作す。檗遂に百丈を打つこと一摑、丈吟吟として笑ふ。便ち歸つて陞座、衆に謂つて云く、「大雄山に一の大蟲有り、汝等諸人、切に須らく好く看るべし。老僧今日、親しく一口に遣ふ」と。趙州凡そ僧を見ては便ち問ふ、「曾て此間に到る麼。」云く、「曾て到る、」或は云く、「曾て到らず」と。州總に云く、「喫茶去」と。院主云く、「和尙尋常僧に問ふ、曾て到ると曾て到らざると、總に道ふ喫茶去と、意旨如何。」州云く、「院主。」主應諾す。州云く、「喫茶去」と。紫胡門下に一牌を立つ、牌上に書して云く、「㊁紫胡に一狗有り、上人の頭を取り、中人の腰を取り、下人の脚を取る、擬議すれば則ち喪身失命す」と。或は新到纔かに相看すれば、師便ち喝して云く、「狗を看よ」と、僧纔かに首を回せば、師便ち方丈に歸る。正に雪峯の「南山に一條の㊃鼈鼻蛇有り、汝等諸人切に須らく好く看るべし」と道ふが如きんば、正當恁麼の時、倆作麼生か祇對せん。前蹤を蹈まず、試みに請ふ道へ看ん。這裏に到つて、也た須らく是れ格外の句を會して始めて得べし。一切の公案語言、擧し得將ち來らば、便ち落處を知らん、看よ他の恁麼に衆に示すことを。且く倆が與に行と說き解と說かず、還つて情識を將つて測度し得ん麼。是れ他家の兒孫、自然に道ひ得て恰好なり。所以に古人道ふ、「㊄言を承けては須らく宗を會すべし、自ら規矩を立すること勿れ、言は須らく格外有るべく、句は須らく透關を要すべし。若し是れ語窠窟を離れざれば、毒海の中に墮在せん」と。雪峯恁麼に衆に示す、謂つべし㊅無味の談、人口を塞斷すと。長慶・玄沙、皆是れ他家屋裏の人にして、方に他の恁麼の說話を會す。只だ雪峯の南山に一條の鼈鼻蛇有りと道ふが如きんば、諸人還つて落處を知る麼、這裏に到つて、須らく是れ通方の眼を具して始めて得べし。見すや、㊆眞淨頌有り、云く、「鼓を打ち琵琶を弄す。相逢ふ㊇兩會家、雲門能く唱和す、長慶邪に隨ふことを解す。古曲音韻無し、南山の鼈鼻蛇、何人か此の意を知らん、端的是れ玄沙。」只だ長慶恁麼に祇對するが如きんば、且く道へ、意作麼生。這裏に到つて、擊石火の如く、閃電光に似て、方に構得す可し。若し纖毫も去り盡さざること有らば、便ち他底に構ること得じ、

㊀候忽は廣韻に、犬卽ち走るなり。「たちまち」と訓す。
㊁名義集に云く、梵語驃賖羅毘曇、翻して須臾と爲す、一日一夜、共に三十須臾有り。
㊂師飛猿嶺を出づる時、宣宗の大中七年癸酉に當る、年三十二歲なり。
㊃旋々は漸々の義なり。
㊄朝庭に在りて、朱紫の官衣を被する貴人なり。
㊅唐書に曰く、高宗、五品已上に給ひ、身に金魚袋を隨へ、以て召命の詐を防ぐ云々。
㊆突は說文に、犬の穴中より暫く出づるなり、犬の穴中に在るに从ふ。徐曰く、犬穴中に匿れて人を伺ふ、人之れを竄はざるに突然として出づるなり。
㊇以下二句大品般若の語なり。會元第四に衢州子湖岩の利蹤禪師は、法を南泉に嗣ぐ。紫子に作る。
㊈梭伽云く、鼈鼻蛇は蛇の名なり、其の鼻鼈の如し、此の蛇最も毒なり、人を傷つくる、藥の醫すべき無し。
㊉此の二句は石頭參同契の語なり。
㊊此の句、洞山初の語。
㊋會元第十七に、寶峯克文雲庵眞淨禪師は、黃龍の南に嗣ぐ。
㊌兩會家は二人の名人なり、能書を會寫と云ひ、琴の上手を會彈琴と云ふ。
㊍許は語助なり、許多、許久等の許の字に同じ。

❺可惜許。人多く長慶の言下に向つて、情解を生じて道ふ、「堂中幾かに聞處有らば、便ち是れ喪身失命せん」と。有る者は道ふ、「元一星事無し、平白地上に這般の話を說いて人を疑はしむ、人他の南山に一條の鼈鼻蛇有りと道ふを聞いて、儞便ち疑著す」と。若し恁麼に會せば、且得沒交涉、只だ他の言語の上に去つて活計を作す。既に恁麼に會せずんば、又作麼生か會せん。後來僧有り、玄沙に擧示す、玄沙云く、「須らく是れ稜兄にして始めて得べし。然も是の如くなりと雖も、我れは卽ち不恁麼」僧云く、「和尙又作麼生。」沙云く、「南山を用て什麼か作ん」と。但だ看よ玄沙の語中に便ち出身の處有ることを。便ち云く、「南山を用て什麼か作ん」と。若し是れ玄沙にあらずんば、也た大いに酬對し難からん。只だ他恁麼に南山に一條の鼈鼻蛇有りと道ふが如きんば、且く道へ、什麼の處にか在る。這裏に到つて、須らく是れ向上の人にして、方に恁麼の說話を會すべし。古人道ふ、「釣魚船上の㊃謝三郎、南山の鼈鼻蛇を愛せず」と。卻つて雲門に到つて拄杖を以て雪峯の面前に❼擲向して怕るる勢を作す。雲門蛇を弄するの手腳有つて、鋒鋩を犯さず、明頭も也た打著、暗頭も也た打著、他尋常人の爲にすること、太阿の劒を舞すが如くに相似たり。有る時は飛んで人の眉毛眼睫の上に向ひ、有る時は飛んで三千里外に向つて人の頭を取る。雲門拄杖を擲つて怕るる勢を作す。且く是れ精魂を弄するにあらずや、他也た是れ喪身失命すること莫し麼。作家の宗師、終に一言一句の上に去つて活計を

㊃玄沙因に僧問ふ、「如何なるか是れ親切底の事、」沙曰く、「我れは是れ謝三郎。」

❼擲は擲なり。

作さず、雪竇只だ雲門の雪峯の意に契證得することを愛するが爲に、所以に頌出す。

【頌】象骨巖高うして人到らず。(千箇萬箇摸索不着、公が境界に非ず。)到る者は須らく是れ蛇を弄するの手なるべし。(是れ精、精を識り、是れ賊、賊を識る、群を成し隊を作し什麼か作ん。也た須く是れ同火にして始めて得べし。)稜師備師奈何ともせず。(一狀に領過す、一着を放過す。)喪身失命多少か有る。(罪重ねて科せず、平人を帶累す。)韶陽知つて、(猶ほ些子に較れり、這の老漢只だ一隻眼を具す、老漢伎倆を作すことを免れず。)重ねて草を撥ふ。(落草の漢什麼の用處か有らん、果然として什麼の處にか在る、便ち打つ。)南北東西討ぬるに處無し。(有りや有りや、闍黎眼瞎す。)忽然として突出す拄杖頭。(看よ高く眼を着けよ、便ち打たん。)雪峯に拋對して大いに口を張る。(自作自受、千箇萬箇を呑卻するも什麼の事をか濟さん、天下の人摸索不着。)大いに口を張る閃電に同じ。(兩重の公案、果然、賴に末後の句有り。)眉毛を剔起すれば還つて見えず。(蹉過了也、五湖四海恁麼の人を覓む也た得難し、如今什麼の處にか在る。)如今藏して乳峯の前に在り。(什麼の處に向つてか去る、大小の雪竇も也た這の去就を作す、山僧今日也た一口に遭ふ。)來る者は一一方便を看よ。(瞎、腳跟下に向つて看ること莫れ、上座が腳跟下を看取せよ、一箭を着け了れり。)師高聲に喝して云く、「腳下を看よ。」(賊過ぎて後弓を張る、第二頭第三頭、重言吃に當らず。)

【評唱】象骨巖高うして人到らず、到る者は須らく是れ蛇を弄するの手なるべし。雪峯山下に象骨巖

有り、雪峯機錄高峻にして、人の他の處に到ること罕なり。雪竇は是れ他の屋裏の人、毛羽相似て、㊐同聲相應じ、同氣相求む。也た須らく是れ通方の作者にして、共に相證明すべし。只だ這の鼈鼻蛇、也た妨げず弄し難し、須らく是れ弄することを解して始めて得べし。若し弄することを解せずんば、反つて蛇に傷られん。五祖先師道く、「此の鼈鼻蛇、須らく是れ手脚を傷犯せざる底の機有つて、他の㋑七寸上に於て、一揑に揑住して、便ち老僧と手を把つて共に行く。長慶・玄沙、這般の手脚有り。雪竇道く、「稜師備師奈何ともせず」と。人多く道ふ、「長慶・玄沙奈何ともせず、所以に雪竇獨り雲門を美む」と、且得沒交涉。殊に知らず三人の中、機得失無く、只だ是れ親疎有ることを。且く諸人に問ふ、什麼の處か是れ稜師備師奈何ともせざる處、喪身失命多少か有る。此は長慶の今日堂中、大いに人有つて喪身失命すと道ふことを頌す。這裏に到つて須らく是れ蛇を弄ずるの手を以て、子細にして始めて得べし。雪竇他の雲門より出づ、所以に一時に撥卻して、獨り雲門一箇を存して道く、「韶陽知つて重ねて草を撥ふ」と。蓋し雲門他の雪峯の南山に一條の鼈鼻蛇有りと道ふ落處を知るが爲に、所以に重ねて草を撥ふと、雪竇頌して這裏に到つて、更に妙處有り、云く、「南北東西討ぬるに處無し」と。彌道へ、「什麼の處にか在る、忽然として突出す拄杖頭」と。元來只だ這裏に在り、彌便ち拄杖頭上に向つて活計を作し去る可らず。雲門拄杖を以て、雪峯の面前に擬向して怕るる勢を作す、雲門便ち拄杖を以て鼈鼻蛇と作して用ふ。有る時は卻つて云く、「拄杖子化して龍と爲り、乾坤を呑卻し了れり。山河大地甚の處よりか得來る」と。只だ是の一條の拄杖子、有る時は龍と作り、有る時は蛇と作る。什麼と爲てか此の如くなる、這裏に到つて方に知る、㋒古人の心は萬境に隨つて轉ず、轉處實に能く幽なりと道ふことを。頌して道く、「雪峯に拋對して大いに口を張る、大いに口を張る兮閃電に同じ」と。雪竇餘才有り、雲門の毒蛇を拈出して云く、「只だ這の大いに口を張る兮閃電に同じく相似たり、儞若し擬議せば、則ち喪身失命せん、眉毛を㋓剔起すれば還つて見えず、什麼の處に向つてか去る。」雪竇頌し了る、須らく活處に去つて人の爲にすべし。雪峯の蛇を將て自ら拈じ自ら弄す。妨げず殺活時に臨むことを、見んと要す麼。云く、「如今藏して乳峯の前に在り」と。乳峯は乃ち雪竇山の名なり、㋔雪竇頌有り云く、「石牕四に顯みれば滄溟窄し、㋕寥々として白雲の白きことを許さず。」長慶・玄沙・雲門、弄得すと雖も了に見ず、卻つて云く、「如今藏れて乳峯の前に在り、來る者は一一に方便を看よ」と。雪竇猶ほ廉纖に涉ること在り、便ち用ひよと言げすして、卻つて高聲に喝して云く、「腳下を看よ」と。從上來多少の人有つてか拈弄する、且く道へ、還つて曾て人を傷著するか、曾て人を傷著せざるか。師便ち打す。

㋑易乾の九五に曰く、「飛龍天に在り、大人を見るに利しと、何の謂ぞや、」子曰く、「同聲相應じ、同氣相求む、水は濕に流れ、火は燥に就き、雲は龍に從ひ、風は虎に從ふ云云。」

㋒楞伽云く、「凡そ蛇は頭より頸に至る七寸、是れ其の至命の處なり云云。」

㋓四天第二十三祖摩拏羅尊者付法の偈なり。

㋔剔は蠟燭の心を切るを云ふ、「ちよいときる、目を張れば、必ず眉がちよいとあがる」なり。

㋕祖英集に、昭敏首座を送る頌なり。

㋖寥々は曠遠の貌。

第二十三則

垂示に云く、玉は火を將て試み、金は石を將て試み、劍は毛を將て試み、水は杖を將て試む。衲僧門下に至つては、一言一句、一機一境、一出一入、一挨一拶、深淺を見んことを要し、向背を見んことを要す。且く道へ、什麼を將てか試みん、請ふ擧す看よ。

【本則】擧す、保福長慶遊山する次。(這の兩箇落草の漢。)福、手を以て指して云く、「只這裏便ち是れ妙峯頂。」(平地上に骨堆を起す、切に忌む道着することを。地を掘りて深く埋めん。)慶云く、「是は則ち是、可惜許。」(若し是れ鐵眼銅睛にあらずんば幾んど惑了せられん、同病相憐む、兩箇一坑に埋卻せん。)雪竇著語して云く、「今日這の漢と共に遊山して、箇の什麼をか圖る。」(妨げず人の斤兩を減することを。猶ほ些子に較れり、傍人劍を按ず。)復た云く、「百千後無しとは道はず、只是れ少し。」(少賣弄、也た是れ雲居の羅漢。)後に鏡淸に擧似す。(好有り惡有り。)淸云く、「若し是れ孫公にあらずんば、便ち髑髏野に遍きことを見ん。」(同道の者方に知る、大地茫々として人を愁殺す、奴は婢を見て慇懃、設使ひ臨濟德山出で來るとも、也た須らく棒を喫すべし。)

【本則】東嶺禪師曰く、二十三則、保福、長慶、鏡淸の三人、幾旨を商略し、以て我が宗五家、別に生涯有るの大事を立つることを明す。

【評唱】保福長慶鏡淸、總て雪峯に承嗣す、他の三人同得同證、同見同聞、同拈同用、一出一入、遞に相挨拶す。蓋し他は是れ同條に生ずる底の人なるが爲に、擧著すれば便ち落處を知る、雪峯の會裏に在つて、居常問答するは、只だ是れ他の三人なり。古人行住坐臥、此の道を以て念と爲す、所以に擧著すれば便ち落處を知る。一日遊山する次、保福手を以て指して云く、「只だ這裏便ち是れ妙峯頂」と。如今禪和子、恁麼に問著せば、便ち只だ❶口匾擔に似たり、賴に長慶に問著するに値ふ。偏道へ、保福恁麼に道ふ、箇の什麼をか圖る、古人此の如く、他の有眼無眼を驗せんと要す、是れ他の家裏の人、自然に他の落處を知つて、便ち他に對して道ふ、「是は則ち是、可惜許」と。且く道へ、長慶恁麼に道ふ、「意志如何。」一向に恁麼にし去る可らず、似たることは則ち似たり、等閑に一星事無きこと有ること罕なり、賴に是れ長慶他を識破す。雪竇著語して云く、「今日這の漢と共に遊山して、箇の什麼をか圖る。」且く道へ、什麼の處にか落在す。復云く、「百千年後無しとは道はず、只だ是れ少し。」雪竇點胷を解す、正に黃檗の禪無しとは道はず、只だ是れ師無しと道ふに似たり。雪竇恁麼に道ふ、也た妨げず險峻なることを。若し是れ同聲相應するにあらずんば、爭か此の如く孤危奇怪なることを得ん、此れ之を著語と謂ふ。兩邊に落在す、兩邊に落在すと雖も、卻つて兩邊に住せず。後鏡淸に擧似す、淸云く、「若し是れ孫公にあらずんば、便ち髑髏野に偏きことを見ん」と、孫公は乃ち長慶の俗姓なり。

❶匾は「ひらたき」を云ふ、匾擔は「になひ棒」なり、「ひらたみありて、中しわり、への字の形」故に言いはぬくちもとに譬へたるなり。

見ずや僧趙州に問ふ、「如何なるか是れ妙峯孤頂。」州云く、「老僧儞に這の話を答へず。」僧云く、「什麼と爲てか這の話を答へざる。」州云く、「我れ若し儞に答へば、恐らくは平地上に落在せん。」㊐敎中に說く、妙峯孤頂の德雲比丘、從來山を下らず、善財去つて參ず、七日までも逢はず、一日卻つて別峰に在つて相見す。見え了るに及んで、卻つて他の與に一念三世、一切諸佛、智慧光明普見の法門を說く。德雲既に山を下らず、什麼に因つてか、卻つて別峰に在つて相見す。若し他山を下ると道はば、敎中に道ふ、德雲比丘、從來曾て山を下らず、常に妙㊋峯孤頂に在りと、這裏に到つて、德雲と善財と的的那裏にか在る、自後㊋李長者、葛藤を打し、頌し得て好し。道く、「妙峯孤頂は、是れ一味平等の法門、一一皆眞、一一皆全、無得無失、無是無非の處に向つて獨露す、所以に善財見ず」と。稱性の處に到つて、眼自ら見ず、耳自ら聞かず、指自ら觸れざるが如く、刀自ら割かず、火自ら燒かず、水自ら洗はざるが如し。這裏に到つて、敎中大いに老婆相爲にする處有り。所以に一線道を放ち、第二義門に於て、賓を立て主を立て、機境を立て、問答を立つ。所以に道ふ、「㊌諸佛出世せず、亦涅槃有ること爲し、方便に衆生を度す、故に斯の如きの事を現ず」と。且く道へ、畢竟作麼生か、鏡淸雪竇恁麼に道ふことを免れ得去らん。當時拍拍相應ずること能はず、所以に盡大地の人髑髏野に徧し、鏡淸恁麼に證し將ち來り、那兩個恁麼に用ひ將ち來る。雪竇後面に頌出して更に顯煥たり。頌に云く、

【頌】妙峯孤頂草離離。(身に和して沒卻す、腳下已に深きこと數丈なり。)拈得分明誰にか付與せん。(用て什麼か作ん、大地人の知る殺し、乾屎橛、何の用を作すにか堪へん、鼻孔を拈得し口を失卻す。)是れ孫公の端的を辨ずるにあらずんば、(錯、箭を看よ、賊を着け了るも也た知らず。)髑髏地に著く幾人か知る。(更に再活せず、麻の如く粟に似たり、闍黎鼻孔を拈得し口を失卻す。)

【評唱】妙峯孤頂草離離、草裏に輥せば什麼の了期か有らん。拈得分明誰にか付與せんと。什麼の處か是れ分明の處、保福の只だ這裏便ち是れ妙峯頂と道ふことを頌す。是れ孫公端的を辨ずるにあらずんば、孫公什麼の道理を見てか便ち云ふ、「是は則ち是、可惜許。」只だ「髑髏地に著く幾人か知らん」と云ふが如きんば、汝等諸人還つて知る麼。瞎。

第二十四則

垂示に云く、高高たる峯頂に立つ、魔外も能く知ること莫し。深深たる海底に行く、佛眼も覷れども見えず。直饒眼流星に似、機掣電の如くなるも、未だ免れず靈龜尾を曳くことを。這裡に到つて、合に作麼生。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、劉鐵磨潙山に到る。(妨げず淒泊し難し、這の老婆本分を守らず。)山云く、「老牸牛、汝

㊐華嚴入法界品の說なり。
㊋李通玄、秦柏大士と號す、華嚴合論四十卷を造る、傳は通載十三卷にあり。
㊌華嚴經兜率天宮菩薩雲集讚佛品第十に、金剛幢菩薩偈を以て頌して曰く、「如來出世せず、亦涅槃有ること無し、本願力を以て自在の法を顯現す。」

來也。」(點、探竿影草、什麼の處に向つてか蹤訛を見る。)磨云く、「來日臺山に大會齋あり、和尚還つて去るや。」(箭虛に發せず、大唐に鼓を打てば新羅に舞ふ、放去は太だ速かに、收來は太だ遲し。)溈山身を放つて臥す。(中れり、儞什麼の處に向つてか溈山を見ん、誰か知る遠き煙浪に別に好思量有ることを。)磨便ち出で去る。(過也、機を見て作す。)

【評唱】❶劉鐵磨は(尼なり)擊石火の如く、閃電光に似たり、擬議すれば則ち喪身失命す。禪道若し緊要の處に到らば、那裏にか許多の事有らん。他の作家相見、墻を隔てて角を見て、便ち是れ牛なることを知り、山を隔てて煙を見て、便ち是れ火なることを知るが如し。拶著すれば便ち動じ、捺著すれば便ち轉す。溈山道く、「老僧百年後、山下の檀越家に向つて、一頭の水牯牛と作つて云はん、溈山僧某甲と。」且く正當恁麼の時、喚んで溈山、僧と作さんか卽ち是、喚んで水牯牛と作さんか卽ち是、如今の人問著すれば、❷管取して分疎不下。劉鐵磨は久參にして、機鋒峭峻なり、人號して劉鐵磨と爲す、溈山を去ること十里にして庵を卓つ。一日去つて溈山を訪ふ、山來るを見て便ち云く、「老牸牛、汝來也。」磨云く、「來日臺山に大會齋あり、和尚還つて去る麼。」溈山身を放つて便ち臥す、磨便ち出で去る。儞看よ、

【本則】東嶺禪師云く、二十四則、溈仰の密作用、本、百丈獨參大雄峯の大機用に在りて、彼此交徹し、最も須らく參取すべきを明すのみ。

❶劉鐵磨は、俗姓劉氏の婦、出家して尼となり、潭州溈山の近傍に草庵を結んで之に居る。

❷管取は「うけあふ」と譯す、分疎は輟耕錄に曰く、「人の自ら其の事の是非を辨白する者を俗に分疎と曰ふ、」分疎不下は「いひほどきえず」と譯す。

他一に說話の如くに相似たり、且つ是れ禪にあらず、又是れ道にあらず、喚んで無事の會と作し得ん麼。溈山臺山を去ること自ら數千里を隔つ、劉鐵磨什麼に因つてか卻つて溈山をして去つて齋せしめん。且く道へ、意旨如何、這の老婆他の溈山の說話を會して、絲來線去、一放一收、互に相酬唱す。兩鏡相照して、影像の觀る可き無きが如し、機機相副ひ、句句相投す。如今の人❸三搭すれども頭を廻さず、這の老婆一點も也た他を瞞ずること得ず。這箇卻つて是れ世諦の情見にあらず、明鏡の臺に當り、明珠の掌に在るが如し。胡來れば胡現じ、漢來れば漢現ず、是れ他向上の事有るを知る。所以に此の如し、如今只管無事の會を做す。五祖の演和尚道く、「有事を將て無事と爲すこと莫れ、往往に事は無事より生ず」と。儞若し參得透し去らば、他の恁麼に尋常人の說話の如く一般なることを見ん、多く言語に隔礙せらる、所以に會せず、唯だ是れ知音にして、方に他底を會せん。只だ乾峯の如きんば衆に示して云く、「一を擧して二を擧することを得ず、一著を放過すれば、第二に落在す。」雲門衆を出でて云く、「昨日一僧有り、天台より來つて、卻つて南岳に往き去る。」乾峯云く、「典座今日❹普請することを得ざれ」と。看よ他の兩人、放つときは則ち雙放、收むるときは則ち雙收、溈仰下に之を墮致と謂ふ。風鹿草動ずるにも、悉く❺端

❸搭は事苑類書に、「打つなり」と注す、韵府に、木手搭とあれば、手にて打つことなり、又、衣類を衣桁に「うちかける」ことを搭とあれば、其の意を含んで、後から人の肩へ手を打ち掛けて、たたくなり。「氣のはたらきのない、にぶき人」を云ふ。

❹大鑒政信寺の如山主講普說、乾峰の話頭を擧し擧りて云く「舊時叢林の中、日日普請す、今時の禪和家、十指水に沾さず、百事懶にせず、好衣服を著て、人天の供養を受けんこ

倪を究む、亦之を隔身の句と謂ふ。意通じて語隔つ、這裏に到つて、須らく是れ左撥右轉して、方に是れ作家なるべし。

【頌】　曾て鐵馬に騎つて重城に入る。(戰に慣ふ作家、塞外は將軍、七事身に隨ふ。)勅下つて傳へ聞く六國の淸きことを。(狗赦書を銜む、寰中は天子、爭奈せん海晏河淸なることを。)猶ほ金鞭を握つて歸客に問ふ。(是れ什麼の消息ぞ、一條の拄杖兩人扶かる、相招いで同じく往き、又同じく來る。)夜深けて誰と共にか御街に行かん。(君は瀟湘に向ひ我は秦に向ふ、且く道へ、行いて什麼と作ん。)

【評唱】　雪竇の頌、諸方以て極則と爲す、一百頌の中、這の頌最も理路を具す。中に就いて極妙、貼體分明に頌出す。曾て鐵馬に騎つて重城に入るとは、劉鐵磨恁麼に來るを頌す。勅下つて傳へ聞く六國の淸きことをとは、潙山の恁麼に問ふことを頌す。猶ほ金鞭を握つて歸客に問ふとは、磨の來日臺山に大會齋あり、和尙還つて去る麼と云ふを頌す。夜深うして誰と共にか御街に行かんとは、潙山の身を放つて便ち臥し、磨便ち出で去るを頌す。雪竇這般の才調有つて、急切の處をば急切の處に向つて頌し、緩緩の處をば緩緩の處に向つて頌す。風穴亦曾て拈す、雪竇の意に同じ、此の頌諸方皆之を美む。高高たる峯頂に立つて、魔外も能く知ること莫く、深深たる海底に行いて、佛眼も覷れども

とを要して、慚愧を生ぜざるに似ず、舊時這般の衲子無し、人每に一柄の劍刀、一柄の鋤頭有り、之を一日作さゞれば一日食ばずと謂ふ云々。」

㊟　端倪は本、莊子に出づ、類書纂要に、「端倪は猶ほ端緒のごとし」とあり、「はしくれを見て取りて、全體を知る」の義なり。

見えず。看よ他の一箇は身を放つて臥し、一箇は便ち出で去る。若し更に周遮せば、一時に路を求むるとも見えず、雪竇の頌意最も好し。是れ曾て鐵馬に騎つて重城に入る、若し是れ同得同證にあらずんば、焉んぞ能く恁麼ならん。且く道へ、箇の什麼の意をか得たる、見ずや、僧風穴に問ふ、「潙山道く、『老牸牛、汝來也』と、意旨如何。」穴云く、「只だ劉鐵磨の來日臺山に大會齋あり、和尙還つて去る麼と道ふが如きんば、意旨如何。」穴云く、「碧波心裏玉兎驚く。」僧云く、「潙山便ち臥す勢を作す、意旨如何。」穴云く、「老倒疎慵無事の日、閑眠高臥青山に對す。」此の意も亦雪竇と同じ。

第二十五則

垂示に云く、機、位を離れずんば、毒海に墮在す。語、群を驚さずんば、流俗に陷る。忽ち若し擊石火裏に縞素を別ち、閃電光中に殺活を辨せば、以て十方を坐斷して、壁立千仞なる可し。還つて恁麼の時節有ることを知るや。試みに擧す看よ。

【本則】　擧す、蓮華峰庵主、拄杖を拈じて衆に示して云く、(看よ頂門上に一隻眼を具す、也た是れ時の人の窠窟。)「古人這裡に到つて、什麼としてか肯て住せざる。」(虛空裏に向つて釘橛す可らず、權に化城を立す。)

【本則】　東嶺禪師曰く、二十五則蓮花峰庵主純ら雲門の機鋒を須ひ隱々として兼れて、法眼宗の語要に似たることを明す。

衆無語。(千箇萬箇麻の如く粟に似たり、卻つて些子に較れり、可惜許。一棚の俊鶻)自ら代つて云く、「他の途路に力を得ざるが爲めなり。」(若し途中に向つて辨せば猶ほ半月程を爭ふ、設使ひ力を得るも什麼を作すにか堪へん。豈に全く一箇無かる可けんや。)復た云く、「畢竟如何。」(千人萬人只だ箇の裏に向つて坐卻す、千人萬人の中一箇兩箇會せん。)又自ら代つて云く、「椰榛橫に擔うて人を顧みず。直に千峰萬峰に入り去る。」(也た好し三十棒を與ふるに、只だ他の擔板なるが爲なり。腦後に腮を見ば與に往來すること莫れ。)

【評唱】諸人還つて蓮花峰庵主を裁辨得する麼、腳跟也た未だ地に點ぜざること在り。㊀國初の時、天台の蓮花峰に在つて庵を卓つ、古人既に得道の後、茅茨石室の中、折腳鐺兒內に、野菜根を煮て喫して日を過す、且つ名利を求めず、放曠として緣に隨ふ。一轉語を垂れて、且つ佛祖の恩を報じ、佛心印を傳へんことを要す。纔に僧の來るを見れば、便ち拄杖を拈じて云く、「古人這裏に到つて、什麼と爲てか肯て住らざる」と。前後二十餘年、終に一人も答へ得る無し。只だ這の一問也た權有り實有り、照有り用有り、若し也た他の㊁圈纘を知らば、一揑を消せず。儞且く道へ、什麼に因つてか、二十年此の如く問ふ。既に是れ宗師の爲す所、何が故に只だ一槪を守る。若し箇裏に向つて見得せば、自然に情塵上に向つて走らず。凡そ二十年中、多少の人有つて、他の與に平展し下語して見解を呈し、伎倆を做し盡す。

㊀國初は、趙宋の太宗、初めて天下を統ぶるの時を云ふ。
㊁圈纘は「わなゝてくだ」と譯す。

設ひ箇の道ひ得る有るも、也た他の極則の處に到らず、況んや此の事は言句の中に在らずと雖も、言句に非ざれば卽ち辨ずること能はず。道ふことを見ずや、㊂「道本言無し、言に因つて道を顯す」と。所以に人を驗する端的の處、口を下せば便ち知音、古人一言半句を垂るること、亦他無し、只だ儞が有ることを知るか、有ることを知らざるかを見んと要す。他人の會せざるを見て、所以に自ら代つて云く、「他の途路に力を得ざるが爲なり」と。看よ他道ひ得て自然に理に契ひ機に契ふことを、幾か曾て宗旨を失卻せん。㊃古人云く、「言を承けては須らく宗を會すべし、自ら規矩を立つること勿れ、如今の人只管に撞將し去つて便ち了す、得ることは則ち得たり、爭奈せん顢頇儱侗なることを。若し作家の面前に到つて、三要の語を將て、空に印し、泥に印し、水に印して他を驗すれば、便ち見ん方木圓孔に逗して、下落の處無きことを。這裏に到つて、一箇の同得同證を討ぬるに、時に臨んで什麼の處に向つてか求めん。若し是れ有ることを知る底の人ならば、懷を開いて箇の消息を通せん、何の不可か有らん。若し人に遇はずんば、且く㊄卷いて之を懷にせん。且く彌諸人に問ふ、「拄杖子は是れ衲僧尋常用ふる底なり、什麼に因つてか卻つて道ふ途路に力を得ず」と。古人此に到つて肯て住らず、其の實は金屑

㊂華嚴の大疏の語なり。
㊃石頭の語なり。
㊄論語衞の靈公の篇に、子曰く、「君子なるかな蘧伯玉、邦道有れば則ち仕へ、邦道無ければ則ち卷いて之を懷にす可し。」
㊅會元第五に云く、「潭州善道の章師沙汰に値うて乃ち行者と作りて石室に居る云々。」
㊆沙汰とは「石沙をゆりて其中より金を撰り分ける」ことなり、會昌には、善惡に掏ばらす、僧數を定限し、其の餘は盡く還俗させたるなり、此れを沙汰に遭ふと云ふ。

貴しと雖も、眼に落ちて翳と成る。㋕石室の善道和尚、㋖當時沙汰に遭ふ、常に拄杖を以て衆に示して云く、「過去の諸佛も也た恁麼、現前の諸佛も也た恁麼」と。雪峯一日僧堂前に拄杖を拈じて衆に示して云く、「這箇只だ中下根の人の爲にす。」時に僧有り、出でて問うて云く、「忽ち上上の人の來るに遇はん時如何。」峯拄杖を拈じて便ち去る。雲門云く、「我は卽ち雪峰の打破して狼藉なるに似ず。」僧問ふ、「未審し和尙如何。」雲門便ち打つ。大凡そ參問は、也た許多の事無し、儞が外山河大地有ることを見、內見聞覺知有ることを見、上に諸佛の求む可き有ることを見、下に衆生の度す可き有ることを見るが爲なり。直に須らく一時に吐卻して、然る後十二時中、行住坐臥、打成一片なるべし。一毛頭上に在りと雖も、寬きこと大千沙界の若く、鑊湯爐炭の中に居ると雖も、安樂國土に在るが如く、七珍八寶の中に居ると雖も、茅茨蓬蒿の下に在るが如し。這般の事若し是れ通方の作者ならば、古人の實處に到つて、自然に力を費さず、他人の他底を㋜構得すること無きを見て、復た自ら徵めて云く、「畢竟如何、又何奈ともすること得ず。」自ら云く、「柳棟橫に擔うて人を顧みず、直に千峰萬峰に入り去る。」這箇の意又作麼生、且く道へ、什麼の處を指してか㋙地頭と爲さん。妨げず句中に眼有り、言外に意有つて、自ら起き自ら倒れ、自ら放ち自ら收むることを。豈に見ずや、嚴陽尊者、路に一僧に逢ふ、拄杖を拈起して云く、「是れ什麼ぞ。」僧云く、「識らず。」嚴云く、「一條の拄杖も也た識らず。」嚴復

㋜構得は、「手に入れる」と譯す。
㋙古抄に云く、極則の處、又は落處を地頭と云ふ。

た拄杖を以て、地上に劃すること一下して云く、「還つて識る麼。」僧云く、「識らず。」嚴云く、「士窟子も也た知らず。」嚴復た拄杖を以て擔うて云く、「會す麼。」僧云く、「不會。」嚴云く、「柳棟橫に擔うて人を顧みず、直に千峰萬峰に入り去る。」古人這裏に到つて、什麼と爲してか肯て住らざる。雪竇頌有り、云く、「誰か機に當る、擧するに賺らず、㋚亦還つて希なり。峭峻を摧殘し、玄微を鎖鑰す。重關曾て巨いに闢く。作者未だ歸を同じうせず。玉兎乍ち圓に乍ち缺く。金烏飛ぶに似て飛ばず。盧老は知らず何の處にか去る。白雲流水共に依依」と。什麼に因つてか山僧は道ふ、「腦後に腮を見ば與に往來すること莫れ」と。纔かに計較を作さば、便ち是れ黑山の鬼窟裏に活計を作さん。若し見得徹し、信得及せば、千人萬人、自然に羅籠すれども住らず、奈何ともすること得ず、動著搂著、自然に殺有り活有り。雪竇他の意に直に千峰萬峰に入り去ると道ふことを會して、方に始めて頌を成す。落處を知らんと要せば、雪竇の頌を看取せよ。云く、

【頌】眼裡は塵沙耳裡は土。（懞憧三百擔、鶻鶻突突什麼の限りか有らん、更に恁麼の漢有り。）千峰萬峰背て住せず。（儞什麼の處に向つてか去る、且く道へ、是れ什麼の消息ぞ。）落花流水太だ茫茫。（好箇の消息、閃電の機、徒に佇思するに勞す、左顧千生右顧萬劫。）眉毛を剔起すれば何の處にか去る。（瞬跟下更に一對の眼を贈らん、元來只だ這裏に在り、還つて庵主の瞬跟を截得するや、然も

㋚老子に、之を視れども見えざるを夷と云ひ、是を聽けども聞さざるを希と云ふ。擧すれば賺らす儼然たれども、是れを覓むれば、見聞に及ばず、亦還つて希なり、是れ不器の妙を形容せるなり、少希の意にあらず。

是の如しと雖も、也た須らく是れ這の田地に到つて始めて得べし、打つて云く、什麼と爲てか只だ這裏に在る。）

【評唱】雪竇頌し得て甚だ好し、轉身の處有つて、一隅を守らず、便ち道ふ、「眼裏の塵沙耳裏の土」と、此の一句蓮花峰庵主を頌す。衲僧家這裏に到つて、上攀仰無く、下己躬を絶す、一切時中に於て、癡の如く兀に似たり。見ずや南泉道く、「學道の人、癡鈍の如くなる者也た得難し」と。㊇禪月の詩に云く、「常に憶ふ南泉の好言語、斯の如く癡鈍なる者還つて希なり。」㊈法燈云く、「誰人か此の意を知らん、我をして南泉を憶はしむ。」南泉又云く、「七百の高僧、盡く是れ佛法を會する底の人なり。唯だ㊉盧行者のみ有つて、佛法を會せず、只だ道を會す、所以に他の衣鉢を得」と。且く道へ、佛法と道と相去ること多少ぞ。雪竇拈じて云く、「眼裏に沙を著くることを得ず、耳裏に水を著くること得ず、或は若し箇の漢有つて、信得及し、把得住して、人の瞞を受けずんば、祖佛の言敎、是れ什麼の熱碗鳴聲ぞ。便ち請ふ高く鉢囊を掛け、拄杖を拗折して、一員無事の道人なることを㊉管取せよ。」又云く、「眼裏に須彌山を著得し、耳裏に大海水を著得す。

㊇禪月詩集、山居二十首の中に「千巖萬壑路傾欹、杉檜濛々として獨り暉を掩ふ、藥を劉る童は溪蟒を穿ち去り、花を採る蜂は燒煙を冒して歸る、閑行意を放にして流水を尋れ、靜坐頭を支へて落暉に到る、長に憶ふ南泉の好言語、斯くの如き癡鈍なる者も還つて希なり。」

㊈金陵清涼泰欽法燈禪師、寒山詩に擬する有り、云く、「今古塵に隊無かるべし、分明に目前に在り、片雲脫谷に生じ、孤鶴遙天を下る、岸柳烟を含んで翠に、溪花雨を帶びて鮮なり、誰か此の意を知らん、我れをして南泉を憶はしむ。」

㊉盧行者は六祖なり。

一般の漢有つて、人の商量を受く。祖佛の言敎、龍の水を得るが如く、虎の山に靠るに似たり。卻つて須らく鉢囊を挑起し、橫に拄杖を擔うべし、亦是れ一員無事の道人なり。」復云く、「恁麼も也た得す、不恁麼も也た得す、然る後沒交涉、三員の無事道人の中、一人を選んで師と爲んことを要す。正に是れ這般の生鐵鑄就す底の漢。何が故ぞ、或は惡境界に遇ひ、或は奇特の境界に遇ふ。他の面前に到つて、悉く皆夢の如くに相似たり。六根有ることを知らず、亦且暮有ることを知らず。直饒ひ這般の田地に到るも、切に忌む寒灰死火を守つて、黑漫漫の處に打入し去ることを。須らく是れ轉身の一路有つて始めて得べし。」見ずや古人道く、「㊉寒巖異草の靑を守ること莫れ、白雲を坐卻するも宗妙とせず。」所以に蓮花峰庵主道く、「他の途路に力を得ざるが爲なり」と。直に須らく是れ千峰萬峰に去つて始めて得べし。且く道へ、什麼を喚んでか千峰萬峰と作す、雪竇只だ他の槨標橫に擔うて人を顧みず、直に千峰萬峰に入り去ると道ふことを愛して、所以に頌出す。且く道へ、什麼の處に向つてか去る、還つて去處を知得する者有り麼。落花流水太だ茫茫、落花紛紛、流水茫茫、閃電の機、眼前是れ什麼ぞ。眉毛を剔起すれば何の處にか去る。雪竇什麼と爲てか也た他の去處を知らざる。只だ山僧が適來拂子を擧するが如きんば、且く道へ、卽今什麼の處にか在る。儞諸人若し見得せば、蓮花峰庵主と同參、其れ或は未だ然らずんば、三條椽下七尺單前に、試みに去つて參詳して看よ。

㊉管取は「うけあふて、してとれ」と譯す。

㊉大陽の玄、兼中到の頌なり。

第二十六則

【本則】 擧す、僧、百丈に問ふ、「如何なるか是れ奇特の事。」（言中に響有り、句裏に機を呈す、人を驚殺す、眼有りて曾て見ず。）丈云く、「獨坐大雄峰。」（凜凜たる威風四百州、坐者立者二り俱に敗缺。）僧禮拜す。（伶俐の衲僧、也た恁麼の人有りて恁麼の事を見んことを要す。）丈便ち打つ。（作家の宗師何が故ぞ、來言豐ならざれば、令虛りに行せず。）

【評唱】 機に臨んで眼を具して、危亡を顧みず。所以に道ふ、「虎穴に入らずんば、爭か虎子を得ん」と。百丈尋常❶虎の翅を挿むが如くに相似たり。這の僧也た死生を避けず、敢て虎鬚を捋でて便ち問ふ、「如何なるか是れ奇特の事」と、這の僧也た眼を具す。百丈便ち他の與に擔荷して云く、「獨坐❷大雄峰。」其の僧便ち禮拜す。衲僧家須らく是れ未問已前の意を別つて始めて得べし。這の僧禮拜、尋常と同じからず、也た須らく是れ具眼にして始めて得べし。平生の心膽をして人に向つて傾けしむること莫れ、相識は還つて不相識の如し。只だ這の僧問ふ、「如何なるか是れ奇特の事」と。百丈云く、「獨坐大雄峰」と。僧禮拜す、丈便ち打つ。看よ他放去するときは則ち一時に俱に是、收來するときは則ち蹤を掃ひ跡を滅す。且く道へ、他便ち禮拜する意旨如何。若し是れ好なりと道はば、甚に因つてか百丈便ち他を打つて什麼をか作さん。若し是れ不好なりと道はば、他の禮拜什麼の不得の處か有る。這裏に到つて、須らく是れ休咎を識り緇素を別ち、千峰頂上に立向して始めて得べし。這の僧便ち禮拜す、虎鬚を捋づるに似て相似たり。只だ轉身の處を爭ふ、賴に百丈の頂門に眼有り、肘後に符有つて、四天下を照破して、深く來風を辨ずるに値ふ。所以に便ち打つ、若し是れ別人ならば、他を奈何ともすること無し。這の僧機を以て機に投じ、意を以て意を遣る、他所以に禮拜す。南泉云ふが如きんば、「文殊普賢、昨夜三更佛見法見を起す、各二十棒を與へて、二鐵圍山に貶向し去れり」と。時に趙州衆を出でて云く、「和尙の棒誰をして喫せしめん。」泉云く、「王老師什麼の過か有る。」州禮拜す、宗師家等閑に他の受用の處を見ず、纔かに當機拈弄の處に到れば、自然に活鱍鱍地なり。五祖先師常に說く、❸馬前の相撲の如くに相似たり、爾但だ常に見聞聲色をして、一時に坐斷せしめて、把得定、作得主せば、始めて他の百丈を見ん。且く道へ、放過する時作麼生、雪竇の頌出するを看取せよ。云く、

【頌】 祖域交馳す天馬駒。（五百年に一たび間生ず、千人萬人の中一箇半箇有り、子は父の業を承ぐ。）
化門の舒卷途を同じうせず。（已に言前に在り、渠儂自由を得たり、他の作家の手段に還す。）電光石

【本則】
東嶺禪師曰く、二十六則百丈獨坐底は、是れ五家の端的底の處なるを明す、潙仰宗は、所作體用、全く此の中の旨より出づ。

❶書言故事に曰く、「已に虱の蚤を蚤すを、虎にして翼と曰ふ。」

❷傳燈百丈海章に、「禮信洪州新吳の界に請じて、大雄山に住せしむ、居處巖巒峻極なるを以て、故に之を百丈と號す。」

❸馬前の相撲は、方語に見んと要すれば卽ち見よ、又云く、擬議すれば則ち失す、又云く、急に手脚を著けよ、又云く、地に倒れて便ち了す。作家の相見なり。

火機變を存す。（劈面來也、左轉右轉、還つて百丈爲人の處を見るや也た無や。）笑ふに堪へたり人の來つて虎鬚を捋づることを。（好し三十棒を與ふるに、重賞の下には必ず勇夫有り、喪身失命を免れず、闍黎一着を放過す。）

【評唱】雪竇見得透して、方に乃ち頌出す。㊀天馬駒は、日に行くこと千里、橫行竪走、奔驟すること飛ぶが如くなるを方に天馬駒と名づく。雪竇百丈の祖域の中に於て、東に走つて西に向ひ、西に走つて東に向ひ、一來一往、七縱八橫、殊に少礙無きこと、天馬駒の如くに相似て、善能く交馳し、方に自由の處を見ることを頌す。這箇自ら是れ他の馬祖の大機大用を得たり。見ずや僧馬祖に問ふ、「如何なるか是れ佛法の大意。」祖便ち打つて云く、「我れ若し儞を打たずんば、天下の人我れを笑ひ去ることを在らん。」又問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」祖云く、「近前來、儞に向つて道はん。」僧近前す、祖劈耳に便ち掌して云く、「六耳謀を同じうせず。」看よ他恁麼に大自在を得ることを、建化門中に於て、或は卷或は舒、有る時は舒卷處に在らず、有る時は卷舒處に在らず、有る時は卷舒俱に在らず。所以に道ふ、「塗を同じうして轍を同じうせず」と。此は百丈這般の手脚有ることを頌す。雪竇道く、「電光石火機變を存す」と、這の僧擊石火の如く、閃電光に似て、只だ此子機變の處在ることを頌す。巖頭道く、「物を卻くるを上と爲し、物を逐ふを下と爲す、若し戰を論せば、箇箇轉處に立在す」と。雪竇道く、「機輪曾て未だ轉せず、轉ずれば必ず兩頭に走る」と。若し轉不得ならば、什麼の用處か有らん、大丈夫の漢、也た須らく是れ些子の機變を識つて始めて得べし。如今の人只管に他に欺を供じて、他に鼻を穿卻せらる、什麼の了期か有らん。這僧電光石火の中に於て、能く機變を存して便ち禮拜す。雪竇道く、「笑ふに堪へたり人の來つて虎鬚を捋づることを。」百丈一箇の大蟲に似て相似たり。笑ふに堪へたり這の僧去つて虎鬚を捋づることを。

㊀漢書の西域傳に曰く、「大宛國に高山有り、其の上に馬有り、得可らず、因つて五色の母馬を取りて其の下に置く、與に牽つて駒を生む、皆汗血なり、因つて天馬子と號す。」馬の二歲なるを駒と曰ふ。

第二十七則

垂示に云く、一を問へば十を答へ、一を擧すれば三を明め、兎を見て鷹を放ち、風に因つて火を吹く。眉毛を惜まざることは則ち且く置く、只虎穴に入る時の如くんば如何。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、僧、雲門に問ふ、「樹凋み葉落つる時如何。」（是れ什麼の時節ぞ、家破れて人亡し、人亡くして家破る。）雲門云く、「體露金風。」（天を撐へ地を拄ふ、斬釘截鐵、淨躶躶赤灑灑、青霄に平步す。）

【評唱】若し箇裏に向つて薦得せば、始めて雲門爲人の處を見ん。其れ或は未だ然らずんば、舊に依つて只だ是れ❶鹿を指して馬と爲さん、眼瞎し耳聾す、誰人か這の境界に到らん。且く道へ、雲門復た是れ他の話に答ふるとや爲さん、復た是れ他の與に酬唱するとや爲さん。

【本則】東菴禪師云く、二十七則、百丈獨坐底は、是れ雲門の言句彌よ明了なることを明す。

若し他の話に答ふと道はば、錯つて定盤星を認む。若し他の與に唱和すと道はば、且得沒交渉、既に恁麼ならずんば、畢竟して作麼生。儞若し見得透せば、衲僧の鼻孔、一揑を消せず。其れ或は未だ然らずんば、鬼窟裏に打入し去らん。大凡そ宗乘を扶竪せんには、也た須らく是れ全身擔荷して、眉毛を惜まず、虎口に向つて身を横へて、他の横に拖き倒に拽くに任すべし。若し此の如くならずんば、爭か能く人の爲にし得ん。這の僧箇の問端を致す、也た妨げず嶮峻なり。若し尋常の事を以て他を看ば、只だ箇の閑事を管する底の僧に似ん。若し衲僧門下に據つて、命脈裏に去つて覷る時は、妨げず妙處有り。且く道へ、樹凋み葉落つる、是れ什麼人の境界ぞ。

十八問の中、此れ之を辨主問と謂ひ、亦之を借事問と謂ふ。雲門一絲毫を移易せず、只だ他に向つて道ふ、「體露金風」と、答へ得て甚だ妙なり。亦敢て他の問頭に辜負せず。蓋し他の問處に眼有るが爲に、答處も亦端的なり。古人道く、「親切を得んと欲せば、問を將ち來つて問ふこと莫れ、若し是れ知音底ならば、擧著せば便ち落處を知らん。」儞若し雲門の語脈裏に向つて討ねば、便ち錯り了れり。只だ是れ雲門の句中に、多く人の情解を惹くことを愛す。若し情解の會を作さば、未だ免れず我が兒孫を喪することを。雲門恁麼に賊馬に騎つて賊を趂ふことを愛す。見ずや、僧問ふ、「如何なるか是れ

㊀史記評林第六に云く、趙高亂を爲さんと欲す、恐らくは群臣の聽かざらんことを、乃ち先づ驗を設く、鹿を持つて二世に獻じて曰く、「馬なり」と。二世笑つて曰く、「丞相誤てるか、鹿を指して馬と爲す」。左右に問ふ、左右或は默し、或は馬と言うて以て趙高に阿諛る、或は鹿と言ふ者あり、趙因つて陰に諸の鹿と言ふ者に中るに法を以てす、後に群臣皆高を畏る。

㊁井思量の處。」門云く、「識情測り難し。」這の僧問ふ、「楞凋み葉落つる時如何。」門云く、「體露金風」と。句中妨げず要津を把斷して、凡聖を通せざることを。須らく他の一を擧すれば三を明め、三を擧すれば一を明むることを會すべし。儞若し他の三句の中に去つて求めば、則ち㊂腦後に箭を拔く、他の一句の中に須らく三句を具すべし。函蓋乾坤の句、隨波逐浪の句、截斷衆流の句、自然に恰好せん。雲門三句の中、且く道へ、那句を用てか人を接せん試みに辨じて看よ。頌に曰く、

【頌】　問既に宗有り。（深く來風を辨ず、箭虚りに發せず。）答も亦同じき攸（豈に兩般有らんや、鐘の扣くを待つが如し、功浪りに施さず。）三句辨ず可し。（上中下、如今是れ第幾句ぞ、須らく是れ三句の外に向つて薦取して始めて得べし。）一鏃空に遼る。（中れり、過也、墜着、磕着、箭新羅を過ぐ。）大野兮凉飈颯颯。（普天匝地、還つて骨毛卓竪することを覺ゆるや、放行し去れり。）長天兮疎雨濛濛。（風浩浩、水漫漫、頭上漫漫、腳下漫漫。）君見ずや少林久坐未歸の客。（更に不唧嚕の漢有り、人を帶累殺す、黄河は頭上より瀉ぎ將ち來る。）靜に依る熊耳の一叢叢。（開眼も也た着、合眼も也た着、鬼窟裏に活計を作す、眼瞎し耳聾す、誰か這の境界に到らん、儞が版齒を打折することを免れず。）

【評唱】　古人道く、㊃「言を承けては須らく宗を會すべし、自ら規矩を立つること勿れ」と。古人は言

㊁此の問答卽ち三祖信心銘の語なり。
㊂古抄に腦後は急處なり、箭を拔くとも、必ず死するなり。
㊃石頭參同契の語。

虛に設けず、所以に道ふ、㋚大凡そ箇の事を問はんには、也た須らく些子の好惡を識るべし。若し尊卑去就を識らず、淨觸を識らずして、口に信せて亂道せば、什麼の利濟か有らん。凡そ言を出し氣を吐くには、須らく是れ㋩鉗の如く鋏の如く、㋥鈎有り鏁有るべし、須らく是れ相續不斷にして始めて得べし。這の僧の問處宗旨有り、雲門の答處も亦然り。雲門尋常三句を以て人を接す、此は是れ極則なり。雪竇這の公案を頌すること、㋭大龍の公案を頌すると相類す。三句辨ず可し、一句の中に三句を具す。若し辨得せば則ち三句の外に透出せん。一鏃空に邀る、鏃は乃ち箭鏃なり、射得て太だ遠し、須らく是れ急に眼を著けて看て始めて得べし。若し也た見得分明ならば、以て一句の下に、大千沙界を開展す可し、此に到つて頌し了る。雪竇餘才有り、所以に展開し頌出して道く、「大野兮涼颼颼、長天兮疎雨濛濛」と。且く道へ、是れ心か是れ境か、是れ玄か是れ妙か。古人道く、「法法隱藏せず、古今常に顯露す」と。他問ふ、「樹凋み葉落つる時如何。」雲門道く、「體露金風」と。雪竇の意は只だ一境と作す。如今眼前、㋬風拂拂地、是れ東南の風にあらずんば、便ち是れ西北の風ならん、直に須らく便ち恁麼に會して始めて得べし。儻若し更に禪道の會を作さば、便ち沒交涉。君見ずや、少林久坐未歸の客、達磨未だ西天に歸らざる時、

㋚大凡そより不斷にして始めて得べしに至る、雲居膺禪師上堂の語、傳燈十七、會元十三、本章に見ゆ。

㋩說文に、以て冶器を持して鑄鑄す可き者、一に曰く、今の挾持の者し。

㋥說文に、鈎は曲なり、古へ兵に鈎有り鏁有り、引き來るを鈎と曰ひ、推し去るを鏁と曰ふ。鏁或は鎖に作る。

㋭第八十二則なり。

㋬拂々當に颼々に作るべし、小風を颼と謂ふ、一には曰く、疾風遞じて弗に作る。詩に「颼風弗弗。」

㋮憺は增韻に靜なり、說文に憂なり、詩に「憂心憺々。」ものさみしくひつそりしたこと。

【本則】

㋯東嶺禪師云く、二十八則、百丈獨坐底の大機、能く大用を發することを明す。

㋰南泉普願禪師は、馬祖道一の法嗣なり。

㋱林間錄の下卷に云く、「百丈山第二代法正禪師は大智の高弟、其の先き嘗て涅槃經を誦す、姓名を言はず、時に呼んで涅槃和尚と爲す、云々。」惟政とあるは不可なり。

九年面壁す、㋲靜悄悄地なり。且く道へ、是れ體露金風か、若し這裏に向つて、古今凡聖を盡して、乾坤大地、打成一片にして、方に雲門雪竇的的爲人の處を見ん。靜に依る熊耳の一叢叢と。熊耳は卽ち西京嵩山の少林なり。前山も也た千叢萬叢、諸人什麼の處に向つてか見ん。還つて雪竇爲人の處を見る麼、也た是れ靈龜尾を曳く。

第二十八則

【本則】㋯擧す、㋰南泉、㋱百丈の涅槃和尚に參ず。丈問ふ、「從上の諸聖、還つて人の爲めに說かざる底の法ありや。」（和尚合に知るべし、壁立萬仞、還つて齒の落つることを覺ゆるや。）泉云く、「有り。」（落草し了れり、也た孟八郎にして什麼か作ん、便ち恁麼の事有り。）丈云く、「作麼生か是れ人の爲めに說かざる底の法。」（看よ他作麼生、看よ他手忙しく脚亂るることを、錯を將て錯に就く、但だ試みに問うて看よ。）泉云く、「不是心、不是佛、不是物。」（果然として敗闕を納る、果然として漏逗少からず。）丈云く、「說了也。」（他の與に說破することを莫れ、從他一平生を錯ることを、他の與に恁麼に道ふべからず。）泉云く、「某甲は只恁麼、和尚は作麼生。」（賴に轉身の處有り、長に與すれば卽ち長、短に與

すれば卽ち短、理長すれば則ち就く。）丈云く、「我れ又是れ大善知識にあらず、爭か說不說あることを知らん。」（看よ他手忙しく脚亂るることを、身を藏し影を露す、去死十分爛泥裏に刺有り、恁麼那ぞ我を賺す。）泉云く、「某甲不會。」（乍ちに恁麼なる可し、賴に不會に値ふ、會せば卽ち儞が頭を打破せん、賴に這の漢の只だ恁麼なるに値ふ。）丈云く、「我れ太煞だ儞が爲めに說き了れり。」（雪上に霜を加ふ、龍頭蛇尾にして什麼か作ん。）

【評唱】　這裏に到つて、也た卽心不卽心を消せず、非心不非心を消せず、直下に頂より足に至るまで、眉毛一莖も也た無くんば、猶ほ些子に較れり。卽心非心、❶壽禪師之を表詮遮詮と謂ふ。此れ是の涅槃和尙は、法正禪師なり。昔時百丈に在つて西堂と作る、田を開いて大義を說く者なり、是の時南泉已に馬祖に見え了る、只だ是れ諸方に往いて決擇す。百丈此の一問を致す、也た大いに酬い難し。云く、「從上の諸聖、還つて人の爲に說かざる底の法有り麼。」若し是れ山僧ならば、耳を掩うて出で、這の老漢一場の懞懞を看ん。若し是れ作家ならば、他の恁麼に問ふを見て、便ち他を識破得せん。南泉只だ他の所見に據つて、便ち有りと道ふ、也た是れ㊁孟八郎なり。百丈便ち錯を將て錯に就き、後に隨つて道く、「作麼生か是れ人の爲に說かざる底の法。」泉云く、「不是心、不是佛、不是物」と。這の漢天上の月を貪り觀て、掌中の珠を失卻す。丈云く、「說了也。」可惜許、他の興に注破す。當時但だ劈脊に便ち棒して、他をして痛痒を知らしめん。然も是の如しと雖も、儞且く道へ、什麼の處か是れ說處。南泉の見處に據らば、不是心、不是佛、不是物、曾て說著せず。且く儞諸人に問ふ、什麼に因つてか卻つて道ふ、「說了也」と、他の語下に又蹤迹無し。若し他不說と道はゞ、百丈什麼と爲てか卻つて恁麼に道ふ。南泉は是れ變通底の人、便ち後に隨つて一拶して云く、「某甲は只だ㊀恁麼、和尙又作麼生」と。若し是れ別人ならば、未だ免れず㊂分疎不下なることを。爭奈せん百丈は是れ作家、答處妨げず奇特なることを。便ち道ふ、我れ又是れ大善知識にあらず、爭か說不說有ることを知らん。南泉便ち箇の不會と道ふ、是れ渠れ果して會し來つて不會と道ふか、是れ眞箇不會なること莫しや。百丈云く、我れ太煞だ儞が爲に說き了れり。且く道へ、什麼の處か是れ說處、若し是れ泥團を弄する漢ならん時は、兩箇㊃滉々滔々。若し是れ二り俱に作家ならん時は、明鏡の臺に當るが如し。其の實は前頭は二り俱に作家、後頭は二り俱に放過。若し是れ具眼の漢ならば、分明に驗取せん。且く道へ、作麼生か他を驗せん。雪竇の頌出するを看よ。云く、

【頌】　祖佛從來人の爲めにせず。（各自に疆界を守る、條有れば條を攀づ、箇の元字脚を記得して、

❶靑原下十世韶國師法嗣慧日永明延壽禪師、表詮遮詮の問答は、宗鏡錄二十五に出づ、論及び敎家に表遮の二詮有り、表詮は顯なり、卽心なり、出世の心なり、直指の正名なり、遮詮は隱なり、非心なり、不出世の義なり、遮識の正名なり。

㊁古抄に云く、道理に由らずして、以て事を作す者を孟八郎と曰ふ。疎忽もの、亂暴もの。

㊀恁麼は俗に此くの如しと言ふが如し。

㊁分疎不下は、いひほどきえず」と譯す。條理を分たわないふ。

㊃滉滔は分別せざる貌。手の付けられねばかもの。

心に在かば、地獄に入ること箭の如くならん。）祐僧今古頭を競うて走る。（草鞋を踏破し拄杖を拗折して高く鉢囊を掛けよ。）明鏡臺に當つて列像殊なる。（墮也破也、鏡を打破し來れ、儞と與に相見せん。）一一南に面つて北斗を看る。（還つて老僧が佛殿に騎つて山門を出づるを見るや、新羅國裏曾て上堂、大唐國裏未だ鼓を打せず。）斗柄垂る。（落處も也た知らず、什麼の處にか在る。）討ぬるに處無し。（瞎、可惜許、椀子地に落ちて楪子七八斤と成る。）鼻孔を拈得して口を失脚す。（那裏よりか這の消息を得來る、果然として恁麼、便ち打たん。）

【評唱】釋迦老子出世、㋺四十九年、未だ曾て一字を說かず。始め㋻光耀土より、終り跋提河に至るまで、是の二中間に於て、未だ嘗て一字を說かず、恁麼に道ふ、且く道へ、是れ說か是れ不說か、如今龍宮に滿ち海藏に盈つ、且く作麼生か是れ不說。豈に見ずや㋼修山主道く、「諸佛出世せず、四十九年の說、達磨西來せず、少林に妙訣有り」と。㋽又道く、「諸佛曾て出世せず、亦一法の人に與ふる無し。」但だ能く衆生の心を觀て、機に隨ひ病に應じて、藥を與へ方を施す。遂に三乘十二分敎有り、其の實は祖佛、古より今に至るまで、曾て人の爲に說かず、只だ這の不爲人、正に好し參詳するに。山僧常に說く、「若し是れ一句を添へて、甜蜜蜜地なるも、好好

㋺宗鏡錄三十七に、佛の言く、光曜より終り鷄林に至るまで、一字を說かず、汝も亦聞かず。
㋻光耀土は即ち鹿野苑なり、跋提河は此に金河と云ふ、俱尸羅城に在り。上は華嚴、下は涅槃。
㋼會元第八に、杭州龍濟紹修禪師、初め法眼と同じく地藏に參ず云々。師頌有り云く、諸佛出世せず云々。
㋽以下遂に三乘十二敎有りに至る、汾陽無業國師の語、佛祖通載に出づ。

に觀來れば、正に是れ毒藥なり」と。若し是れ劈脊に便ち棒じ、驀口に便ち掴し、推し將ち出し去らば、方に始めて親切の爲人ならん。祐僧今古頭を競うて走る、到る處に是も也た問ひ、不是も也た問ひ、佛を問ひ祖を問ひ、向上を問ひ、向下を問ふ。然も此の如しと雖も、若し未だ這の田地に到らずんば、也た少くこと得す。明鏡の臺に當つて列像殊なりと云ふが如きんば、只だ一句を消して、明白を辨ず可し。古人道く、㋾「萬象及び森羅、一法の所印なり」と。又道く、「㋿森羅及び萬象、總に箇の中に在つて圓なり」と。㋿神秀大師云く、「身は是れ菩提樹、心は明鏡臺の如し。時時勤めて拂拭せよ、塵埃を惹かしむること勿れ」と。㋾大滿云く、「他只だ門外に在り」と。雪竇恁麼に道ふ、且く道へ、門內に在るか、門外に在るか、儞等諸人、各一面の古鏡有り、森羅萬象、長短方圓、一一中に於て顯現す。儞若し長短の處に去つて會せば、卒に摸索不著ならん。所以に雪竇道く、「明鏡臺に當つて列像殊なり」と。卻つて須らく是れ一一南に面つて北斗を看るべし。既に是れ南に面つて、什麼と爲てか卻つて北斗を看る。若し恁麼に會得せば、方に百丈南泉相見の處を見ん、此の兩句に百丈の挨拶の處を頌す。丈云く、「我れ又是れ大善知識にあらず、爭か說不說有ることを知らん」と。雪竇此に到つて、頌し得て死水裏に落在す、人の錯り會せんことを恐れて、卻つて自ら提起して云く、「卽今目前斗柄垂る、儞更に什麼の處に去つて

㋾以下二句法句經の文なり。
㋿汾陽の昭、臨濟の第一玄を頌して云く、第一玄法界廣うして無邊、森羅云々。
㋾五祖弘忍旁出の法嗣、傳燈第三、會元第一に傳有り。
㋾五祖弘忍大師、大滿禪師と謚す、此の語六祖壇經に見ゆ。

か討ねん」と。儞縱に鼻孔を拈得せば口を失卻し、口を拈得せば鼻孔を失卻し了らん。

第二十九則

垂示に云く、魚行けば水濁り、鳥飛べば毛落つ。明かに主賓を辨じ、洞かに緇素を分つ。直に當臺の明鏡、掌內の明珠に似たり。漢現じ胡來り、聲に彰れ色に顯る。且く道へ、什麼としてか此の如くなる。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、僧、大隋に問ふ、「劫火洞然として、大千俱に壞す。未審し這箇壞か不壞か。」（這箇是れ什麼物ぞ、這の一句天下の衲僧摸索不着、預め搔いて痒を待つ。）隋云く、「壞。」（無孔の鐵鎚當面に擲つて鼻孔を沒卻す、未だ口を開かざる已前、勘破了也。）僧云く、「恁麼ならば則ち他に隨ひ去るや。」（沒量の大人語脈裏に轉卻せらる、果然として錯りて認む。）隋云く、「他に隨ひ去る。」（前箭は猶ほ輕く後箭は深し、只だ這箇多少の人摸索不着、水長せば船高く、泥多ければ佛大なり。若し他に隨ひ去ると道はゞ什麼の處にか在る、若し他に隨ひ去らずと道はゞ、又作麼生、便ち打つ。）

【評唱】❼大隋の法眞和尙は、大安禪師に承嗣す。乃ち東川鹽亭縣の人なり、六十餘員の善知識に參見す。昔時潙山の會裏に在つて火頭と作る。一日潙山問うて云く、「子此に在ること數年、亦箇の問を致し來つて如何と看ることを解せず。」隋云く、「某甲をして箇の什麼を問はしめてか卽ち得ん。」潙山云く、「子便ち會せずんば、如何なるか是れ佛と問へ。」隋手を以て潙山の口を掩ふ。山云く、「汝已後に箇の掃地の人を覓むるも也た無けん。」後川に歸つて先づ㊐堋口山の路次に於て、煎茶して往來を接待することと凡そ三年、後方に出世し山を開いて大隋に住す。僧有つて問ふ、「㊅劫火洞然として、大千俱に壞す、未審し這箇壞か不壞か。」這の僧只だ敎意に據り來つて問ふ、敎中に云く、「㊁成住壞空、㊂三災劫起つて、壞して三禪天に至る」と。這の僧元來話頭の落處を知らず、且く道へ、這箇是れ什麼ぞ、人多く情解を作して道ふ、「這箇は是れ衆生の本性」と。隋云く、「壞。」僧云く、「恁麼ならば則ち他に隨ひ去るや。」隋云く、「他に隨ひ去る。」只だ這箇、多少の人情解して、摸索不著なり。若し他に隨ひ去らずと道はゞ、又作麼生。道ふことを見ずや、「㊆親切を得んと欲せばの處にか在る。若し他に隨ひ去らずと道はゞ、又作麼生。」道ふことを見ずや、「㊆親切を得んと欲せば問を將ち來つて問ふこと莫れ」と。後僧有り㊇修山主に問ふ、「劫火洞然として、大千俱に壞す、未審し這箇壞か不壞か。」山主云く、「不壞。」僧云く、「什麼と爲てか不壞。」主云く、「大千に同じきが爲なり、壞も也た人を礙塞殺し、不壞も也た人を礙塞殺す。」其の僧旣に大隋の說話を會せず、是れ他也た妨げ

【本則】東嶽禪師云く、二十九則百丈獨坐の端的、自然に三祇と百劫の諸妄想とを超越するを明す。

❼長慶の大安百丈に嗣ぐ、大隋の眞は百丈の法孫なり。

㊐堋口山は蜀に在り。
㊅仁王經の偈文なり。
㊁俱舍の世間品、法苑珠林の劫量篇等に詳なり。
㊂三災は水火風なり。
㊆首山念の語なり。
㊇修山主は、青原下八世羅漢琛の法嗣、傳燈二十四、會元第八に傳あり。

す此の事を以て念と爲して、卻つて此の問を持して、直に舒州の投子山に往く。投子問ふ、「近離甚の處ぞ。」僧云く、「西蜀の大隋。」投云く、「大隋何の言句か有りし。」僧遂に前話を擧す、投子香を焚き禮拜して云く、「西蜀に古佛有つて出世す、汝且く速かに回れ。」其の僧復た回つて大隋に至る、隋已に遷化す、這の僧一場の懊憹。後に唐の僧㋐景遵と云ふもの有り、㋑大隋に題して云く、「了然として別法無し、誰か道ふ㋒南能を印すと。一句他に隨ふ語、千山、衲僧を走らしむ。蛩寒うして砌葉に鳴き、鬼夜龕燈を禮す、吟じ罷む孤窓の外、徘徊して恨勝へず」と。所以に雪竇後面に此の兩句を引いて頌出す。如今也た壞の會を作すことを得ず、畢竟作麼生か會せん、急に眼を著けて看よ。

【頌】劫火光中に問端を立つ。(什麼と道ふぞ、已に是れ錯り了れり。)衲僧猶ほ滯る兩重の關。(此の人を坐斷して如何が救ひ得ん、百匝千里也た脚頭脚底有り。)憐む可し一句他に隨ふの語。(天下の衲僧這般の計較を作す、千句萬句も也た消得せず。什麼の他の脚跟を截斷し難き處か有らん。)萬里區區として獨り往還す。(業識茫茫蹉過するも也た知らず、自ら是れ他草鞋を踏破す。)

【評唱】雪竇機に當つて頌出す、句裏に出身の處有り。劫火光中に問端を立つ、衲僧猶ほ滯る兩重の關。這の僧の問處、先づ壞と不壞とを懷く、是れ兩重の關なり。若し是れ得底の人ならば、壞と道ふも也た出身の處有り、不壞と道ふも也た出身の處有り。憐む可し一句他に隨ふの語、萬里區區として獨り往還す。這の僧此を持して投子に問ひ、又復た大隋に回ることを頌す。謂つ可し萬里區區たりと。

㋐景遵は詩僧なり、
㋑大隋の塔を拜し、此の詩を題するなり。
㋒南能は六祖なり。

第三十則

【本則】舉す、僧、趙州に問ふ、「承り聞く、和尚親しく南泉に見ゆと、是なりや否や。」(千聞一見に如かず、拶、眉八字に分る。)州云く、「鎮州に大蘿蔔頭を出す。」(天を撐へ地を拄ふ、斬釘截鐵、箭新羅を過ぐ、腦後に腮を見ば、與に往來すること莫れ。)

【評唱】這の僧也た是れ箇の久參底、問中妨げず眼有り、爭奈せん趙州は是れ作家、便ち他に答へて道く、「鎮州に大蘿蔔頭を出す」と。無味の談、人口を塞斷すと謂ふ可し。這の老漢大いに箇の白拈賊に似て相似たり。儞纔かに口を開かば、便ち儞が眼睛を換卻す。若し是れ特達英靈底の漢ならば、直下に擊石火の裏、閃電光の中に向つて、纔かに擧著するを聞いて、㋑剔起して便ち行かん。苟し或は佇思停機せば、喪身失命することを免れ

【本則】
㋐東嶺禪師云く、三十則、百丈獨坐底の端的、自ら趙州穩坐の地に露するを明す。
㋑剔起は「ちよいと、たつ」と譯す。
㋒澄散聖は、青原下八世巴陵鑒の法嗣なり、會元十五に傳あり。
㋓圓續は「わな、てくだ」と譯す。
㋔遠錄公は、南嶽下十世、葉縣省の法嗣、會元十二に傳あり。
㋕說文に、倦は疲なり、瞢は目を過ぐるなり。「直に指すに非

す。㊁江西の澄散聖、判じて之を東間西答と謂ふ、喚んで答話せず、他の㊅圈續に上らずと作す。若し恁麼に會せば爭か得ん。㊂遠錄公云く、「此は是れ㊄傍瞥の語、㊃九帶の中に收在す。」若し恁麼に會せば、夢にも也た未だ夢見ざること在らん、更に趙州を帶累し去る。有る者は道く、「鎭州從來大蘿蔔頭を出す、天下の人皆知る、趙州從來南泉に參見す、天下の人皆知る。這の僧卻つて更に問うて道ふ、「承り聞く和尙親しく南泉に見ゆと是なりや否や。」所以に州他に向つて道ふ、「鎭州に大蘿蔔頭を出す」と、且得沒交涉。都て恁麼に會せず、畢竟作麼生か會せん、㊆他家自ら通霄の路有り。見ずや、僧㊇九峰に問ふ、「承り聞く和尙親しく㊈延壽に見え來ると是なりや否や。」峯云く、「山前麥熟すや也た未だしや」と。正に趙州の此の僧に答ふる話に對得す。渾て兩箇無孔の鐵鎚に似たり、趙州老漢、是れ箇の無事底の人、儞輕輕に問著すれば、便ち儞が眼睛を換卻す。若し是れ有ることを知る底の人ならば、細に嚼み來つて嚥まん、若し是れ有ることを知らざる底の人ならば、一に㊉渾崙に箇の棗を呑むに似ん。

【頌】鎭州に大蘿蔔を出す。(天下の人知る、切に忌む道着することを。

すして、傍きの方から、ちらりと、消息を見せる」なり。

㊃會元遠錄公の章に云く、師幕年會聖嚴に休し、佛祖の奧義を叙して九帶を作りて曰く、「佛正法眼帶、佛法藏帶、理實帶、事實帶、理事縱橫帶、屈曲垂帶、妙叶無帶、金針雙鎖帶、平懷常實帶。」

㊄鼓山晏の語、會元第七、太原孚上座の章に見ゆ。

㊆青原下八世延壽輪の法嗣なり傳燈に云く、「廬山歸宗道詮禪師云々、」開寶五年洪の帥林仁肇請じて筠陽九峰の隆濟院に居せしめて、宗旨を闡揚せしむ。

㊇青原下七世保福展の法嗣、傳燈廿二、會元第八に傳あり。

㊈讀會に、渾崙は未だ相離れざる貌、方語に、其の味を知らず、渾崙の人は棗を丸呑にする、故に味を知らざるなり。

一回擧着すれば一回新なり。)天下の禪僧則を取る。(爭奈せん不恁麼なることを。誰か這の閑言長語を用ひん。)只知る自古と自今と。(半開半合、麻の如く粟に似たり、自古も也た不恁麼、如今も也た不恁麼。)爭か辨せん鵠は白く烏は黑きことを。(全機顯脫す、長者は自ら長、短者は自ら短、識得する者は貴し、也た辨することを消得せず。)賊賊。(咄、更に是れ別ならず、自ら是れ擔枷過狀。)禪僧の鼻孔曾て拈得す。(穿過了也、裂轉。)

【評唱】鎭州に大蘿蔔を出す、儞若し他を取つて極則と爲ば、早く是れ錯り了れり。古人手を把つて高山に上す、未だ免れず傍觀の者哂ふことを。人皆這箇は是れ極則の語と道ふことを知つて、却つて畢竟して極則の處を知らず。所以に雪竇道く、「天下の禪僧則を取る。只だ知る自古も自今も、爭か辨せん、㊋鵠は白く烏は黑きことを。」今人も也た恁麼に答へ、古人も也た恁麼に答ふることを知ると雖も、何ぞ曾て緇素を分得し來らん。雪竇道く、「也た須らく是れ他の石火電光の中に去つて、其の鵠は白く烏は黑きことを辨じて始めて得べし。」公案此に到つて頌し了れり。雪竇自ら意を出して、活鱍鱍の處に向つて更に儞に向つて道ふ、「賊賊。禪僧の鼻孔曾て拈得す」と。三世の諸佛も也た是れ賊、歷代の祖師も也た是れ賊。善能く賊と作つて人の眼睛を換へて、手脚を犯さざることは、獨り趙州を許す。且く道へ、什麼の處か是れ趙州善く賊と做る處、鎭州に大蘿蔔頭を出す。

㊋楞嚴第五に云く、現前の種々、松は直く、棘は曲り、鵠は白く、烏は玄くも皆元由を了(さと)れり。

國譯佛果圜悟禪師碧巖錄卷第三　終

國譯佛果圜悟禪師碧巖錄卷第四

第三十一則

垂示に云く、動ずるときは則ち影現じ、覺するときは則ち冰生ず。其れ或は不動不覺なるも、野狐窟裡に入ることを免れず。透得徹し、信得及して、絲毫の障翳無くんば、龍の水を得るが如く、虎の山に靠るに似たり。放行するや瓦礫光を生じ、把定するや眞金色を失す。古人の公案、未だ周遮を免れず、且く道へ、什麼邊の事をか評論する。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、麻谷錫を持して章敬に到り、禪床を遶ること三匝、錫を振るふこと一下して、卓然として立つ。(曹溪の樣子一模に脫出す、直に得たり天を驚し地を動すことを。)敬云く、「是是。」(泥裏に土塊を洗ふ、一船の人を賺殺す、是れ什麼の語話ぞ、繫驢橛子。)雪竇著語して云く、「錯。」(放過せば則ち不可、猶ほ一着を較くこと在り。)麻谷又南泉に到り、禪床を遶ること三匝、錫を振るふこと一下して、卓然として立つ。(依前として泥裏に土塊を洗ふ、再運前來、鍛跳れども斗を出でず。)泉云く、「不是不是。」(何ぞ承當せざる、人を殺すに眼を眨せず、是

【本則】東嶺禪師云く、三十一則、悟後、人に逢ふの大事、馬師の法子麻谷を以て則と爲し、永嘉を以て其と爲し、玄策を以て、宗門の表準と爲すを明す。

れ什麼の語話ぞ。）雪竇著語して云く、「錯。」（放過せば不可。）麻谷當時云く、「章敬は是と道ひ、和尚は什麼として不是と道ふ。」（主人公什麼の處にか在る、這の漢元來人の舌頭を取る、漏逗し了れり。）泉云く、「章敬は則ち是、是れ汝は不是。」（也た好し人を殺しては須らく血を見るべし、人の爲にせんには須らく爲に徹せしむべし、多少の人を瞞卻し來る。）此は是れ風力の所轉、遂に敗壞を成す。（果然として他に籠罩せらる、自己を爭奈何せん。）

【評唱】古人の行脚、叢林を徧歷して、直に此の事を以て念と爲し、他の曲彔木床上の老和尚、具眼か不具眼かを辨せんことを要す。㋑古人は一言に相契はば卽ち住り、一言に契はざれば卽ち去る。看よ他の㋺麻谷㋩章敬に到つて禪床を遶ること三匝、錫を振るふこと一下、卓然として立つ。章敬云く、「是是」と、殺人刀活人劍、須らく是れ本分の作家なるべし。雪竇云く、「錯」と、兩邊に落在す。儞若し兩邊に去つて會せば、雪竇の意を見す、佗卓然として立つ。且く道へ、佗什麼の事の爲ぞ、雪竇什麼と爲てか卻つて錯と道ふ、什麼の處か是れ他の錯處、章敬道く、是と、什麼の處か是れ是處、雪竇坐ながら㋥判語を讀むが如し。麻谷箇の是の字を擔ふて、便ち去つて南泉に見え、依前として禪床を遶ること三匝、

㋑會元第三に、婺州五洩山の靈默禪師、石頭に謁して便ち問ふ、「一言に相契はゞ卽ち住り、契はざれば卽ち去らん云云。」

㋺麻谷山寶徹禪師は、南嶽下二世、馬祖一の法嗣、傳燈第七、會元第三に傳あり。

㋩章敬懷暉、馬祖の法嗣、傳、會元第三、傳燈第七にあり。

㋥官府公庭、訟へ其の事を究め問うて、既に一決する時は、則ち吏官判語を作りて、之を案牘に結す、而して訟人に對して判語を讀んで、是非を決斷するなり。裁判判決の語なり。

錫を振るふこと一下、卓然として立つ。泉云く、「不是不是」と、殺人刀活人劍、須らく是れ本分の宗師なるべし。雪竇云く、「錯、」章敬道く、「是是、」南泉云く、「不是不是」と、爲復た是れ同か是れ別か。前頭に是と道ふ、什麼と爲てか也た錯、後頭は不是と道ふ、什麼と爲てか也た錯。若し章敬の句下に向つて薦得せば、自救も也た不了、若し南泉の句下に向つて薦得せば、祖佛の與に師と爲る可し。然も恁麼なりと雖も、衲僧家須らく是れ自ら肯ふて始めて得べし。一向に人の口辯を取ること莫れ、他の問既に一般、什麼と爲てか一箇は是と道ひ、一箇は不是と道ふ。若し是れ通方の作者にして、大解脫を得る底の人ならば、必ず須らく別に生涯有るべし。若し是れ機境忘せざる底ならば、決定して這の兩頭に滯在せん。若し古今を明辨し、天下の人の舌頭を坐斷せんと要せば、須らく是れ這の兩錯を明取して始めて得べし。後頭に至るに及んで、雪竇の頌も也た只だ這の兩錯を頌す、雪竇活鱍鱍の處を提げんことを要す。所以に此の如し、若し是れ皮下に血有る底の漢ならば、自然に言句中に向つて解會を作さず、繫驢橛上に向つて道理を作さず、有る者は道ふ、「雪竇麻谷に代つて這の兩錯を下す」と、什麼の交涉か有らん。殊に知らず古人の著語、要關を鑽斷することを。這邊も也た是、那邊も也た是、畢竟這の兩頭に在らず。慶藏主道く、「錫を持して禪床を遶る、是と不是と俱に錯、其の實は亦此に在らず」と。儞見ずや、永嘉、曹溪に到つて六祖に見ゆ、禪床を遶ること三匝、錫を振るふこと一下、卓然として立つ。祖云く、「夫れ沙門は、三千の威儀、八萬の細行を具す、大德何れの方より來つて、大我慢を

生ず」と。什麼と爲てか六祖卻つて道ふ、他大我慢を生ずと。此箇也た是と說かず、也た不是と說かず、是と不是と、都て是れ繫驢橛。唯だ雪竇のみ有つて兩錯を下す、猶ほ些子に較れり。麻谷云く、「章敬は是と道ひ、和尙は什麼と爲てか不是と道ふ。」這の老漢眉毛を惜まず、漏逗少からず。南泉道く、「章敬は則ち是、是れ汝は不是。」南泉謂つ可し、兎を見て鷹を放つと。慶藏主云く、「南泉忒煞だ郎當、不是と云ふて便ち休せんに、更に佗の與に過を出して道ふ、此れは是れ風力の所轉、終に敗壞を成す」と。圓覺經に云く、「我れ今此の身は、四大和合、所謂髮毛爪齒、皮肉筋骨、髓腦垢色は、皆地に歸し、唾涕膿血は、皆水に歸し、暖氣は火に歸し、動轉は風に歸す、四大各離るれば、今者の妄身、當に何の處にか在らん。」佗の麻谷、錫を持して禪床を遶る、既に是れ風力の所轉、終に敗壞を成す。且く道へ、畢竟心宗を發明する底の事、什麼の處にか在る、這裏に到つて、也た須らく是れ生鐵鑄就す底の箇の漢にして始めて得べし。豈に見ずや、㋕張拙秀才、㋖西堂の藏禪師に參ず、問うて云く、「山河大地、是れ有か是れ無か、三世の諸佛是れ有か是れ無か。」藏云く、「有。」張拙秀才云く、「錯。」藏云く、「先輩曾て什麼の人にか參見し來る。」拙云く、「徑山和尙に參見し來る、某甲凡そ問話する所有れば、徑山皆無と言ふ。」藏云く、「先輩什麼の眷屬か有る。」拙云く、「一の山妻兩箇の癡頑有り。」又卻つて問ふ、「徑山甚の眷屬か有る。」拙云く、「徑山は古佛なり、和尙渠を誘ること莫くんば好し。」藏云く、「先輩徑山に似ることを得ん時を待つて、一切に無と言へ。」張拙㋗俛首する而已。大凡そ作家の宗師は、人の與に粘を解き縛を去り、釘を抽き楔を拔かんと要す、只だ一邊を守る可らず。左撥右轉、右撥左轉、但だ看よ仰山、中邑の處に到つて㋘謝戒す、邑來るを見て、禪床の上に於て手を拍つて云く、㋙「和和」と。仰山卽ち東邊に立ち、又西邊に立ち、又中心に於て立つ。然して後謝戒し了つて、卻つて退後して立つ。邑云く、「什麼の處よりか此の三昧を得來る。」仰山云く、㋚「曹溪の印子上に於て脫し將ち來る。」邑云く、「汝道へ曹溪此の三昧を用て、什麼人をか接す。」仰云く、「㋛一宿覺を接す。」仰山又復中邑に問うて云く、「和尙什麼の處よりか此の三昧を得來る。」邑云く、「我れ馬祖の處に於て此の三昧を得來る。」恁麼の說話に似たらば、豈に是れ擧一明三、本を見て末を逐ふ底の漢にあらずや。龍牙衆に示して道く、「夫れ參學の人は、須らく祖佛を透過して始めて得べし。」㋜新豐和尙道く、「祖佛の言敎を見ること、生寃家の如くにして、始めて參學の分有り、若し透不得ならば、卽ち祖佛に瞞ぜられ去らん。」時に僧有り、問ふ、「祖佛還つて人を瞞ずるの心有りや、也た無しや。」牙云く、「汝道へ、江湖還つて人を碍ふるの心有りや也た無しや。」又云

㋕張拙秀才は石霜の諸に嗣ぐ、會元第六に傳あり、秀才は文人の通稱なり。

㋖庞州西堂の知藏は馬祖に嗣ぐ、傳燈第七、會元第三に傳あり。

㋗俛は低なり。

㋘勅修清規謝戒の詞に云く、「某等戒品に登ることを獲て、濫に僧倫に厠ほる、荷庇を仰いで此に拜謝す、」答へて云く、「宿に佛記を承けて、僧戒圓成す、堅忍受持して、力めて宗敎を扶けよ。」

㋙傳燈に、「手を拍つて云く、和和。」會元に、「口を拍つて和々の聲を作す。」和々は小兒學語の聲なり、今、傳燈に從つて、和尙を和々に改む。和尙はあしし、和々が舒し小兒のまれ。

㋚曹溪は六祖なり、破關擊節に、印を模に作る、從ふべし。

㋛一宿覺は永嘉大師を謂ふ、初め六祖に參ず、須臾に辭を告ぐ、祖曰く、「返ること太だ速

く、「江湖人を碍ふるの心無しと雖も、自ら是れ時の人過ぐることを得ず。所以に江湖卻つて人を碍へ去ると成す、江湖人を碍へずと道ふことを得ず。祖佛人を瞞ずるの心無しと雖も、自ら是れ時の人透ることを得ず、祖佛卻つて人を瞞じ去ると成す、也た祖佛人を瞞ぜずと道ふことを得ず。若し祖佛を透得過すれば、此の人卽ち祖佛を過卻す、也た須らく是れ祖佛の意を體得して、方に向上の古人と同じかるべし。若し未だ透得せずして、懂しくは佛を學び祖を學ばば、則ち萬劫にも得期有ること無し。」又問ふ、「如何が祖佛に瞞せられざることを得去らん。」牙云く、「直に須らく自ら悟り去るべし、這裏に到つて須らく是れ此の如くにして始めて得べし。」何が故ぞ、人の爲にせんには須らく爲に徹せしむべし、人を殺さんには須らく血を見るべし、南泉雪竇は是れ這般の人なり、方に敢て拈弄す。頌に云く、

【頌】　此錯彼錯。(眉毛を惜取せよ、令に據つて行ず、天上天下唯我獨尊。)切に忌む拈卻することを。(兩箇無孔の鐵鎚、直饒千手大悲も、也た提不起、或は若し拈じ去らば、闍黎に三十棒を喫せしめん。)四海浪平かに。(天下の人敢て動着せず、東西南北一等の家風、近日雨水多し。)百川潮落つ。(淨躶躶赤灑灑、且つ得たり自家安穩なることを、直に得たり海晏河清。)古策風高し十二門。(這箇を何似せん、杖頭に眼無し、切に忌む拄杖頭上に向つて活計を作すことを。)門門路あり空蕭索。(一物も也た無し、儞が平生を賺す、覷着せば卽ち瞎せん。)蕭索に非ず。(果然、賴に轉身の處有り、已に瞎し了れり、便ち打つ。)作者好し無病の藥を求むるに。(一死更に再活せず、十二時中什麼としてか瞌睡する、天を撈り地を摸して什麼か作ん。)

【評唱】　這の一箇の頌、德山、潙山に見ゆる公案に似て相似たり。先づ公案を將て、兩轉語を著けて、穿つて一串と作して、然して後に頌出す。此錯彼錯、切に忌む拈卻することを。雪竇の意に云く、此處の一錯、彼處の一錯、切に忌む拈卻することを。拈卻せば卽ち乖く、須らく是れ此の如く、這の兩錯を著くべし。直に得たり四海浪平かに、百川潮落つることを。可煞だ清風明月、儞若し這の兩錯下に向つて會得せば、更に一星事沒けん。山は是れ山、水は是れ水、長者は自ら長、短者は自ら短、㋐五日一風、十日一雨。所以に道ふ、「四海浪平かにして百川潮落つ。」後面は麻谷錫を持することを頌して云く、「古策風高し㋑十二門。」古人鞭を以て策と爲す、衲僧家は拄杖を以て策と爲す。(祖庭事苑の中に古策は錫杖經を擧ぐ。)西王母が瑤池の上に、十二の朱門有り、古策は卽ち是れ拄杖、頭上の清風、十二の朱門よりも高し。天子及び帝釋所居の處、亦各十二の朱門有り。若し是れ這の兩錯を會得せば、拄杖頭上に光を生ぜん。

㋐事文類聚第五に云く、「太平御覽時は五日一風、十日一雨。」

㋑錫杖經に云く、「十二環は十二因緣を念じて、十二門禪を修行することを用ふ、」十二門は、四禪、四無量、四無色定なり。

かなるや、」師曰く、「本、自ら動ずるに非ず、豈に速かなること有らんや、」祖曰く、「誰れか動に非ざることを知る、」曰く、「仁者自ら分別を生ず、」祖曰く、「汝甚だ無生の意を得たり、」曰く、「無生豈に意有らんや、」祖曰く、「意無くんば誰れか當に分別すべき、」曰く、「分別も亦意に非ず、」祖歎じて曰く、「善哉善哉、少留一宿せよ、」時に一宿覺と謂ふ、傳燈第五に見ゆ。

㋒新羅和尙は溈山和尙を謂ふ、師唐の大中の末に至りて、新豐山に於て學徒を接誘す。傳燈、會元等に見ゆ。

古策も也た用ふることを著す。㊂古人道く、「拄杖子を識得せば、一生參學の事畢んぬ。」又道く、「是れ形を標して虛しく㋺事褫するのみにあらず、如來の寶杖親しく蹤跡す」と、此の類なり。這裏に到つて、七顛八倒、一切時中に於て大自在を得。門門路有り空しく蕭索、路有りと雖も、只だ是れ空しく蕭索たり。雪竇此に到つて、自ら漏逗することを覺え、更に儞が與に打破す。然も是の如くなりと雖も、也た蕭索に非ざる處有り、任ひ是れ作者なるも、㋩無病の時、也た須らく是れ先づ些の藥を討ね喫して、始めて得べし。

第三十二則

垂示に云く、十方坐斷、千眼頓に開く。一句截流、萬機寢削。還つて同死同生底ありや。見成公案、打疊不下ならば、古人の葛藤。請ふ擧す看よ。

【本則】擧す、定上座臨濟に問ふ、「如何なるか是れ佛法の大意。」（多少の人此に到つて茫然たり、猶ほ這箇の在る有り、訝郎當して什麼か作ん。）濟、禪床を下つて擒住し、一掌を與へて便ち托開す。（今日捉敗す老婆心切、天下の禪僧跳不出。）定、佇立す。（已に鬼窟裏に落つ、蹉過了也、未だ免れず鼻孔を失卻することを。）傍僧云く、「定上座何ぞ禮拜せざる。」（冷地裏に人有りて覷破す、全く他の力を得たり、東家の人死すれば西家の人哀を助く。）定、禮拜するに方つて、（勤を將て拙を補ふ。）忽然として大悟す。（暗に燈を得るが如く、貧の寶を得るが如し。錯を將て錯に就く、且く道へ、定上座箇の什麼を見てか便ち禮拜する。）

【評唱】看よ他の恁麼に直出直入、直往直來することを。乃ち是れ臨濟の正宗、恁麼の作用有り、若し透得し去らば、便ち天を翻し地と作して、自ら受用を得可し。定上座は是れ這般の漢、臨濟に一掌せられ、禮拜し起き來つて、便ち落處を知る。他は是れ向北の人、最も朴直なり。既に之を得て後、更に出世せず、後來全く臨濟の機を用ふ、也た妨げず頴脫なり。一日路に巖頭・雪峯・欽山の三人に逢ふ、巖頭乃ち問ふ、「甚の處よりか來る。」定云く、「臨濟。」頭云く、「和尙萬福なりや。」定云く、「已に順世し了れり。」頭云く、「某等三人、特に去つて禮拜せんとす、福緣淺薄にして、又歸寂に値ふ、未審し和尙在日、何の言句か有りし、請ふ上座、一兩則を擧せよ看ん。」定遂に擧す、臨濟一日衆に示して云く、「赤肉團上に、一無位の㋑眞人有り、常に汝諸人の面門より出入す、未だ證據せざる者は看よ看よ。」時に僧有り出でて問ふ、「如何なるか是れ無位の眞人。」濟便ち擒住して云く、「道へ道へ。」僧擬議す、濟便ち托開して云く、「無位の眞人、是れ什麼の乾屎橛ぞ」と云ふて、便ち方丈に歸る。巖頭覺えず舌を吐く、欽山云く、「何ぞ非無位の眞

㊂汾陽昭の語なり。
㋺傳燈等の書に、褫の字、持に作る、永嘉證道歌に出づ。もちふること。
㋩傳燈三十、杯渡一鉢歌に云く、「離すべき無く、著すべき無し、何れの處にか更に無病の藥を求めん。」
【本則】東嶺禪師云く、三十二則、林才定上座を接するは、是れ祖師門下人を接するの基範にして、依行す可き古實を明す。

㋑內經素問の一に云く、「黃帝曰く、余、聞く上古に眞人なる者有り、天地を提挈し、陰陽を把握し、精氣を呼吸し、獨立して神を守る、肌肉一の若し云々。」又、莊子大宗師篇に見えたり。

人と道はざる。」定擒住して、「無位の眞人と非無位の眞人と相去ること多少ぞ、速かに道へ速かに道へ」と云はれて、山無語、直に得たり面黃に面青きことを。嚴頭雪峯、近前禮拜して云く、「這の新戒好惡を識らず、上座に觸忤す、望らくは慈悲且く放過せよ。」定云く、「若し是れ這の兩箇の老漢にあらずんば、這の屎床の鬼子を壓殺せん。」又鎭州に在つて齋より回る、橋上に到つて歇ふ。三人の座主に逢ふ、一人問ふ、「如何なるか是れ禪河深き處須らく底を窮むべき。」定擒住して橋下に拋向せんと擬す。時に二座主、連忙して救ふて云く、「休みぬ休みぬ、是れ伊れ上座に觸忤す、且く望らくは慈悲。」定云く、「若し是れ二座主にあらずんば、他の窮めて底に到り去るに從せん。」看よ他の恁麼の手段、全く是れ臨濟の作用なることを、更に雪竇の頌出するを看よ。云く、

【頌】斷際の全機後蹤を繼ぐ。（黃河源頭より濁り了れり、子は父の業を承ぐ。）持し來つて何ぞ必ずしも從容に在らん。（什麼の處にか在る、爭奈せん此の如き人有ることを。腳手無き人還つて他を得んや也た無や。）巨靈手を擡ぐるに多子無し。（人を赫殺す、少賣弄、打つこと一拂子、更に再勘せじ。）分破す華山の千萬重。（乾坤大地一時に露出す、墮也。）

【評唱】雪竇頌す、「斷際の全機後蹤を繼ぐ、持し來つて何ぞ必ずしも從容に在らん」と。黃檗の大機大用、唯だ臨濟獨り其の蹤を繼ぐ、拈得し將ち來つて擬議を容れず、或は若し躊躇せば、便ち㊐陰界に落ちん。㊑楞嚴經に云く、「我が指を按するが如きんば、海印光を發す、汝暫くも心を擧すれば、塵勞先づ起る」と。㊒巨靈手を擡ぐるに多子無し、分破す華山の千萬重とは、巨靈神大神力有り、手を以て太華を擘開し、水を放つて黃河に流入す。定上座の疑情、山の堆く岳の積れるが如し、臨濟に一掌せられて、直に得たり瓦解冰消することを。

㊐五陰十八界の迷。

㊑楞嚴經第四卷に云く、「譬へば琴瑟箜篌琵琶の、妙音有りと雖も、若し妙指無くんば、絲に發することを能はざるが如し、汝と衆生と、亦、復、是くの如し、寶覺の眞心各各圓滿す、我が指を按するが如きんば、海印光を發す、汝暫くも心を擧すれば、塵勞先づ起る云々」疏に曰く、「琴等は衆生なり、妙音は藏性なり、妙指は實智なり、發は用を起すなり。」海印は法身性海。

㊒祖庭事苑第一に、郭緣生述征記に曰く、「華山と首陽と、本、一山、河神巨靈擘開して、以て河流を通ず、故に掌迹存す。」

【本則】東嶺禪師曰く、三十三則、濫仰宗の大事、雲門宗に逼似するやの旨を明す、陳操尙書、樓に登るの因緣、別に雲門宗の大事に徹す、恐る可し、愼む可し。

第三十三則

垂示に云く、東西辨せず、南北分たず、朝より暮に至り、暮より朝に至る。還つて伊れ瞌睡すと道ふや。有る時は眼流星に似たり。還つて伊れ惺惺と道ふや。有る時は南を呼んで北と作す。且く道へ、是れ有心か是れ無心か。是れ道人か是れ常人か。若し箇裡に向つて透得して、始めて落處を知らば、方に古人の恁麼不恁麼なることを知らん。且く道へ、是れ什麼の時節ぞ。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、陳操尙書、資福を看る。福來るを見て便ち一圓相を畫す。（是れ精、精を識り、是れ賊、賊を識る、若し蘊藉ならずんば爭か這の漢

を識らん、還つて金剛圈を見るや。）操云く、「弟子恁麼に來る、早く是れ便を著ず。何に況んや更に一圓相を畫するをや。」（今日箇の瞌睡の漢に撞着す、這の老賊。）福便ち方丈の門を掩却す。（賊は貧兒の家を打せず、已に它の圈纍に入り了れり。）雪竇云く、「陳操只一隻眼を具す。」（雪竇頂門に眼を具す、且く道へ、他の意什麼の處にか在る、也た好し一圓相を與ふるに、灼然として龍頭蛇尾、當時好し一拶を與へて伊れをして進ぴにも亦門無く、退くにも亦路無からしめん。且く道へ、他に什麼の一拶を與へん。）

【評唱】 ㋑陳操尚書は、㋺裴休・李翺と同時なり。凡そ一僧の來るを見れば、先づ齋に請じ、錢三百を㋩襯して、是の勘辨を須ふ。一日雲門到る、相看して便ち問ふ、「儒書の中は卽ち問はず、三乘十二分敎は、自ら座主有り、作麼生か是れ禪僧家行脚の事。」雲門云く、「尚書曾て幾人にか問ひ來る。」操云く、「卽今上座に問ふ。」門云く、「卽今は且く置く、作麼生か是れ敎意。」操云く、「黃卷赤軸、這箇は是れ文字語言。」「作麼生か是れ敎意。」操云く、「㋥口談せんと欲して辭喪し、心緣せんと欲して慮亡ず。」門云く、「口談せんと欲して辭喪するは、有言に對するが爲なり、心緣せんと欲して慮亡ずるは、妄想に對するが爲なり、作麼生か是れ敎意。」操無語、門云く、

㋑陳は姓、操は名、尚書は文官の名なり、睦州に嗣ぐ、傳燈十二、會元第四に傳あり。
㋺裴休は十一則に記せり、李翺は藥山の嗣に嗣ぐ、韓退之、柳宗元、劉禹錫等と同時の學者なり、會元第五、佛法金湯編第九に傳あり。
㋩釋氏要覽に、襯錢、梵語には達嚫琴、此に財施と云ふ、今、達嚫を略して、但だ嚫と云ふ。
㋥禪法師の語。

「見說く尚書法華經を看すと、是なりや否や。」操云く、「是。」門云く、「經中に道ふ、㋭『一切の治生產業、皆實相と相違背せず』と、且く道へ、㋬非非想天、卽今幾人有つてか退位す。」操、又、無語、門云く、「尚書且く草草なること莫れ、師僧家三經五論を拋却し、來つて叢林に入つて、十年二十年、尚ほ自ら奈何ともせず。尚書、又、爭か會することを得ん。」操禮拜して云く、「某甲が罪過」と。又、一日衆官と樓に登る次、數僧の來るを望見し、一官人云く、「來者は總に是れ禪僧。」操云く、「不是。」官云く、「焉んぞ不是なることを知らん。」操云く、「近く來らんを待つて、爾が爲に勘過せん。」僧樓前に至る、操驀ち召して云く、「上座」と、僧頭を擧す、衆官に謂つて云く、「道ふことを信ぜずや」と。唯だ雲門一人のみ有つて、他勘することを得ず。他睦州に參見し來れり。一日去つて資福に參ず、福來るを見て、便ち一圓相を畫す。資福は乃ち潙山仰山下の尊宿なり、尋常㋮境致を以て人を接するを愛す。陳操尚書を見て、便ち一圓相を畫す、爭奈せん操却つて是れ作家、人の瞞を受けざることを。自ら點檢することを解して云く、「弟子恁麼に來る、早く是れ便を著す、那ぞ更に一圓相を畫するに堪へん。」福、門を㋯掩却す。這般の公案之を言中に的を辨じ、句裏に機を藏すと謂ふ。雪竇云く、「陳操只だ一隻眼を具す」と、雪竇謂つ可し、頂門に眼を具すと。且く道へ、意什麼の處にか在る、也た好し一圓相を與ふるに、若し總に恁麼地な

㋭法華經、法師功德品の文。
㋬非々想天は、四天の頂上なり、四果の聖人、四天に生じ、滅受想定を修して、阿羅漢を成じ、三界を出離す。
㋮古鈔に、圓相、又、境致と稱す。
㋯掩は閉なり。

らば、衲僧家如何が人の爲にせん。我れ且く儞に問ふ、當時若し是れ諸人陳操と作らん時、箇の什麼の語を下し得てか、雪竇に他只だ一隻眼を具すと道はるることを免れ得るに堪へん。所以に雪竇踏飜して頌して云く、

【頌】　團團珠遶る玉珊珊。(三尺の杖子黃河を攪く、須らく是れ碧眼の胡僧にして始めて得べし、生鐵鑄就す。)馬載驢馳鐵船に上す。(許多を用て什麼か作ん、什麼の限りか有らん、且く閻黎に與へよ看ん。)分付す海山無事の客。(人の要せざる有り、若し是れ無事の客ならば也た消得せじ、須らく是れ無事にして始めて得べし。)鼇を釣つて時に下す一圈擊。(恁麼にし來り恁麼にし去る、一時に出不得、若し是れ蝦蟆ならば什麼を作すにか堪へん、蝦蜆螺蚌怎生奈何せん、須らく是れ鼇を釣りて始めて得べし。)雪竇復云く、「天下の衲僧跳不出。」(身を兼ねて內に在り、一坑に埋卻せん、閻黎還つて跳得出するや。)

【評唱】　團團珠遶る玉❶珊珊、馬載驢❷馳鐵船に上す。雪竇當頭に頌出す、只だ箇の圓相を頌す。若し會得し去らば、虎の角を戴くが如くに相似ん。這箇の些子、須らく是れ桶底脫し、機關壞き、得失是非、一時に放卻すべし。更に道理の會を作すことを要せず、也た玄妙の會を作すことを得ず、畢竟作麼生か會せん。這箇須らく是れ馬載驢馳鐵船に上す、這裏に看て始めて得ん。別處に則ち分付す可らず、須らく是れ將ち去つて海山無事底の客に分付すべし。儞若し肚裏に些子の事有らば、卽ち❿承當し得ず。這裏須らく是れ有事無事、逢情順境、若しくは佛若しくは祖、他を奈何ともし得ざる底の人にして、方に承當するに可なるべし。若し禪の參ず可き有り、凡聖の情量有らば、決定して他底を承當し得ず。承當得し了るも、作麼生か會せん、他の鼇を釣つて時に一❼圈擊を下すと道ふことを。鼇を釣ることは須らく是れ圈擊にして始めて得べし。所以に❼風穴云く、「鯨鯢を釣つて巨浸を澄ましむるに慣れて、卻つて嗟す蛙步の泥沙に驟することを。」又云く、「❽巨鼇三山を載せて去ること莫れ、吾れ蓬萊頂上に行かんと欲す」と。雪竇復云く、「天下の衲僧跳不出」と。若し是れ巨鼇ならば、終に衲僧の見解を作さず、若し是れ衲僧ならば、終に巨鼇の見解を作さず。

❶先觀に、珊珊は佩聲清揚の貌。
❷睦庵曰く、驢當に馱に作るべし、驢馬物を負ふなり。
❿承當は「ひきうけて、我が物にする」と譯す。
❼圈は鈞を云ふ、說文に、凡そ拘牽連繫する者、皆擊と曰ふとあれば、擊は鈞の索なり、從容錄、鹽官犀牛話の頌に、「扁子破れて犀牛を索む、圈擊中の字來由有り」と云ふに依れば、圈擊の切、圈、彙韵にて、圈一字の義なり、今は圈套の圈と見て、牧にて馬をとる套索の如く「わな」のことなり。圓相のことなり。
❼風穴云くより泥沙に驟することなに至る、第三十八則に見ゆ。
❽列子湯問篇に云く、「渤海の東に、大壑有り、其の中に五山有り、一を岱輿と曰ひ、二を員嶠と曰ひ、三を方壺と曰ひ、四を瀛洲と曰ひ、五を蓬萊と曰ふ、而して五山の根、連り著く所無し、常に潮波に隨つて、上下往還して、暫くも峙することを得ず、仙聖之を蕃んで、之を帝に訴ふ、帝乃ち

第三十四則

【本則】　擧す、仰山、僧に問ふ、「近離甚の處ぞ。」(天下の人一般也た問過せんことを要す、風に因つて火を吹く、常の程を作さず。)僧云く、「廬